

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	029
発行日 / Pub. date	2005, 7
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

巻頭：清家 清

Headline: Kiyosi Seike

華『ka』 2005年 年間号

[巻頭記事] 鼎談：清家清の住宅デザイン（林 昌二＋藤森照信＋奥山信一）

エッセー：清家先生の思い出（山下和正）

[東京工業大学 2004年度 卒業設計・修士制作]

[2004年度 建築学科設計課題] 建築設計製図

[2004年度 大学院建築デザインコース設計課題] 建築意匠設計

[大学院建築デザインコース・ワークショップ]

[大学院講義] 建築プログラム特論（林 昌二＋橋本 純）

[ニュース・投稿]

講演会レポート：アーキグラム講演会（殿井 環）／

水島信講演会（井上 猛）、

世界の建築教育：シュツツツガルト大学（鎌田詩織）、

コンペ入賞作品紹介、仙田満教授の特別講演

[Information]

本館1F-東工大出版物

華：ka

20050000 29

大岡山 20091106 00014802 (2009)

Ka029

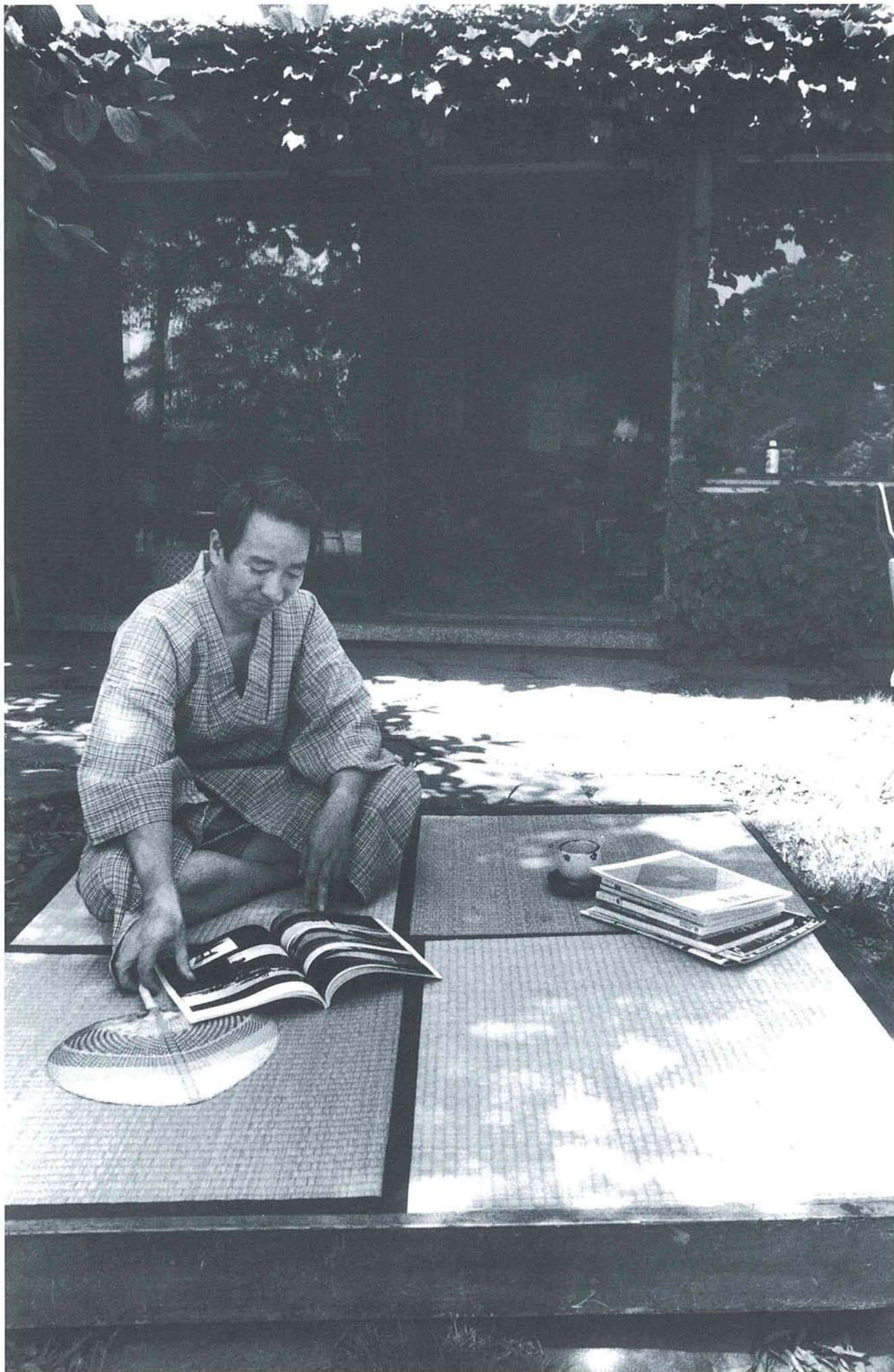
annual 2005

design journal
department of architecture and building engineering

Tokyo Institute of Technology



物

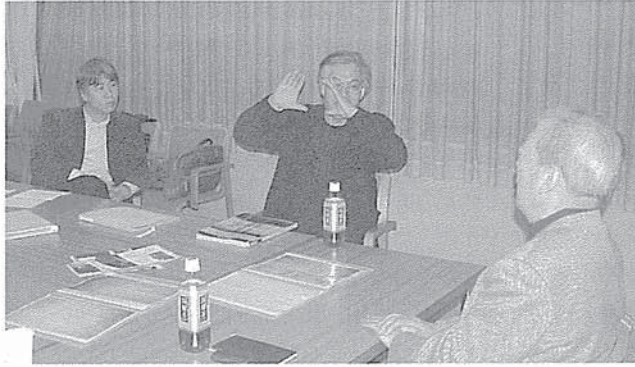


巻頭記事：清家 清

Headline: Kiyosi Seike

鼎談：清家清の住宅デザイン

Housing Design by Kiyosi Seike (1918–2005)



林 昌二 [建築家、日建設計名誉顧問]

藤森照信 [建築史家、建築家、東京大学教授]

奥山信一 [助教授]

Shoji HAYASHI (Architect, Nikken Sekkei Ltd.)
Terunobu FUJIMORI (Historian of Architecture, Architect, Tokyo University Professor)
Shin'ichi OKUYAMA (Associate Professor, Tokyo Institute of Technology)

司会：山崎鯛介 [助手]

Taisuke YAMAZAKI (Reserch Associate, Tokyo Institute of Technology)



藤森照信 — 建築史家、建築家
1946年 長野県に生まれる
1971年 東北大学建築学科卒業
1978年 東京大学大学院博士課程修了
現在、東京大学生産技術研究所教授
●主な作品
「神長官守矢資料館」(1991年)
「タンポポハウス」(1995年)
「ニラハウス」(1997年、日本芸術大賞受賞)
「高過庵」(2004年)
●主な著作
「明治の東京計画」(1982年、岩波書店、毎日出版文化賞受賞)
「建築探偵—東京編」(1986年、筑摩書房、日本デザイン文化賞、サントリー学芸賞受賞)
「昭和住宅物語」(1990年、新建築社)
「藤森照信の原・現代住宅再見」(2002年、TOTO出版)



林 昌二 — 建築家
1928年 東京都に生まれる
1953年 東京工業大学建築学科卒業、日建設計工務(現日建設計)入社
日建設計取締役副社長・副会長を経て現在、日建設計名誉顧問
●主な著作
「建築に失敗する方法」(1980年、彰国社)
「私の住居・論」(1981年、丸善)
「二十世紀を設計する」(1994年、彰国社)
「建築家 林昌二 毒本」(2004年、新建築社)
●主な作品
「掛川市庁舎」(1955年、BELCA賞)
「三愛ドリームセンター」(1963年、BELCA賞)
「パレスサイドビル」(1966年、BCS賞・BELCA賞)
「ポーラ五反田ビル」(1971年、日本建築学会作品賞・BCS賞)
「新宿NSビル」(1982年、日本建築学会作品賞・BCS賞)

山崎 今回の鼎談のテーマは「清家清の住宅デザイン」です。本日は清家研究室の卒業生という立場から林昌二さん、建築史家として東大の藤森照信先生にお越しいただきました。奥山先生にも加わっていただき、特に清家先生の初期の住宅作品について、それぞれの立場からお感じになっていることをお聞かせいただければと思っております。

1. 日本におけるミース的なもの

林 私が存じ上げているのは、先生が助教授になって研究室を持たれて二年後くらいでしょうか。(林) 雅子はたぶん最初から研究室に入ってきたんじゃないかと思うんです。そのころは「うさぎ幼稚園」の仕事をやっていて、幼稚園の園長さんが設計料を「お饅頭」で持っていらしたことを覚えています。私が最初に連れて行ってもらったのは南平台の「コの字型平面の家」ですね。これは雅子が設計を担当していて、清家先生がちよくちよく現場へいらした。たぶんその時についていったのが先生の設計した家を見せていただいた最初じゃないかと思えます。コの字型で道路に面して、二つの妻面があって、二つの妻面のスタイルが違うというのが不思議な感じでした。それから「森博士の家」とか「斎藤助教授の家」を拝見したわけです。「森博士の家」はそう斬新な感じはしなかったんです。むしろ廊下に沿って畳の部屋が並ぶという点がなんと「保守反動」な戦前型のプランであろうかとびっくりしましたね。「斎藤助教授の家」にはあのキャンティレバーとか色々びっくりしました。あれは防空壕の跡みたいなのを基礎に利用してその上に乗っているらしいんですが、よくわからない。ところがその後でつくられた先生の「私の家」にも地下がありますよね。わざわざどうしてあそこで地下をつくられたんだろうか、「斎藤助教授の家」の地下と何か関係あるのかと思いましたがね。そんなことが最初のころの記憶に特にありますね。

藤森 僕の場合は研究対象として一応の知識があってから見たんですが、やはり実物を見て「森博士の家」と「斎藤助教授の家」が初期のものでは良いと思いましたね。「森博士の家」で僕が一番驚いたのは、床の間に銀紙が市松模様貼ってあった点なんです。桂離宮の真似ですよ。桂離宮については当時、丹下さんの広島ピースセンターが桂離宮の腰高のプロポーションを意識したと本人も言っているんですが、僕は桂離宮と清家さんをそれまでつないでいなかったんです。あと思った。銀紙をだんだんに貼るとするのは効果的だし、僕はああいう華やかさが清家さんの作品にあるというのを知らなかったんです。その時にあの方が京都の人だったというのを思い出して、当たり前だけどやはりそれはびっくりしましたね。完成度は「斎藤助教授の家」の方がもちろん高いし、良く知られているあの柱の位置をちょっとずらした点は実物を見てやはり効果的だなど思いました。それともう一つ、「斎藤助教授の家」で珍しいの

以下は、2005年3月9日(水)に緑が丘4号館会議室で行われた鼎談の模様を、学生編集委員の鈴木宏昌 [M2]・府中拓也 [M1]と編集部 [担当：山崎] がレポート・編集したものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。



うさぎ幼稚園 (1949年)

はあの雨戸というか耐震壁で、この耐震壁は基礎から横に飛び出しているんですね。耐震壁と戸袋を一体的に処理してしまっている点に上手さを感じたのと、それと僕はこの建具の扱い方を見たときに谷口吉郎さんの「藤村記念堂」と同じような展開だと思ったんですよ。藤村記念堂も横長の立面に障子と戸袋が展開して行くというか、それを取ったら廊下だけみたいな建築なんですけれど、そのときに藤村記念堂っていうのは実は清家さんの中に流れているんじゃないかと思った。篠原先生の「から傘の家」を見たときにも同じようなことがあって、あれは障子が居間に並ぶんですが、その真ん中に正体不明の刀の「つば」の切り紙があるんです。あれは篠原さんが朝倉摂さんに頼んで切ってもらったものらしいんですが、じつは藤村記念堂の障子にも真ん中に島崎（藤村）家の紋が切っている。僕は谷口吉郎さんと篠原さんがまさかあんな形でつながるとは思わなかった。それで僕はもしかして谷口先生と清家先生、篠原さんには障子とかファサードに出てくる開口部をカバーする建具の扱い方にずっとつながっている部分があるんじゃないかと思った。篠原先生と清家先生、清家先生と谷口先生との関係を明らかにしないと書けない仮説なんですけれど、色々と考えさせられましたよ。

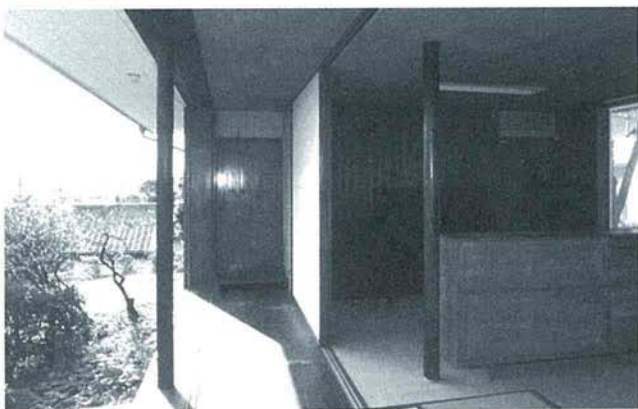
奥山 清家先生と篠原先生との間には、戸袋についても同じような作風上の類似点があって、篠原先生の「久我山の家」、あのピロティーで有名な家も一階の正面両袖に耐震壁があるのですが、やはりあれも雨戸で隠されています。全面横格子のパターンからよく桂離宮との関係で語られていますが、「斎藤助教授の家」との関係が直接的だったかもしれないですね。

林 清家先生は藤村記念堂に関係しておられますね。谷口さんをお手伝いした主なものは藤村記念堂だったと直接お聞きしたことがあります。相当強い影響を持っているのではないのでしょうか。

奥山 僕は清家先生が退官されてから大学に入ったので直接教えてもらったことはなくて、約10年前にある雑誌で戦後の住宅の記事を書くことになったときに初めてお目にかかったんです。ご自宅をご紹介いただき、色々とお話というか冗談の連発を聞かせていただき、面白い方だなと思いました。その頃、戦後の住宅設計を切り開いた池辺陽さん、広瀬鎌二さん、増沢洵さん、そして清家先生を共通で取り上げる企画が雑誌上でけっこうあったんですが、そういった中で清家清がほとんど位置づけられていないという印象が私の中にありました。ちょうど学位論文が終わった時だったので、戦後50年の住宅デザインという企画で雑誌に文章を書く機会を利用して、清家先生を正確に位置づけられないかと思いましたが、やっぱりどうも清家先生が最初の流れからはずれちゃうんです。その流れというのは、戦後は民衆の思想をどうやって住宅に組み込むかがテーマであったはずだということなんです。具体的には、池辺陽も広瀬

鎌二も増沢洵も、一つは新しい時代に相応しいプランをつくること、もう一つは、一見特殊解に見える構法をテーマにしながら、「工業化」を念頭に置くことで、常に一般化を目標とすること、この二つが当時の住宅設計におけるコンセプトの中心だったのではないかと、ということなんです。ほとんどの建築家は、今お話しした流れを軸として、そこからの振れ幅の中に整理することができたのですが、清家先生だけが位置づかなかった。それがなぜか分からなかったんです。その企画のときに清家自邸を取材に行ったんですが、本物を見てもなかなか分からないんですよ。見ていると何か「生活を空間化する」上手さみたいなものは十二分に面白いわけです。でもやっぱりあの当時の流れとして位置づかないし、清家先生の意図の中心が読めなかった。ところがつい先日、「斎藤助教授の家」の撮り直しがあった時に見せていただく機会があって、そのときに何かちょっとわかった感じがしました。それは清家自邸と全く違って、清家自邸を見たときには「生活を空間化する」といった思想化が一体何に向かっているのだろうかと思ったんですけど、「斎藤助教授の家」を見たときに具体的な生活に根ざした住宅ではなくパビリオンのようなふわっと浮き上がる印象があって、「あれ、住宅じゃないかもしれない」といった感じ、神殿のような感じがしましてね。もちろん今住まわれていないという状況も多分にそうした印象に作用していたと思うんですが、清家先生の中には「生活を空間化する」上手さの一方で、「住宅ではない空間」が常にイメージの源泉として存在しているのではないかと。そこが同時代の建築家と違うところなのかなという、そんな印象があったんですよ。実物見るまでわからなかったんですけど。

藤森 僕は歴史家として見ていて、確かに清家さんは戦後モダニズムというか戦後の社会の中では異質な建築家だと思う。だけどミース自身もコルビュジエやバウハウスの中心にいた人達が言ったような社会思想的なことをしゃべらない、そういうことに興味のない人でしたから、それと近いとも思いましたね。もう一つ言えるのは、「斎藤助教授の家」は簡単に言ってしまうと木造で作ったバルセロナ・パヴィリオンですよ。材料は違いますけど、やはり清家さんの作品にはミースのいくつかの作品に見られる「ミース的な空間」のような感覚が強くあるように思います。むしろ僕の見方では、「ミース的なもの」というのは東工大にのみ流れるんですよ。当時の日本では圧倒的にコルビュジエの影響が強かったんですけど、そういう中で「ミース的なもの」っていうのは日本では戦後、清家さんに始まって、日建設なんかにもそういう感じがするものがある。コンクリートの力強さよりは、やっぱり鉄や木造のメンバーやガラスが好きで、それは清家さんから始まったんじゃないか。日本では鉄やガラスの技術は圧倒的にコストのかかるものだったから、「ミース的なもの」が社会的にちゃんと作られるのは



齋藤助教授の家（1952年）

日本ではだいぶ遅れてしまったけれど、むしろ独特なさわやかさというか洗練というか、東工大のデザインって何かそういうものがずっと清家さんから流れていると思います。清家さんのああいふ感覚というのは当時の日本の建築界では稀ですよ。丹下さんの世代に聞くと、ミースっていう名前は知っていたけどバルセロナ・パヴィリオンは知らなかったって。当時は圧倒的にグロピウスがいて、次にコルビュジェがくるわけです。その中で清家さんというのはちょっと早すぎたところがあるんですね。

奥山 清家先生はミースをご存じだったんですかね。

藤森 いやそれが興味深いんだけどね、清家さんに聞くと、例の調子で話が笑と共に消えていくんですよ。

林 清家さんの自邸の庭から見て右側の窓が地下へするすると入るようになってますよね。ブルノにあるミースのトゥーゲントハット邸が同じなんです。あれもやっぱりスーッと下りるんです。それがヒントになったんじゃないかって私は想像して、先生に「ご覧になったんですか？」って聞いたら、また誤魔化されちゃった。

奥山 通常の建築家のメンタリティーではなかなか思い付かないアイデアですよ。清家先生は車とか機械が好きだったからあのような発想がありえたのですかね。

林 これは私はびっくりしたんです。清家先生の家を見て、それからブルノを見て、「あ、知ってたのか」って思ったんですけどね。でもまあ全然関係なく考えるってこともありえますけどね。

藤森 結局、清家先生の上の世代、日本工作文化連盟の人たちというのはみんなグロピウスの影響を受けたわけで、それは留

学もしていたし当たり前なわけです。僕はグロピウスは近代建築の「原点」だと思うんですけど、一人原点ゼロを打ちちゃうと後はそこからどうするかを考えなくちゃいけない。例えば丹下さんは「ミケランジェロ頌」で明確に宣言してコルビュジェに行くわけですし、それがその後の主流になって行くわけです。その中で清家先生はミース的な方へ行くわけですよ。ミースは原点ゼロからシンケルに行くけれど清家先生は桂離宮に行く。今からするとオーソドックスなやり方ですけど、当時としては何せみんなコルビュジェ的な方に行っていたから、魅力はあるけれども何とも言語化しづらい人になるんだと思うんです。

奥山 「齋藤助教授の家」では、平面がどこか不思議なバランスを持っていて、完全な矩形からちょっとはみだして壁が流れる感じ、そういうところに「ミース的なもの」があるというのはわかるんです。ただミース自身は生き方として一つのプロトタイプを一生追い求めた人という気がするし、それを最後まで全うした建築家だと思います。ですが、清家先生を見ていると一つのプロトタイプを追い求めるというより、何かこう複数を追い求める中で一つひとつが定着していくといいですか、そんな感じがするんです。たとえば「齋藤助教授の家」の場合は、柱の位置も含めてちょっとアンバランスな壁の配置が不思議なバランスを持っていますが、一方で「森博士の家」では、ほぼシンメトリーなわけです。それから清家自邸と「齋藤助教授の家」もかなり違う感じがして、清家自邸では床の扱い方によって徹底的に民家的なスペースが作られています。齋藤助教授の家では貴族的というか、ふわっと浮き上がるような床の捉え方を。何かミース的な空間をつくりながらも複数の空間イメージを追い求めている所がミースとは違う理想主義を感じます。そこが捉えどころのなさと同時に清家先生の当時の豊かさを作ったのではないかという気がするんですね。だから、もしかしたら美的にはミース的なところがかなり入っているけれども、メンタリティーとしてはコルビュジェ的な感じがするんじゃないかと思うんです。

2. 清家清の住宅デザイン

山崎 初期の住宅作品をそれぞれ比較すると、デザインに共通点と異なる点があるように思います。その辺はどのように理解されていますか。

藤森 清家さんの住宅では屋根面が見えないで軒裏だけ見える。清家さんは屋根と軒を分離した最初の人ですよ。あれを分離するのはなかなか大変なことで、軒先は屋根の属性であって付属物だったんですよ。本体を切って属性だけ残したっていうのは、僕は清家さんが最初だと思う。

林 そうでしょうね。

藤森 ああいう風に本体と属性を分けるっていうのはかなり考えないと出てこないですよ。そのことで僕が聞いたことがあるのは、石元泰博さんが日本に戻って来て初めて桂離宮の写真を撮ったときの話で、彼はそのときに屋根を切るんです。あれはけっこう決断だったって言ってましたね。何せ屋根は日本建築の命でしたから。その決断がなぜできたかっていうと、シカゴでミースのレイクショアドライブ・アパートメントの足元を撮ったことがあって、それと同じように撮れば写真になると思ったんですって。学校の写真の授業で垂直・水平をちゃんと取れていることを教える授業があったらしいんですが、そのとき初めて近くから撮ったと。そんなことがあって、だから桂離宮でもいけると思ったそうです。で、清家さんはおそらくそれとは別に同じことを同時代にやっているんです。それはとても面白いことで、清家さんは間違いなく日本建築の伝統を引いているのに日本建築の命である屋根を取ってしまった。もちろん清家さん以前に誰かいたかもしれないけれど。

林 それからやはり何と言ってもアルミのコイルが使えるようになったのが大きい。これはどうして使えたのかっていうと、戦時中に航空機材としてアルミを作りすぎて余っちゃった。それで住友軽金属が東工大に使ってくれて言ってきたんじゃないですか。それを誰かが仲介して「じゃあやってみよう」ってことになったんじゃないかと思うんですね。

藤森 それじゃあむしろ高級品というよりは余ってしまったもの、飛ばなかったゼロ戦の残りですか。空襲でやられた東京駅の修復はアルミでやってるでしょ。あれは戦後に海軍の人たちが国鉄に来たときにアルミを一種の持参金で持ってきたものだと思います。アルミって言うとは今は高級な感じだから、よくこの時期にやれたなあと思ってましたけど。そういうことか。

林 だからアルミは戦争が終わったこの時期の特殊な条件にうまくはまったんですね。でもやっぱり一番最初に見たときは異様だったんじゃないでしょうか。でもだんだんわかってくるわけで、なにしろ屋根の重量が減るから非常に楽になるわけです。でも大変な決断だったでしょう。

山崎 タイプの違いについてはどうでしょうか。林さんは初期の住宅の構造形式がそれぞれ異なっている点に注目されていますが。

林 かなり初期にタイプの非常に違うものを3つ4つ出したっていうのは他の人にはないことですね。その場に応じて考えていく、あらかじめ何かを考えて適用するのではないという姿勢が

そこはかなり現れているんじゃないかと思います。それからどれもよく「ワンルーム」という言い方をされてしまうけれども、これも先生は非常に嫌っておられて、自然に暮らしていると融通無碍に舗設をして住むようになっていくのであって、ワンルームを意識しているんじゃないですよ、とおっしゃってましたね。意識としてワンルームじゃないっていうのは、かなり大事なこともかもしれない。

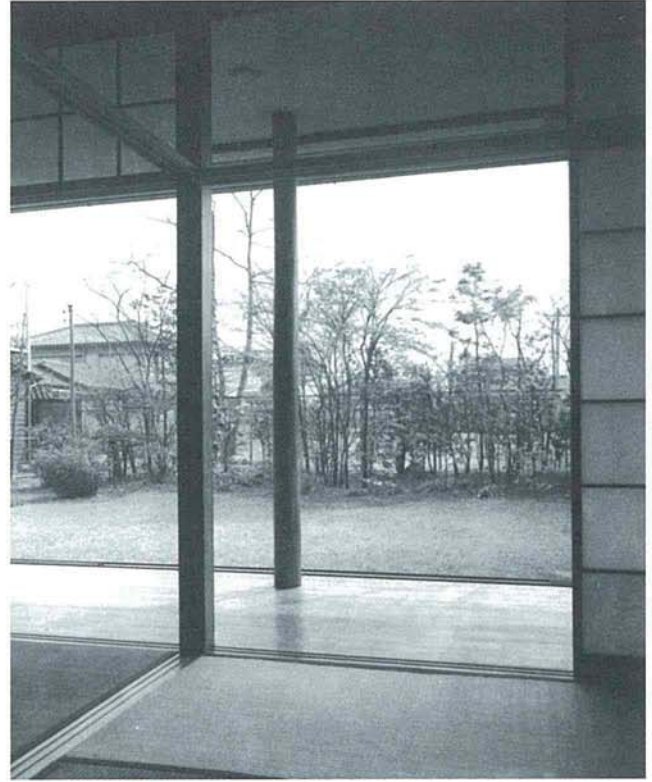
奥山 それから先程お話しした複数のプロトタイプを追うという清家作品に対する実感からお話ししますと、敷地というか立地の状況が建物の違いになんとなく反映されているように思うんです。「森博士の家」では、西側接道のごく一般的な平坦地ですので、北側にエントランスとサービスを兼ねた小さな庭を確保して南に庭を広くとり、各スペースの南面配置を徹底させていますが、「斎藤助教授の家」の敷地は、道路から半階分立ち上がり、なおかつこんもりと盛り上がっているの、敷地のほぼ中央にあの有名なキャンチレバーを含んだ腰高の床レベルの設定が構想されたのではないかと思うのです。また、「宮城教授の家」の敷地は路地の突き当たりで、広さも適度にあるというほんやりとした特徴のないものなのですが、この敷地条件が、初期の清家作品の中では珍しい方向性の希薄な正方形平面を生み出したのかもしれない。清家自邸は、広い敷地の中に母屋を含めて納屋などいくつかの既存家屋があり、それらとの何らかの接続が当初から条件にあったと考えられます。清家先生のご自邸ですので先生ご自身の生活像が優先していたとは思いますが、地べたがそのまま家の中に入り込んで行く空間形式は、そうした敷地の前提条件と無縁とは思えないのです。現代の建築の世界では、「環境をどう捉えるか」とか「反映させるか」といったテーマが割とポピュラーなのですが、清家先生はそういうことを無意識の中でやっていたのかなという感じがするんです。それが藤森先生のおっしゃる清家流の独特の屋根の捉え方なんかは共通しながらも、複数のタイプを同時期に提出できたこととつながっているのではないかと思うんです。

3. 戦争とエンジニアリング

林 「森博士の家」のとき、雅子と私が「これはどうも非常に保守反動な先生だな」と思ったのは、当時の主流だった池辺さんとかは当時の社会情勢に敏感で、いわば左翼的な言説を書かれていたんですけど、清家さんはほとんどそういうこと言わないし、言うとするとは直ちに帝国海軍の話が出てくる。冗談にするんですけど、まあ冗談にしても帝国海軍が出てくるっていうのは当時の雰囲気としてはかなり気になりましたね。何しろ軍とか戦争とかいうことを極端に否定して消し去っていた時代ですから。冗談でも話の中で軍人勅諭の一節が突然出てくるんですよ。みんな黙っているわけです。この人はどうしてこんなことを平気で言えるんだと。そういう感じでしたね。



森博士の家（1951年）



藤森 当時としては言っている冗談と悪い冗談とがあるような感じだったんでしょうかね。やはり清家先生は戦後民主主義に対する何かある独特の違和感を持っておられたんですかね。

林 そうだと思います。例の調子で冗談っぽく言われたんですが、それはかなり本心なんでしょうね。それを理論的に言わなかっただけでね。もし理論的に構築してははっきり言説として出していたら、かなり大問題（笑）。

奥山 「時間」に対する捕らえ方が清家先生は独特だったんでしょうかね。建築家だったら時代に合ったものを作らなくちゃいけない、というデザイナーとしての使命感みたいなものはいつの時代でも大なり小なり必ずありますよね。しかし、必ずしもそればかりではないという。清家先生は、そういう「時間」に対する強迫観念から意識的に距離を置きたかったのかと、今の話を聞いていて何かそんな感じがちょっとしましたけどね。

藤森 海軍の人たちには軍国主義をやったのは陸軍であって自分たちは引きずられたって意識が強くなるわけですよ。自分たちは合理主義だったという。それから当時の軍は木造大スパンというかなり合理的なことをやっていたわけです。僕が清家先生にあの薄い木造がどうしてできたかって聞いたら、あれは海軍でさんざんやった技術だと。同じことを広瀬鎌二さんも言っているんです。彼は陸軍工兵隊だったと思いますけど、素人の兵隊を使って実験しながらつくっているようなもんだって、でもそれはすごく役に立ったと言っていました。清家先生と広瀬さんは工兵だったから、この二人はその大事なことを着実に学んでいるんです。

林 そうです。最初の仕事は木造格納庫でしたから。だからそれを作って言われて作ったときは大変だったと思うんですね。よくまあ壊れずに済んだ。それから海軍に行った方はやはりかなりエンジニアリングに関心が強い人たちでしたね。

藤森 インターナショナルですね。軍艦には国籍もない。だからおそらく当時木造でちゃんとエンジニアリングをやってい

た人はコンクリートは嫌だったろうと思う。だってわからないんだもの。中身は他人がどろどろと詰めて終わりではね。鉄骨のほうがちんと考えられている。

林 コンクリートは私も嫌いですね。大体ルビュジエも最初の頃はまあいいんですけど、後に曲線を使って非常にマッシブな物をつくりますよね。ああいうのは私はとても嫌だったですね。もうその頃は私たちの育ってきた感覚と合わないものが入ってきた感じでしたね。あんな解析不能な、今だったらコンピューターでできるかもしれませんが、あんなものどうやって作るんだろうと思いましたよ。

藤森 それとコンクリートの場合は作っている時の実体感がないんですよ、実体が入る型枠を作って終り。要するにほとんど博打に近いんです。エンジニアリングにはあの博打的なものはないですよ。

林 めちゃくちゃだと思います。南大沢でどんどん公園のアウトが崩れていったというのは、要するにコンクリートというものに実体感がなかったんじゃないかと思うんですよ。それからコンクリートっていうのは化学変化で固まるものなのに、それをやる人たちにその意識がなくて、ただジャブジャブ注ぎ込めばいいと思ってやっている。あれでは崩れるのは当たり前だったんじゃないかと思えますけどね。だからコンクリートはどうも私はあまり好きじゃない。ただ木造ではできないし、当時は鉄が高かったですからね。

藤森 日本の鉄は、性能が悪かったですからね。

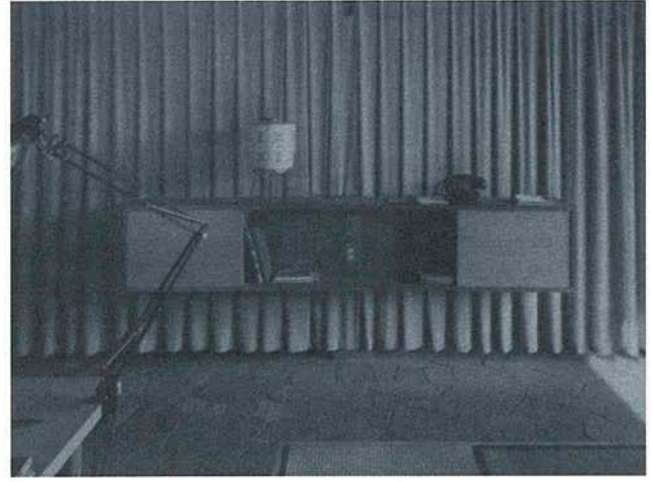
奥山 清家先生はなんで「私の家」をコンクリートで作られたんですかね。コストパフォーマンスですかね。その訳のわからないものに取り組むわけですよ。

林 安いからですよ。木造とはちょっと比較しにくいですけどね。でもまあコンクリートブロックには実体があるんです。

奥山 清家自邸の鉄筋トラスはご自分で構造計算もやられたって聞いていますが。



私の家（1954年）



藤森 大学出て海軍行ったら少尉ですよ。要するに部下しかいないんですから誰も教えてくれない。それはもう必ずやっただでしょう。

林 それから清家先生は色々なこと勉強する方だったんですね。人知れず色々なことを勉強しておられたように思います。私はその辺のこと知らないもんだから、どうしてできるんだろうって思っていましたけどね。でもあそこ軍がコンクリートに興味をもっていたら日本のコンクリートの技術はもっと進んだでしょう。なにしろ軍はコンクリートに全く関心を持っていませんでしたから、酷い状態でずっと戦後まできちゃったんです。青島にドイツがつくったコンクリートというのは何しろ驚くほど硬かったそうです。だから日本もそれくらいのことはできたはずだと思うんです。

藤森 沖縄のコンクリートは米軍のコンクリートでしたから本土と全然違いますね。スランブはあっちゃいけないわけですから。おそらく軍がコンクリートをちゃんとやっていたらだいぶ違ったでしょうね。ところで鉄骨が自由に使えるようになった頃って清家先生はどんなことをなさっていたんでしょうかね。

奥山 「続私の家」では、鉄骨を真壁みたいな使い方です。

林 橋みたいな建築を割とやっておられますね。「三津のシーパラダイス」や「札幌の高等専門学校」。鉄骨は好きで、あれは明らかに「橋」をやりたくてつくった建築という感じですよ。何も本当に橋にすることなかったんじゃないかって思うんですけれどね。

山崎 同時代の他の建築家、例えば池辺さんと比べてときに見えてくる清家先生の特徴にはどのようなものがありますか。

奥山 清家先生の場合、すべてを厳密に決めなくてもいいんじゃないかっていう適当さ、清家先生は「ゆとり」なんて言葉で言ったりしてますけどね。そういったルーズな部分が清家先生の特徴なんだろうと思うんですよ。それが篠原先生になると「ゆとり」が思想的に反転して「無駄な空間」とか一挙にすっ飛んでいくんですけど、清家先生はそこですっ飛ばない。どこかいい加減なところがあっても良いという適当さでしょうか。生活の全てを計量化することに空間の合理性を求めた池辺さんとは対照的ですよ。

藤森 池辺先生はそれに比べるといい加減を絶対に許さない。あのGMモジュールの数式なんてまさにそう。それと池辺先生の場合は「日本」を絶対入れないという意識が強かった。そ

れは戦争中に日本浪漫派に入れ込み過ぎてしまった反省からなんだけれども、もう一つは「美」を言うてはいけない。おそらく池辺さんは根が美的な人で、戦前の日本浪漫派に対する反省があって戦後はその反対をするわけです。戦後は共産党系の運動の中核で理論家でしたから、テーマを「民衆」に向けてそのためには小住宅の量産化が必要だと。それから鉄が使えるようになったら鉄に行くし、とにかく「伝統」とか「美」というものを過剰に排除するのね。伝統論争がおきたときも池辺先生の場合は「フンッ」て感じですよ。でも、もしかしたら二人はうんと似ていたかもしれない。ただ池辺先生は過剰に反応するけど、清家先生はそういうことがなくて素直に行く。だから池辺さんは自分もやりたいと思っていたかもしれませんね。

林 いやあ非常に似ておられるというのは私も感じてました。二人が話をしているのを聞いていると、なんだかこれ同じような感覚の方々だなと思ってました。表現は違うんですけどね。

藤森 清家さんと池辺さんって対談なんかしてるかな。企画したと思うけど両方とも受けなかったらうね。

奥山 たしか座談会はあったと思いますけど、対談はないと思いますね。

林 そうでした。公になっていないかもしれませんが。だけど清家さんと池辺さんとその周囲の学生、お施主さんが集まって話をしたのは何回かありましたね。

奥山 研究室交流はあったんですか。

林 ええ、割合にね。お二人とも好きだったみたいですね。仲良かったですよ。ただ清家さんがああいうタイプの人だから真面目な話になると難しいですね。

奥山 清家先生は林さんがいらした頃から、あの独特の受け流す感じでお話しされる方だったんですか。若いころは颯爽とした言論で時代を切ってらしたのかと思いましたが、かわしっぱなしですか。

林 そりゃあもうずーっと変わらないですよ。偉いもんです。またよくポンポン出てくるんですよ。あれは特殊な才能ですよ。

藤森 戦争の体験だと思いますよ。戦争中をどう過ごしたかが大きくて、池辺さんが入り込んでしまったのに対して、清家先生は海軍だし技術将校だから割りとスーッときてしまう。

奥山 でも清家先生はどうして「美しさ」を持ててくるのができたんですかね。

藤森 彼の中では戦争体験って連続性の強いものだったんじゃない

ないですかね。

奥山 清家先生の方が強かったんですかね。池辺さんの場合は断ち切ってる。

藤森 池辺さんは戦争に行っていないんです。現実としての戦争と関係していない。だからかえって戦争に対して原理主義的に燃え上がるというのが池辺さんの場合はあったんじゃないですか。戦争ってというのは建築家にとってもそこをどう過ごしたかっていうのが相当大きい。僕らはそういうことを歴史として知っているけれど、林さんはちょっと上の人たちが過ごしてきたその辺の時期が実感としてあるでしょう。

林 そうですね、なかなか面白い時代だったと思いますけどね。また戦争に対する感覚が人によって極端に違ってましたね。そしてまた全体としては戦争は地中に埋めてしまおうっていう感じがあって。これはとても良くなかったと思うんです。いまだにその跡を引いている。まずいですねえ。やっぱりなんでも公にしないとダメだと思いますがね。

4. 雑木の庭

山崎 建物以外の部分、例えばアプローチ空間や庭についてはいかがでしょうか。

林、アプローチはみんなあまり強い印象はないですね。清家さんの自邸もいまだにどこから入っていったかよく思い出せない。

藤森 僕は「斎藤助教授の家」は清家先生の後について行ったんですよ。もう庭からひよこひよこ行っちゃう。もう他人の家だか自分の家かわからないようなところ、垣根の横からふらふら入って行って、ひどくルーズな入り方をした記憶がある。

林 それと同じようなことは庭についても言っておられますね。「庭は造らないんだ」ってね。自然に木が生えてくるよ、みたいな言い方で。他の方のように家に合わせて庭を造るという感じがしないですね。

藤森 僕もそれを思ったのは、「森博士の家」の昔の写真を見るといわゆる雑木がただ植えてあるだけ。戦後の日本の庭に大きなショックを与えたのは雑木の庭なんです。松も池もない雑木の庭ってというのはそれまで庭じゃなかったから。雑木の庭は戦後のモダンな庭のスタートなんですよ。それを清家さんはやっているわけです。僕は清家先生に意識してやったのか聞いたんですけど、そしたら例の調子で、別に意識したわけじゃないけどお金がないから何でも植えて、そういうのでいいと。僕が聞いたとき、清家先生は自分はそういうのを意識してやったわけじゃないけれど、ただそれ以降そういうことが後から出てきたって事は知っておられた。清家先生の後から流行り始めたのかどうか僕は知らないんですけど、雑木の庭って割と素直なモダンな庭ってことで、その後ずっと戦後の日本庭園のある種の流れを作るんです。

林 これはひとつ新たな視点ですね。ええ。かなり重大な視点

ですね。それがお屋敷じゃないという一つの根拠にもなっているんですね。清家先生は「〇〇邸」という呼び方を一切しておられなかったんです。「森博士の家」とか、「斎藤助教授の家」とか。「邸」ではないんだと。「お邸」ではないんだと。我々は不用意に使ってしまいますけど、それはかなり強い意識だったんじゃないかと思います。

清家清先生は、平成17年4月8日にご逝去されました(享年86歳)。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

Three architectural professionals discussed the late Professor Kiyosi Seike's residential designs. First, Shoji Hayashi, an architect apprenticed under Seike at Titech (1951–3) remarked how Seike's designs were unique among his contemporaries, as seen in the “reactionary” plan of the Dr. Mori House (1951), in which a pair of tatami-matted rooms with shoji screens were simply aligned along a corridor.

The architectural historian Terunobu Fujimori then mentioned Seike's preference for Mies van der Rohe, as shown by his plans and elevation drawings — another aspect of his uniqueness among the Corbusier-oriented architects of his generation. Hayashi agreed with this, noting that Seike even makes reference to some of the architectural details of Mies's work, such as in the window fittings at the Seike House (1954).

Shin'ichi Okuyama, Associate Professor at Titech, pointed out that Seike's improvisational design methods, considering context as an important ingredient, enabled him to produce three or four housing prototypes in a relatively short period, and that these are still meaningful for present-day architectural design.

The discussion moved to what stimulated the uniqueness of Seike's works. As indicated by Fujimori and Hayashi, one of the reasons for Seike's uniqueness must be found in his experience of the war; Seike joined the imperial navy as an engineer shortly after graduation. Thus, Seike's mentality was formed by his experience in this most liberal and aristocratic branch of the services, and his technical approach to design premised on his work as an engineer.

As he himself once declared, Seike never designed “gardens,” often simply leaving plants as they grew naturally at the site. Fujimori pointed out that Seike's landscaping policy was one of the earliest examples of modern gardening techniques — a relatively new trend in the 1950's. Hayashi agreed, noting that this attitude may also explain the fact that none of the houses he designed were styled with the word “villa.”

清家先生の思い出

山下和正（1959年卒）

清家先生のことを最初に知ったのは、高校時代に読んだ月刊誌「科学朝日」に先生が書かれたヨーロッパでの御自身のスクーター旅行の連載記事だった。これは当時愛読していたこの雑誌のなかでは異色の記事で、東京工大には面白い先生がいるものだと強く印象に残った。

しかし大学4年になって清家先生の研究室に入れていただきたいと思ったのはこの記事のためではなく、先生の研究室で発散していたデザインの匂いのためであった。これは工学部の中にあってやや異色な匂いであったが、実際に研究室に入ってみると中では特にデザインが熱く語られているわけではなく、大したデザインの匂いもなく、やや拍子抜けであった。匂いはしても中へ入れば自然で何も感じないというのが清家流だったのかもしれない。

先生は冗談と猥談が好きでいつもそれらが研究室の中を飛び交っていたが、猥談の方はわれわれ学生にはそんなに面白いものではなかった。しかし大学教授が研究室で猥談を楽しんでいるという事実の方が面白かった。研究室では同輩・後輩に対して「君」「あなた」のことを「オジサン」と呼び合う風習があったが、これはもともと先生から始まり研究室外にも流行したもののようであった。

私が先生から学び、また大いに感謝していることの最大のもの、先生の人に対する一寸した親切である。ご自分が一寸手を貸せば何かうまく回るというようなことがあれば、先生は仕掛け人よろしく、よく声をかけてくださった。

例えば私が1964年に村口昌之君（1959年卒）の紹介でドイツの設計事務所に行くことが決まったとき、先生はたまたま先生を訪ねてきたドイツ人の日本庭園案内をするように私に声を掛けて下さった。先生は私がドイツに行ったとき少しでも知人がいた方が良くと考えてそうされたのであろう。事実そのドイツの方とはその後ドイツでお会いしたりして交友が続いた。このようなことは私にだけでなく、多くの方々に対しても同様であったと思う。よい師にめぐりあうことは誠に幸せなことである。



米国からヨーロッパに渡り、スクーター（Lambretta Ld 150）でまわっていた頃（1955年）

建築家・清家清展 告知

●松下電工 汐留ミュージアム

東京都港区東新橋 1-5-1 松下電工ビル 4階

《私の家》から50年

会期 = 2005年7月23日（土）～9月25日（日）、
10:00～18:00

●シンポジウム 会場 = 松下電工ビル ホール

「清家清のすまいに学ぶ」 2005年6月25日（土）、14:00～17:00

北山 恒（横浜国立大学大学院教授）×

塚本由晴（東京工業大学大学院助教授）×

司会・藤岡洋保（東京工業大学大学院教授）

「進化する私の家」 2005年8月6日（土）、14:00～17:00

林 昌二（建築家）×隈 研吾（建築家）×清家 篤（慶應義塾大学教授）×

司会・安田幸一（東京工業大学大学院助教授）

主催 = 松下電工汐留ミュージアム、建築家清家清展実行委員会

●日本建築学会 建築博物館 東京都港区芝 5-26-20

図面に見る清家清の世界

会期 = 2005年7月23日（土）～8月24日（水）、
9:00～19:30（土・日は17:00まで）

●シンポジウム 会場 = 建築会館 ホール

「モダンリビング再考」 2005年7月23日（土）、14:00～17:00

野沢正光（建築家）×貝島桃代（筑波大学講師）×

司会・奥山信一（東京工業大学大学院助教授）

主催 = 社団法人日本建築学会建築博物館、建築家清家清展実行委員会

●札幌市立高等専門学校 札幌市南区芸術の森 1丁目

学び舎はデザインテキスト

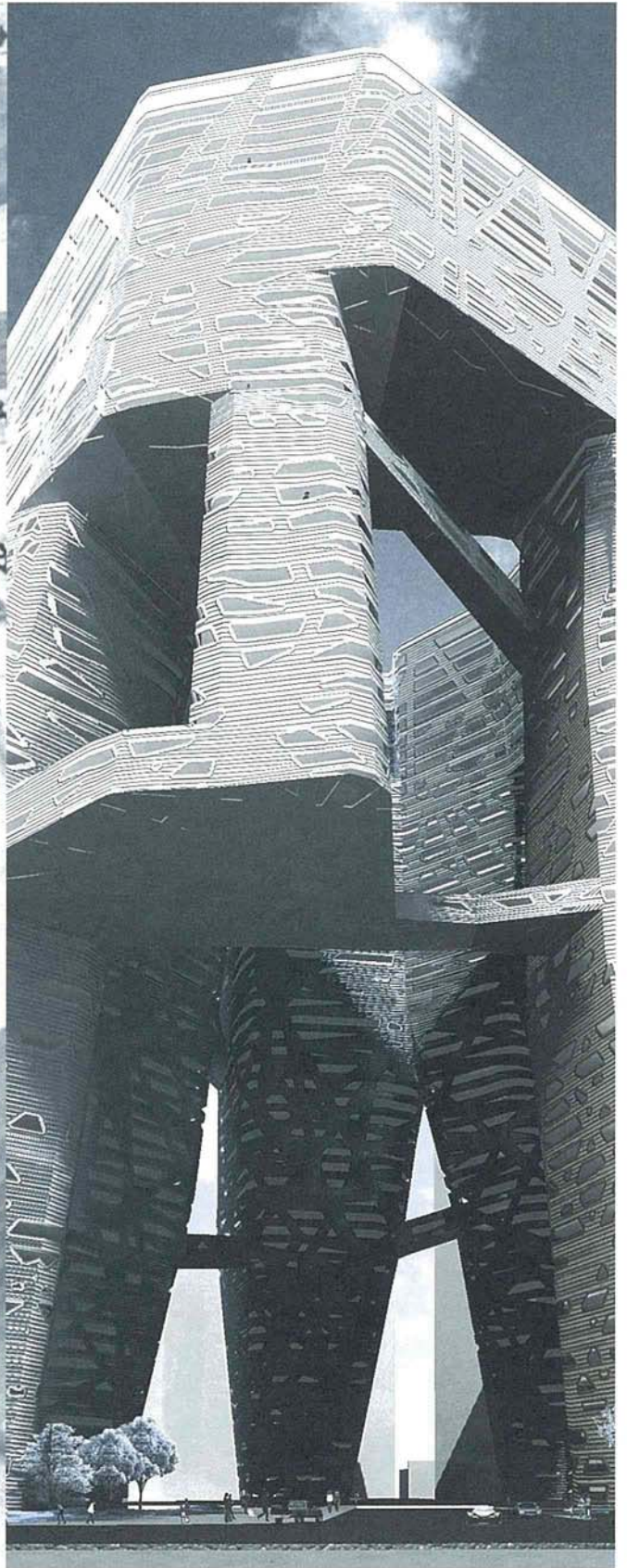
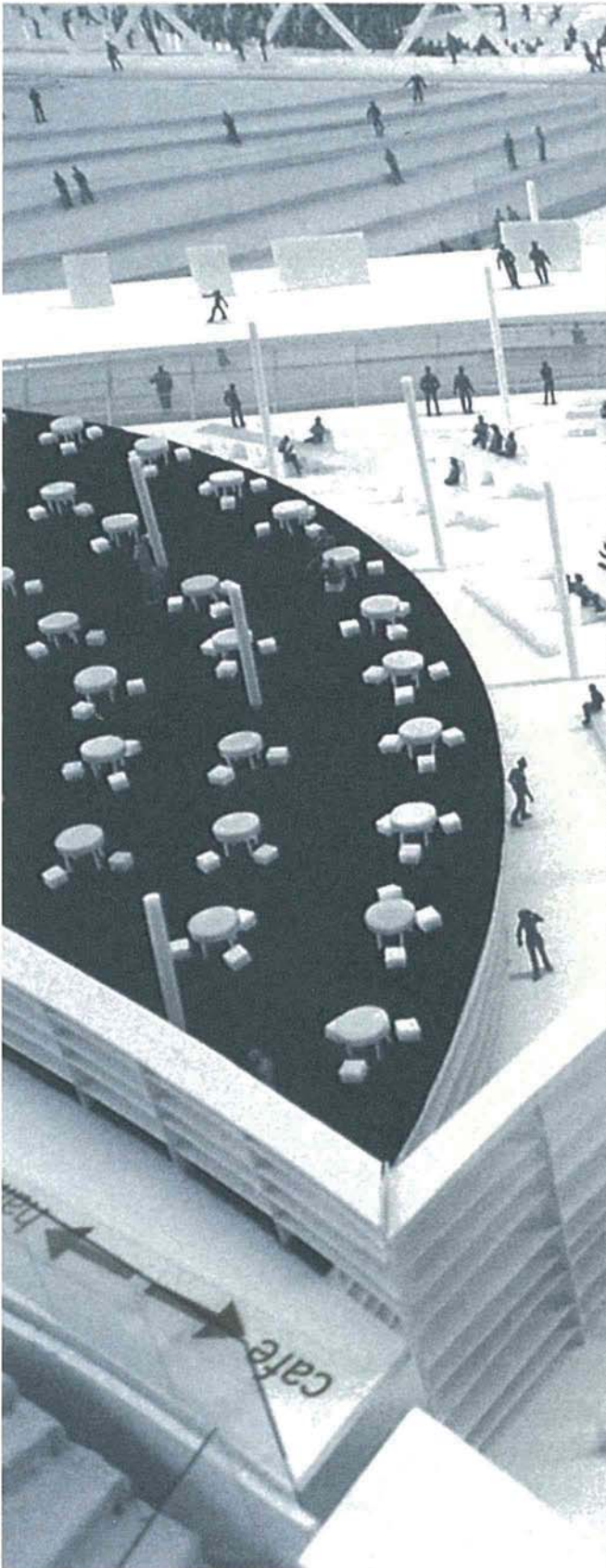
期間 = 2005年10月8日（土）～11月5日（土）

主催 = 札幌市立高等専門学校、

建築家清家清展・札幌実行委員会、建築家清家清展実行委員会

2004年度 卒業設計・修士制作

Undergraduate Diploma and Master's Design Project 2004

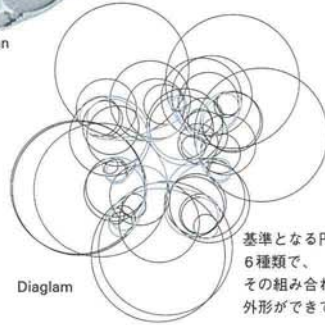


雲の下に
 みちと平原が広がっている
 Trail under Clouds

能作文徳
 Fuminori NOUSAKU



Site plan



Diagram

基準となる円弧は
 6種類で、
 その組み合わせで
 外形ができています



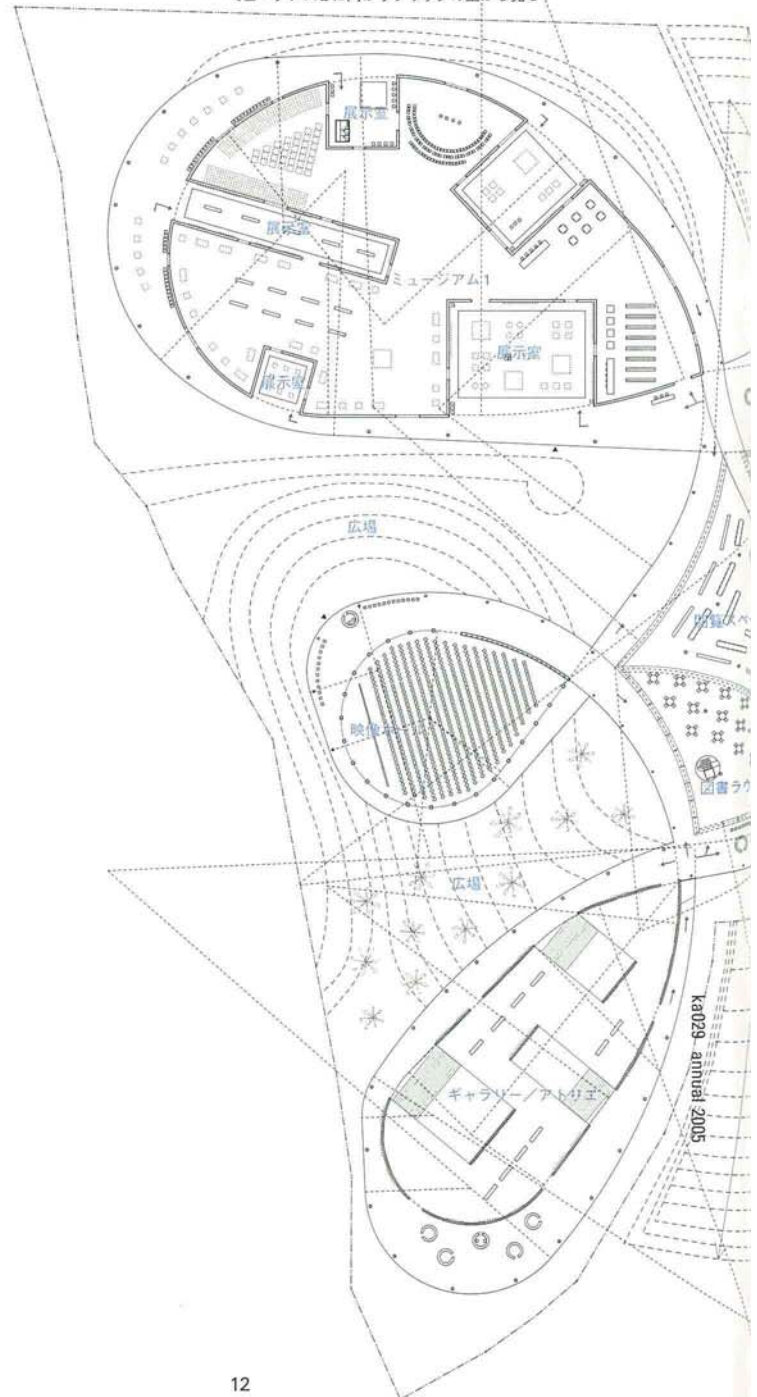
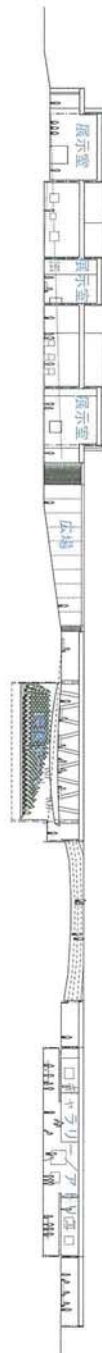
閲覧スペースのブリッジの下から見る



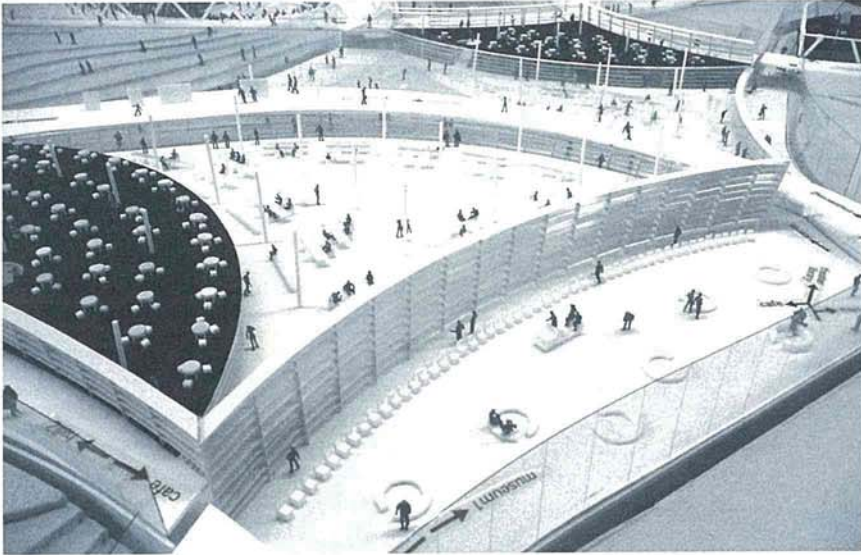
中庭を通して閲覧スペースを見る



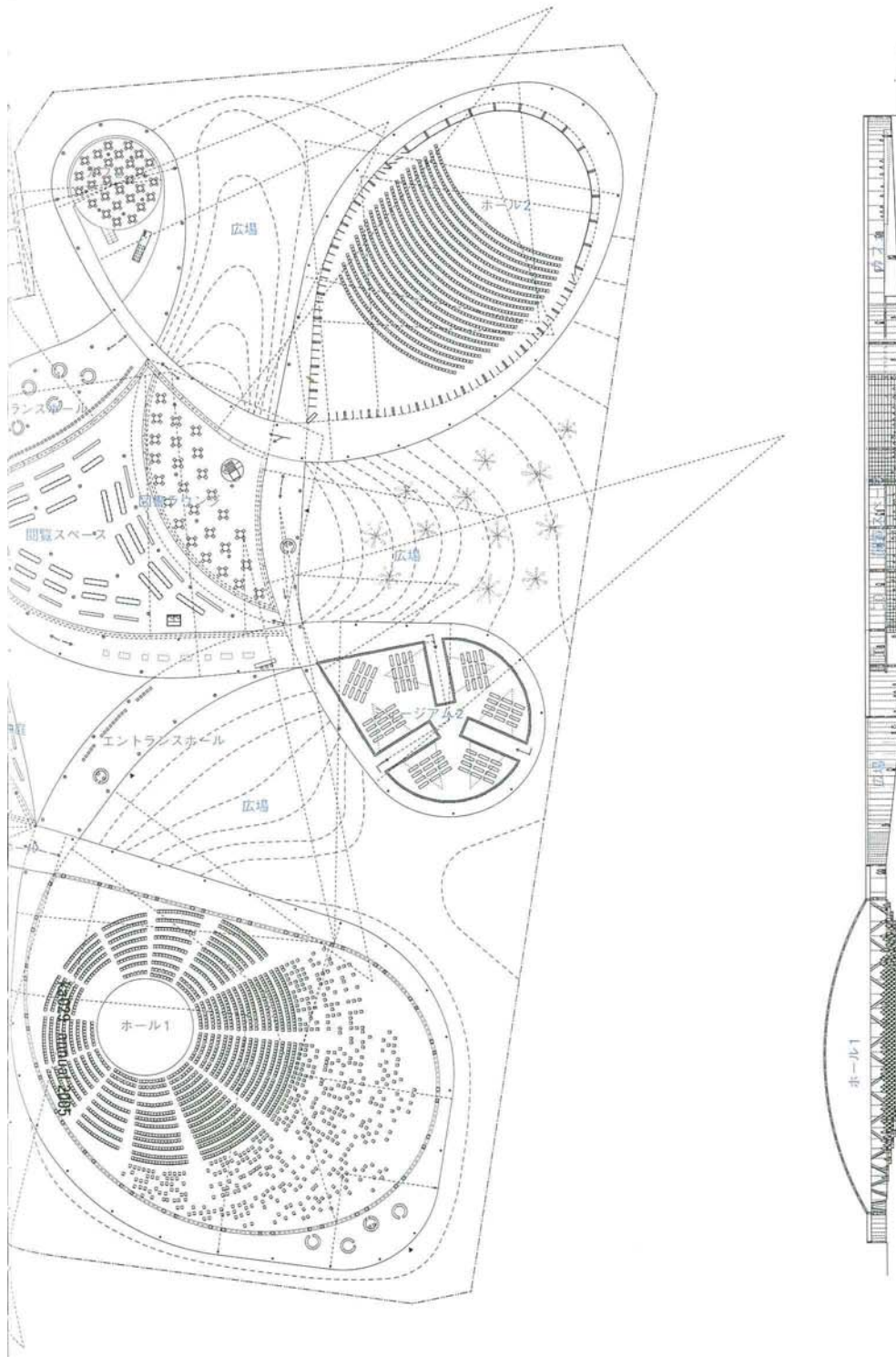
ミュージアム2に向かうブリッジの上から見る



ka029 - annual 2005



エントランス方向から図書館全体を見る



千駄ヶ谷から神宮外苑にかけて、国立競技場や神宮球場などの大きなスポーツ施設が連なっている。この空間的な連鎖の中に巨大な文化複合施設を計画した。

従来の公共施設は窮屈である。公共空間には余白が必要である。また、さらに巨大な公共空間を持続させるには、そこが様々な場所に移動できる場所であると同時に滞在可能である場所でなければならない。ここでは余白としてループ状の交通の空間（みち）をつくり、その周りに沿うように溜まりの空間や家具を配置した。そして、そのように交通の空間を立体的に織りなすことでダイナミックな空間をつくろうと考えた。

みちは幅、曲率、勾配の異なる数種類の円弧と直線によってできている。すなわち、強いルールではなく、接線と半径の関係、複数の対称形というルーズな方法によってこの建築はできている。そのことはこの建築の巨大さをおおらかな空間として生かし、そして緩やかな曲線に沿って、家具や棚が配されることで、この建築の巨大さは身体のスケーラビリティにまで分割され、人々が様々な身体の向きをとることを可能にすると考えられる。

また、みちは外部のランドスケープと連動して緩やかな高低差をもつ。この建築は内外ともに巨大な立体公園となる。

竹内 大空間にはどんな屋根をかけるのですか。

能作 最も大きいホールはシェル構造になっていて半透明の膜をかけます。

竹内 平面の面白いイメージは分かりますが、近くから見ると大きい屋根が立面的に強く現れてきますね。そのことに関してどのように考えていますか。

能作 ドーム状の屋根が複数重なって、ひとつの建築というよりも建物が集まっているように見えます。

仙田 今のままでは外部の広場が分断されています。屋上をオープンスペースと捉えて広場を連続的につなぐ方がよかったですのではないかと。

安田 平面的なパースペクティブは考えられているが、屋根の形状によって色々な見え方がもっとあるはずだ。屋根を含めて表現するべきだ。屋根をつくることは建築の根本的な問題だよ。

奥山 模型が大きいのはいいけれど、もっとドローイングを描くべきだ。

塚本 格闘がないように見える。

浜小屋風景

Sea Shelter as a Landscape

梶澤嘉孝

Yoshitaka KABASAWA

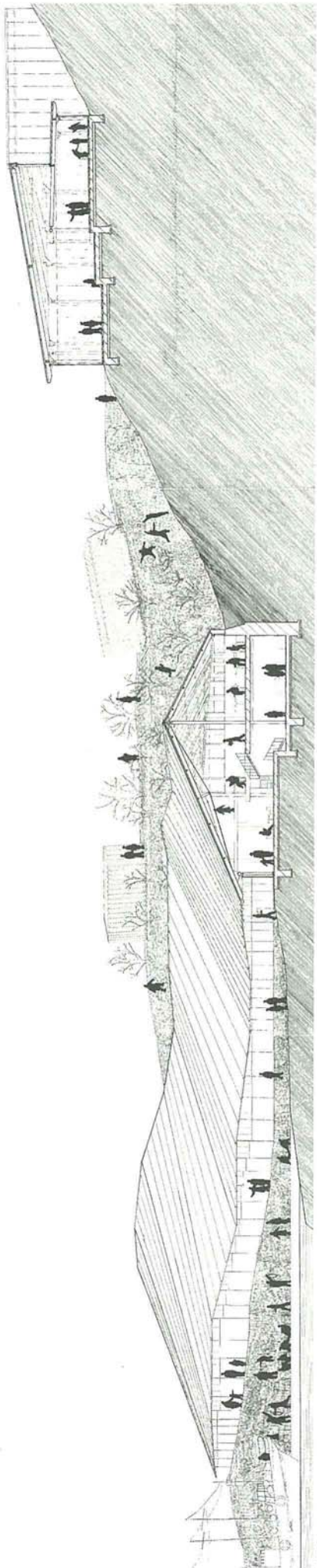


海岸線の乱開発により、周囲を海に囲まれた日本では、海と人が関わる機会は減ってきている。敷地は港町、青森県八戸市。小さな漁港は漁師の数も減り、かつての活気は失われてしまった。漁師にとっての日常空間である漁港に、他の人を招き入れるような建築を構築する。漁が盛んだった頃、海岸線には漁の準備をするための浜小屋が風景をつくっていた。ここは夏でも冷涼なやませが吹くなど、美しい自然と厳しい自然が混在する場所である。風景としての建築をつくることを心がけた。うねる大きな屋根は海岸段丘の稜線とランドスケープをつくりだす。

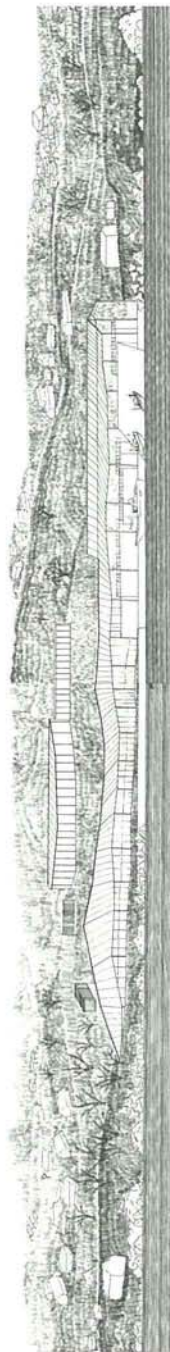
塚本 街とのつながりは考えているの？
 梶澤 漁師町は海より一段高いところにあり漁港とは近接しないため、かつての浜小屋の風景を意識して、大屋根の下のヴォリュームを配置しました。

仙田 あなたのいう浜小屋の部分がRCなのはなぜか？ 一層にしてもっと屋根を低くするべきではないか。町と比べるとスケールに違和感がある。

藍澤 自然の浜風の流れや、地形を使って屋根勾配を変えたなどの説明があるとすごく説得力がでる。



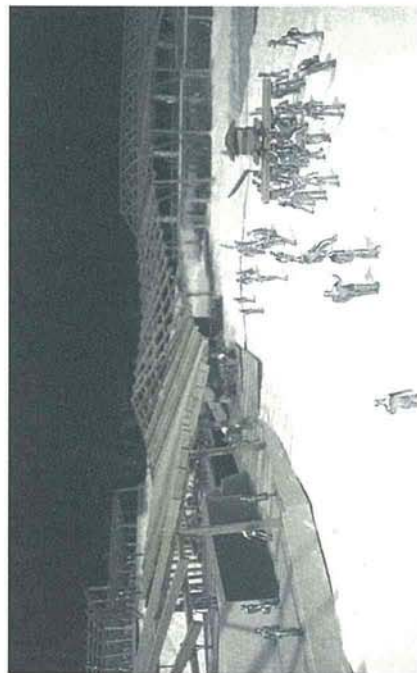
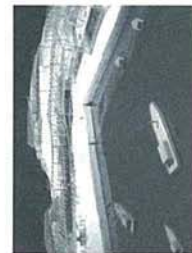
断面図



立面図



配置図





ふもとの交差点から rhombi hill 頂上を見上げる



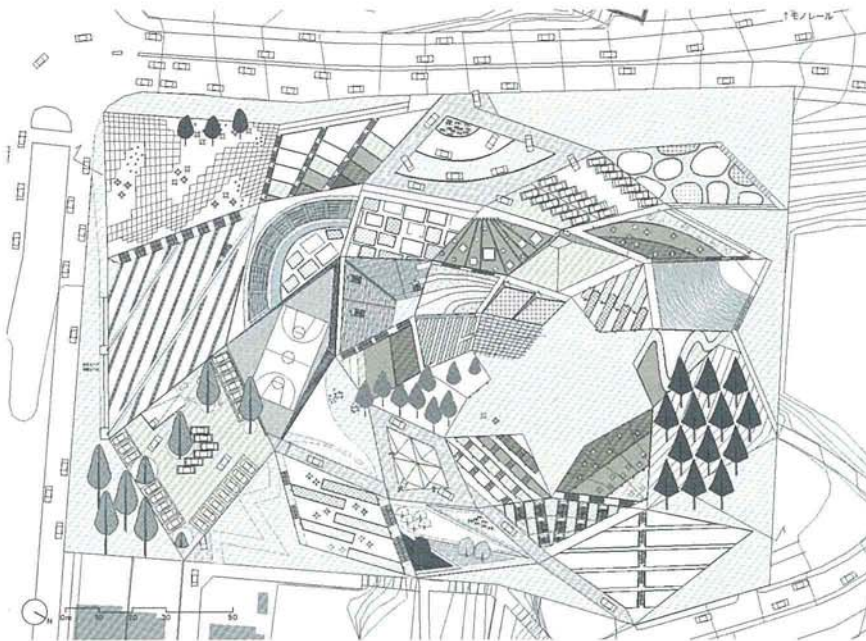
rhombi hill ができるまで

rhombi hill

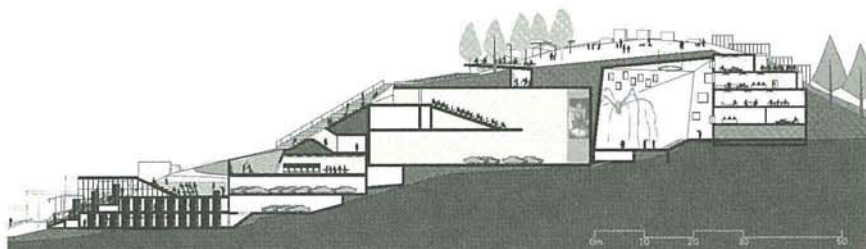
金野千恵
Chie KONNO



多摩ニュータウンの丘に『新ニュータウン』をつくる！ 周囲の7・8層の集合住宅群と同程度の容積を持つ斜面を造り、水平なひな壇造成や均質な直方体集合住宅の反復ではなく、ナナメ線で斜面を取り扱う。ナナメ線の連続・延長で多数のひし形を形成し、山道のような多くの迂回路を作る。そこへ郊外の自動車や看板・集合住宅・緑・田畑といった多様な粒の風景を立体的に再構成する。各々のプログラムは斜面に対し、覆う・突きささる・掘るなど様々に関係を作り、地中においても新たな距離感や隣接性を生む。



全体計画図



地中断面図

仙田 建築的なスケールはまじめに考えていますか？

金野 勾配は計算して、緩やかなスロープ、ベンチになる階段、急な場所は道を設けず遠回りなど様々な斜面を想定しました。

安田 斜面の表面上は楽しそうですが、地中の空間が非常に寂しい。繋がりが通り抜けなど、もっと考えられましたね。坂本 既存地形とあなたの作った斜面の関係が曖昧。斜面を全て建築的に構築してもよかったのでは。

藤井晴 斜面は雨水の処理が難しいがその流れなども今後考えてみてください。



俯瞰写真

building plant

吉田拓也

Takuya YOSHIDA

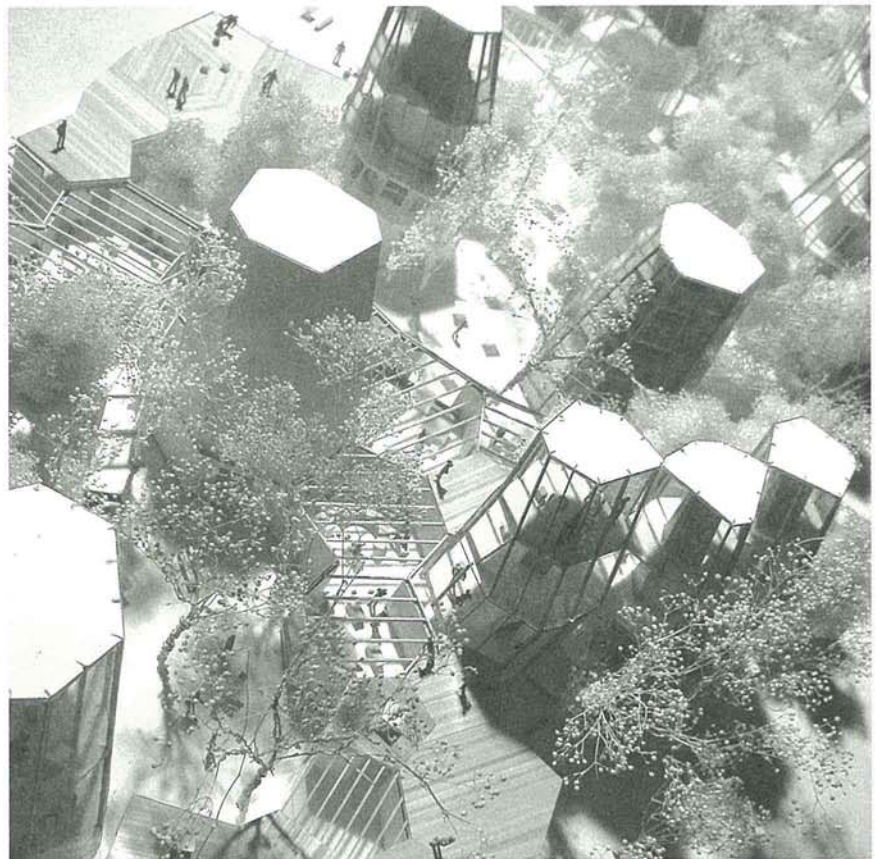


勝どきの朝潮運河沿いに公園と公共施設をつくる計画である。建築と造園を一体に計画することで、両者の間に密度の高い関係をつくることを目指し、その時に想定される建築を提案したものである。ガラスファサードの建築では、内外の境界を全てファサードで処理するため、スキンに多くの負担をかけることになる。この計画では、遮光や防風、視線のコントロールといったファサードの機能を外構に負担させている。

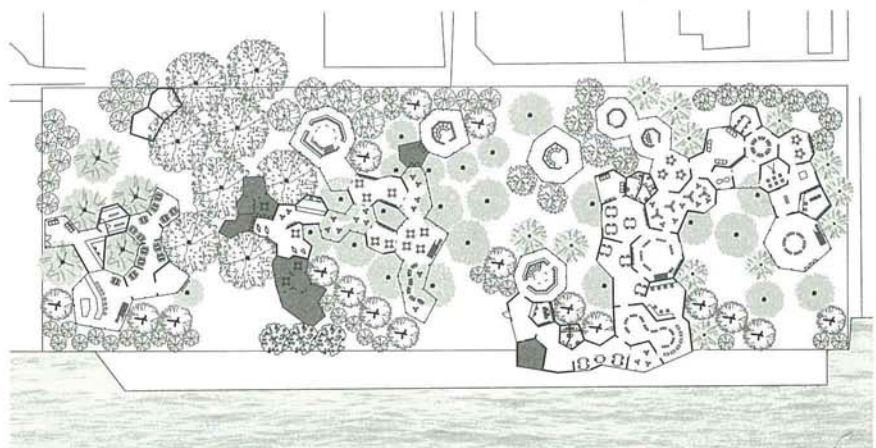
八木 普通の木では建築を覆えない。屋上に植栽をして、ツタを這わせる方が現実的なのは。

吉田 外部空間と建築を同時に計画することを考えたときに、建築と木の隣接する関係が手がかりになると思った。

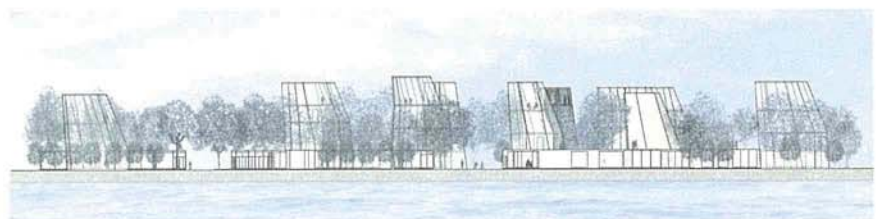
安田 気積が小さいから空調が効かない。奥山 タワー部は環境的に成立しない。図書館と児童館なら密度が低くても成立する。低層部は木に覆われ環境がいいのだから、もっとそこを考えた方がいい。仙田 環境を考える時、建築だけで完結せずに外構も含めて考えるというのは面白い。緑豊かな環境で、夏に空調がいらないという位にした方がいい。



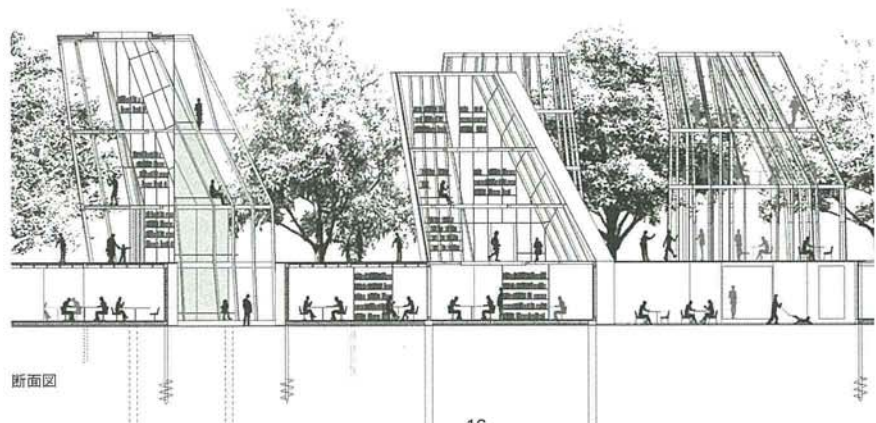
模型俯瞰



1階平面図



運河の向かいからの風景



断面図

Tube + Farm

小川 慧

Satoshi OGAWA



全景模型

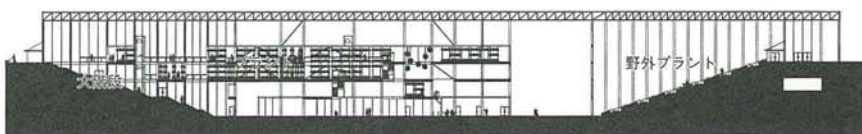


プラントを見上げる

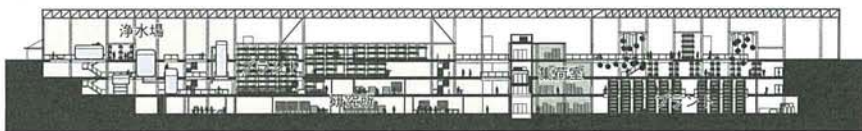


1階平面図

環境時代において都市は農村化すると考え、横浜市の三ッ池公園内に現代技術を用いた農園の一形態を提案した。都市の土地事情を考慮し、4×6mのチューブを積層させ、水耕栽培プラント、研究所等を取めた。これにより緑の発信地を作ると共に、利用者が自由に歩き回れる公園施設として、現代農業技術をディスプレイすることを考えた。



断面図 A

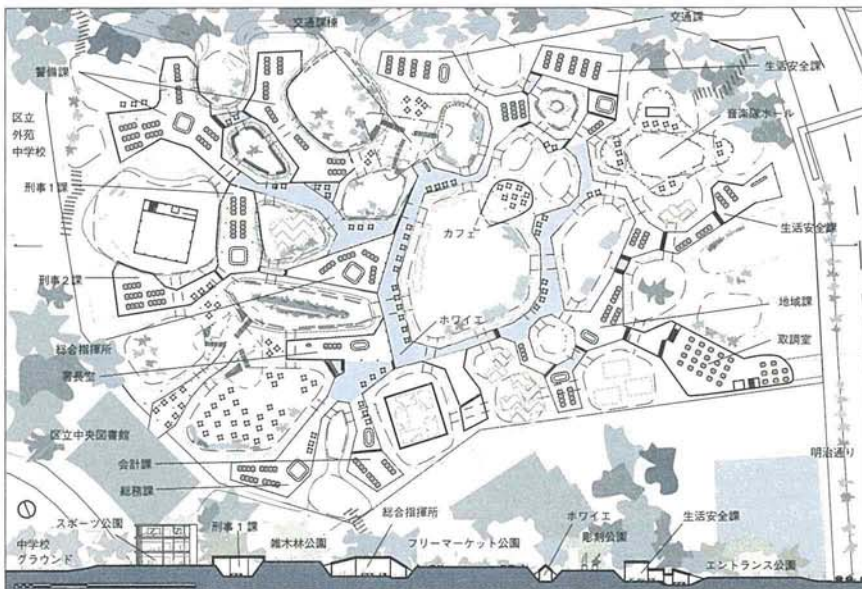


断面図 B

Police in Park

沖村徹也

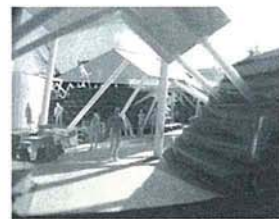
Tetsuya OKIMURA



明治通り側からの俯瞰



交通課棟

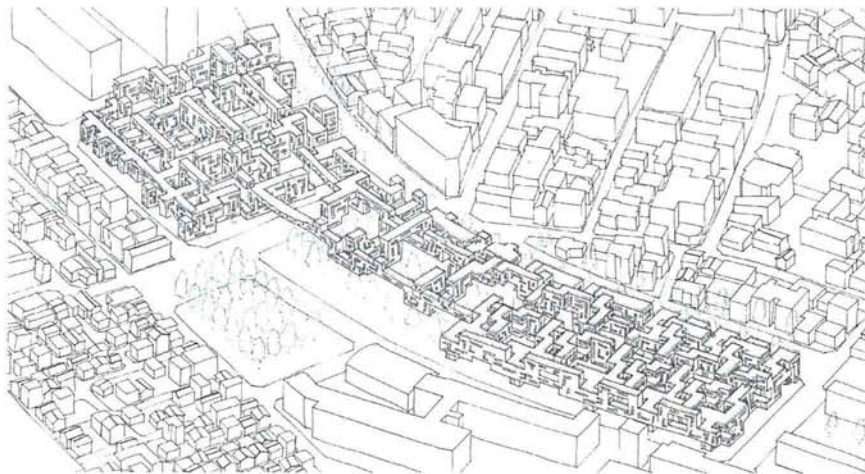


カフェ付近/ホワイエ

近年の情報化に関わる法整備や犯罪の種類が多様化によって警察の社会的なあり方は変化しつつある。原宿警察署の実際の移転計画地に、警察署と公園がそれぞれ網目状に広がり立体交差する公共空間を考えた。署内の課を市民への親和度の違いで再構成し、その一部は島状の公園群のひとつとなり、一方警察の継続的で献身的な活動は公園群に安全を与える。

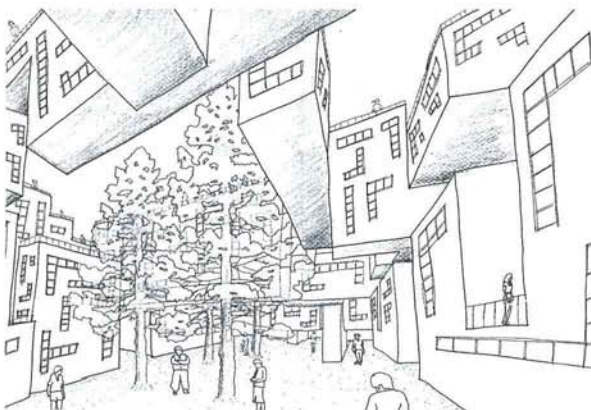
across a CROSS

田中真紗美
Masami TANAKA

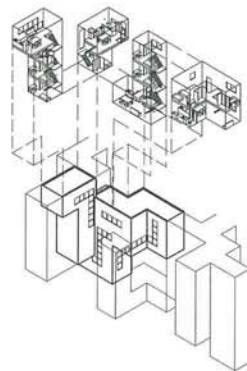


全体図

今まで誰も住んだことのない形態に住んでみたい。格子は幅や織り方を変えることによって街で一方からの波紋を吸収、緩衝し、他方へとつなぐ。格子は無限に広がり得るパターンといえる。単に設定された枠の中の図像ではなく、枠の外へと拡張し続ける連続体として認識できる。とある敷地に設定されたこのシステムは、四方へと広がっていくものである。



コートヤード パースペクティブ



住戸 アクソノメトリック

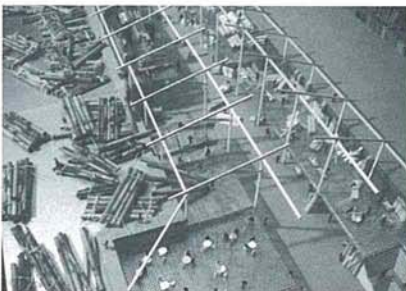
Craft Station

府中拓也
Takuya FUCHU

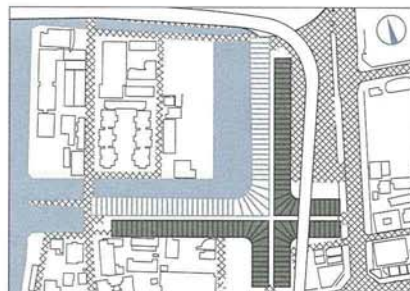


裁断場よりカフェ、ウッドショップ方向を見る

都市に散らばる既存のプログラムを再レイアウト。貯木場を兼ねる運河の町「木場」に、築地市場の魚を材木に転換したような場を創造した。運河からカフェ、ウッドショップ、商品の材を扱うDIY、材に加工する町工場、材木乾燥場、裁断場、貯木場。物流のヒエラルキーを奥へ入り込んでいくシーケンスとして体験できる臨場感のある空間を創りたかった。



貯木場付近



配置図：道路、運河、首都高速との関係

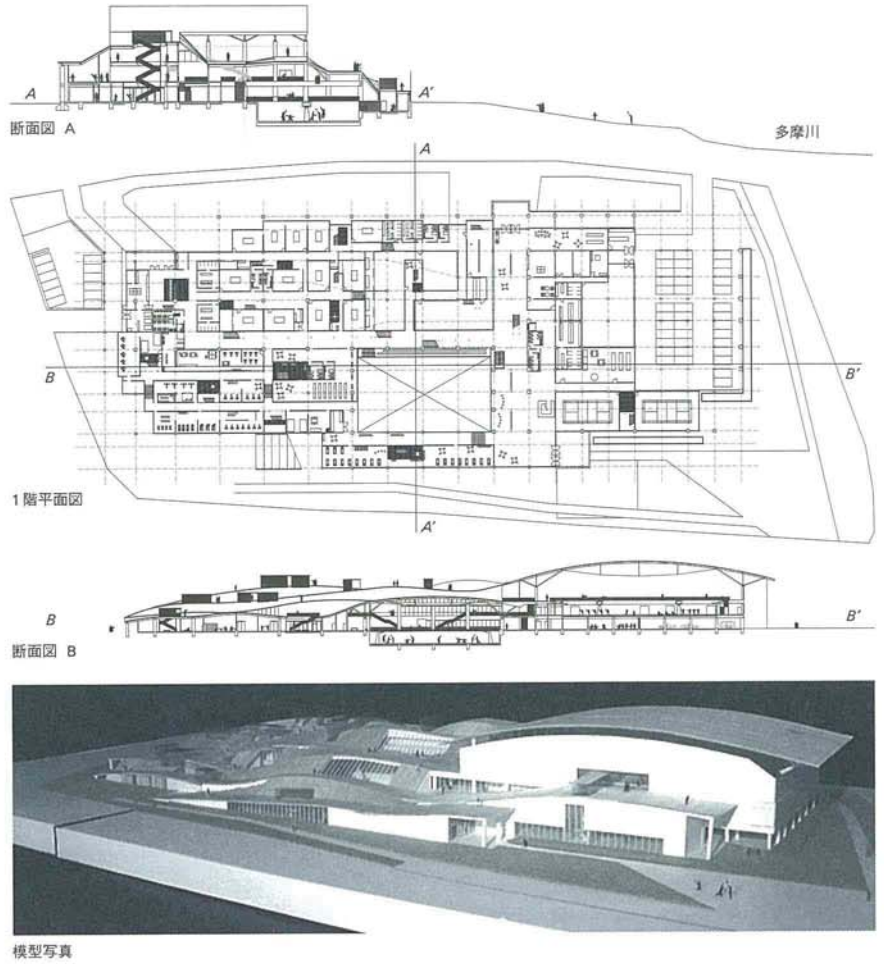


断面図：用途と物流のヒエラルキー

河川敷の集合体育館
Riverside Gymnasium Complex

松下仁士
Hitoshi MATUSHITA

体育館は、大架構と壁で閉ざされた空間であると感じる。そこで、多くの個室(体育室)と屋上デッキに通じる共有空間を使って、屋内スポーツの様子を内外に展示する開かれた体育施設を多摩川の河川敷横に計画した。全体的に土手の傾斜を延長した形とし、架構の起伏で動きをつけた。河川敷の楽しい、あるいはのんびりとした光景が施設の中に取り込まれる。



模型写真

2004年度卒業設計
全タイトル

稲田有香 アメヨコ デルタ
井橋朋子 partition
岩淵千恵子 本市場・神田村
上田 遼 ECO-C1
小川 慧 Tube + Farm
沖村徹也 Police in Park
小澤楽周 Horiwari
角野大介 windbreakcity
椋澤嘉孝 浜小屋風景
上運天未緒 ナチュラル
北川尚人 wearing park
久保田修司 △□空中バザール
久保田 創 PARK LIVES
小島朋子 劇
小林 航 ReZM -Re: Zoning Museum-

金野千恵 rhombi hill
佐藤英佑 STYV
施 怡 spatial separation
調 浩朗 shinjuku bus park
高砂裕充 新橋公園図書館
田中真紗美 across a CROSS
富澤徹弥 由木中央小学校
中尾友子 spiral station
中尾理沙 City Water Pocket
中田由美 MOBILE SQUARE
西浦栄利子 Intersection Theater
根本理恵 果实
能作文徳 雲の下にみちと平原が広がっている
濱口麻耶 par・a・dept.
府中拓也 craft station

星野 雄 サカノウエノクモ
松下仁士 河川敷の集合体育館
松本明広 Y
宮崎健太郎 multi porous
三好雅人 recycling plant
山下拓三 adjustment of contradiction
山本晶子 ST 一月へ、とどけー
山本絵理 宇都宮 交差点
吉田紗織 TRANS PUBLIC
吉田拓也 building plant
和田洋平 コネクタ
渡邊 恵 MM Life Show Room
鴛海達矢 GP6
安藤一将 集まり住まう風景のさき
長友 宏 臨海部の荒地における計画

エマージェンシー・
デザインング
イン アーキテクチャー
Emergency Designing
in Architecture

松島潤平
Jumpei MATSUSHIMA

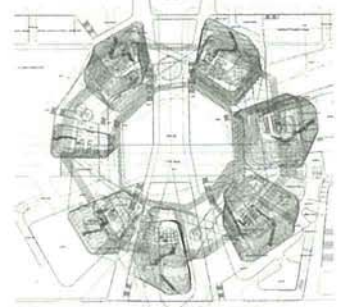


1 全体形状 the shape



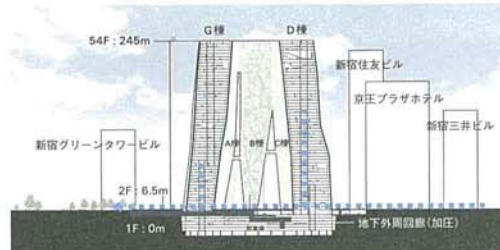
特定方向に強弱を持たず、避難経路を全て断たれる可能性が低い。また各棟を循環できるため、状況による最適避難経路を選択できる。

南面の棟の足を浮かせ、囲まれた空間により多く日照を取り入れる。また足の浮いた棟を基準とした自己の位置把握が可能となる。



plans B4F - 54F

2 グラウンドデザイン ground design

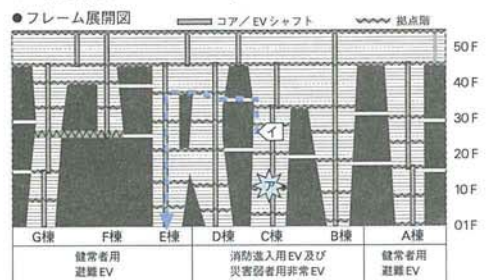


G-D section 1:12000



2Fレベル(6.5m)での避難経路
..... G.L.レベル(0m)での避難経路

3 構造計画 structure systems

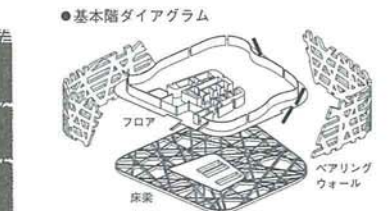
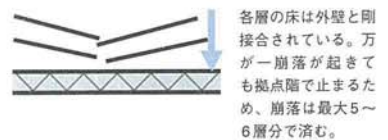


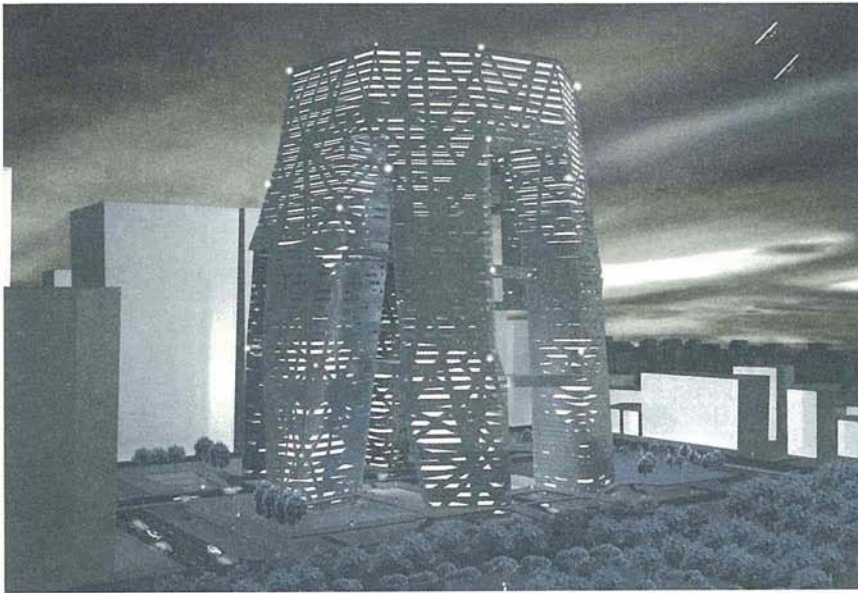
* C棟A点で事故が発生した場合、イ点の在館者避難経路を矢印で示した。その際、C棟とその両隣棟は非常用EVとなり、健常者はC棟から二棟以上離れた棟のEVで避難する。



架構形式は複数のダブルチューブ構造の棟が上下で連結したものであり、各棟SRC製のコアとアウトリガーの張り出した拠点階を7~8層毎に設けて、ベアリングウォールと一体化している。

拠点階は日常的には設備階、EV乗り換えのスカイロビーとなっているが、非常時にはシェルター階として機能する。





4 平面計画 plan detail



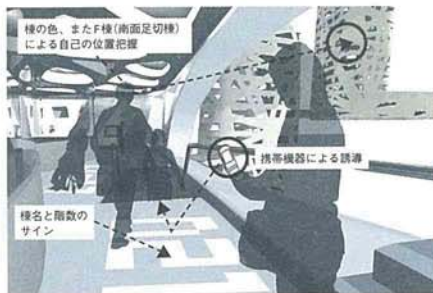
居室内の在館者はコア部か全周囲のバルコニーへ避難する。SRCコアの外周が安全区画となっており、バルコニーに逃げてもコア部への進入が可能である。

バルコニーには屋外非常階段が設置してあり、棟を螺旋状に廻りながら下階、または上階へ移動する。事故発生棟における拠点階や他棟へのブリッジまでの避難経路となる。

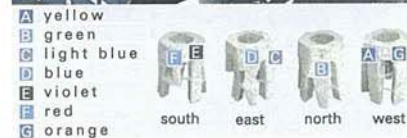
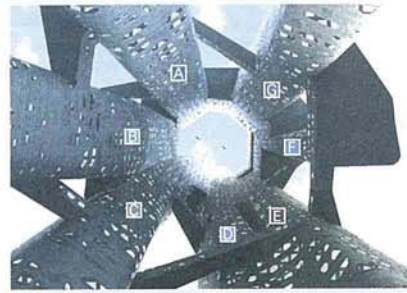


一時待機場所は各フロア上記の4種用意されており、避難経路混雑時の滞留場所としての役割と、災害弱者の籠城区画となる。どここの待機場所へ進入しても救助者のアクセスが容易な配置となっている。

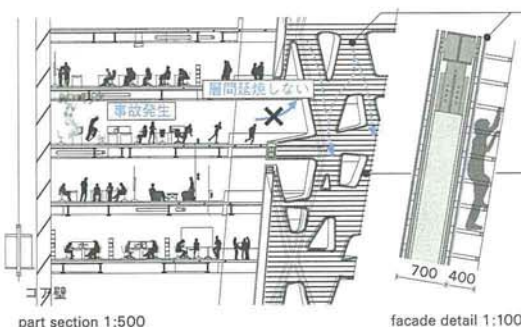
5 システム・サイン計画 refuge systems and sign



事故が発生した際には在館者の携帯電話等の機器が緊急事態モードに切り替わり、その指示に従って避難する(上図)。各棟には割り当てられた色があり(右図)、ファサードやバルコニーがその色で塗られている。棟名と階数の書かれたサインとともに自己の位置を把握する手立てとなる。



6 断面計画・ファサード計画 section and facade detail



頂部貯水槽から壁面へ水を流し、熱環境負荷の低減と非常時のスプリンクラー効果を持たせる。バルコニーとともに層間区画の役割を果たしている。屋外階段が使えない場合の層間移動手段として、ファサードのストライプロッドを梯子に利用できる。

part section 1:500

facade detail 1:100

近年、世界各地において深刻な災害やテロリズムが頻繁に発生し、多くの人命が失われている。建築は「様々な脅威から人命を守るもの」という起源を持ちながら、時として災害に加担し、人命を奪うものであることが浮き彫りとなっている。価値観が多様複雑化した現在、様々なデザインコードが建築を取り巻いているが、こうした状況の中最も早急に必要とされるものは、緊急事態に備えるデザインであるとする。本計画はこれをエマージェンシー・デザインと呼称し、特に安全確保と建築計画が密接な関係を持つ超高層建築についてその具体的な一例を示すことにより、今後災害やテロリズムに対抗する建築設計の有効な手法として提案する。

まず防災の概念内におけるエマージェンシー・デザインの位置付けを行った。災害・事故・テロリズム等の事象が建築被害に至ることを防ぐ段階よりも、建築被害が人体・人命危害に至るまで発展することを防ぐ段階を、エマージェンシー・デザインで扱う主要な範囲とした。

続いて国内外における代表的な超高層建築の形状、避難計画、構造計画の仕様をまとめ、安全面を見た考察と評価を行った。その結果、超高層建築は膨大な投資額とランニングコストのため、徹底した合理性で全ての仕様が決定されることが改めて明らかとなった。しかし合理的な安全計画は、災害等の事象が想定範囲を超えた途端に、進行性崩壊や避難経路の断絶といった致命的な状態へと陥りやすいことが近年の建築災害から問題となっている。このことから安全面に冗長性を多重に取り入れた計画が必要であると考え、これを本計画の指針とした。

プロジェクトは東京都庁舎をエマージェンシー・デザインの観点から新たに計画した。様々な段階で構造や避難経路の冗長性を積み重ねることで、進行性崩壊や避難経路の断絶を徹底して防いでいる。同時に、その操作を建築表現へと積極的に利用することで、合理性を表現そのものとしていたこれまでの超高層建築の文脈にはない、新たな表現を持った建築を設計することが出来たと考える。

本計画により、設計の障害と捉えられ傾向にあった緊急事態対策をポジティブなデザインコードへと転換し、一般性を獲得させることで、防災・避難への意識を高めつつ、今後における新たな建築表現の模索の活性化を期待している。

アーバン・サーマル・オペレーション

屋外熱環境を制御した都市空間の更新

Urban Thermal Operation

Reorganization of Urban Space
by Controlling the Thermal Environment

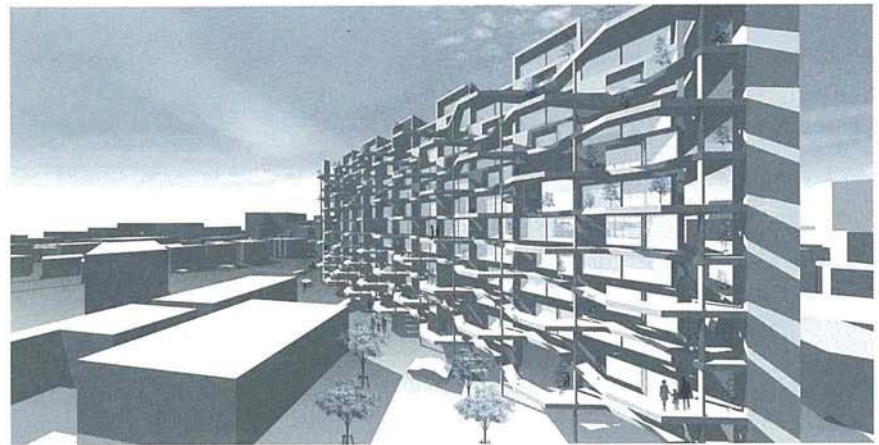
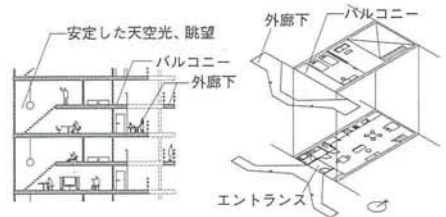
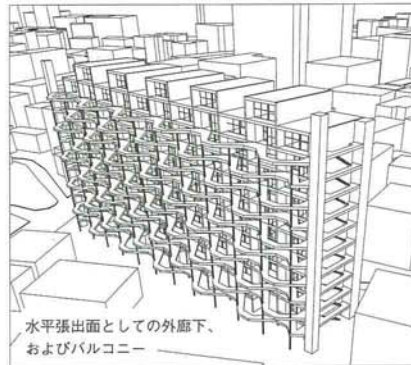
田中盛志

Seiji TANAKA

土地被覆の大部分が人工化した東京都心部ではヒートアイランド現象が顕在化し、建築・都市環境の計画段階でも夏季の屋外熱環境を考慮することの重要性が高まっている。東京都や渋谷区による対策は、風の道や大規模緑地の確保など都市的規模のガイドラインや屋上緑化を定めた条例などに限られるが、建物の形状操作による凹凸が直射日射の当たらない影をつくることで、建築物外表面からの放熱特性を制御することができる。本プロジェクトでは、都市が更新される際の建築や街区の建替えの手法として、都市の屋外熱環境に着目し、建築の形状や配置を操作することで、建物からの大気への顕熱負荷を制御する設計プロセスを提案した。これは、限定的な手法に対し、敷地条件に対応した多様な計画手法を提案するものである。また、建築の内部空間のみならず、屋外空間を操作することで、建築内外が積極的な関係を持つ新たな都市空間の可能性を示すものであると考える。「熱」というひとつの要素をシミュレーションすることで、その土地の気候風土と密接に関係を持つ都市の風景を提案したいと考えた。

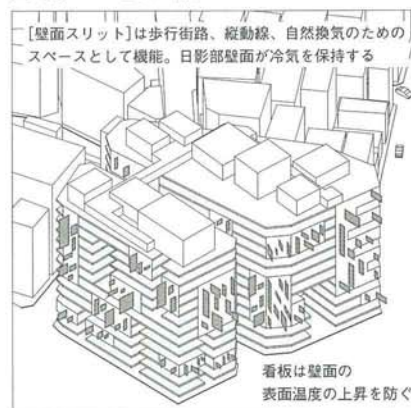
プリムド・アパートメント / 集合住宅の更新

東西軸に建つ集合住宅においては、南壁面の日射受熱量が大きい。このため、南面の「水平連続張出面」としての外廊下およびバルコニーを共に南に配し、その形状を操作することで、住戸への日射、影が時間と共に変化する。



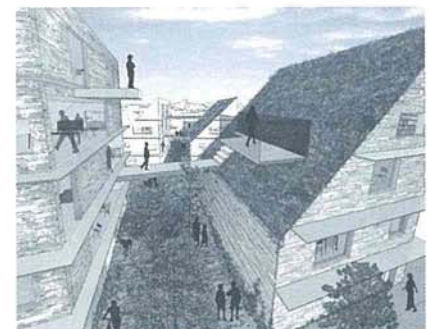
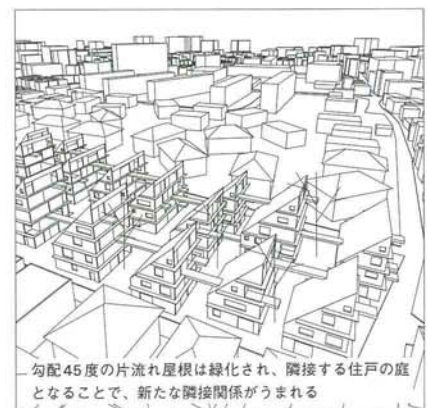
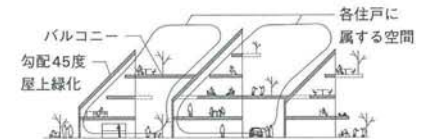
クレバス・ハイライズ / 駅前高層街区の更新

商業・事務所を中心とした高層建物が並ぶ街区で、壁面の日射受熱量が大きい。「壁面スリット」や「壁面凹凸」を、建物内部のヴォイドスペースとして組み込み、街路空間や縦動線及びオープンスペースとして立体的に構成した。



スティープ・ガーデン / 住宅密集地の更新

低層の戸建住宅が立ち並ぶ住宅密集地では、屋根面を受ける日射受熱量が大きい。「片流れ・勾配45度」の屋根は緑化され、隣接する住戸の庭として機能する。



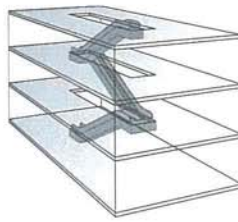
主要私鉄ターミナル駅における
商業機能の複合形式とその現れ方
機能複合の新たな論理による都市建築
Space complex model of
the retails in the terminal stations
Urban building project
with a new complex method

浦木拓也
Takuya URAKI

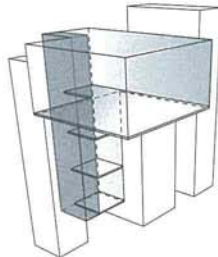
予期せぬ場が突如として現れる繁華街での空間体験は面白い。私鉄路線のターミナルが複数接合したJR駅のラチ外空間(改札欄の出た側に広がる内部空間)では、この都心部の繁華街に似た多様な空間の展開が体験される。この空間では、空間の規模の大小に関わらず数多くの商業空間を等価に並列したラチ外空間の壁面をもたらす現象的側面により、「等価に現れるインターフェイスと空間の奥行きや展開が分からないブラックボックス」という性格をもって商業空間が現れる。この通路空間の側面に現れる多くのブラックボックスによって、街路に似た多様な空間の展開が生み出されていると考える。

本計画では、この商業機能の複合したターミナル駅のラチ外空間を、商業空間の奥行きに着目して検討することで空間特性を把握し、そこで得た知見を元にして多様な空間の展開をもたらす機能複合の新たな構成、境界面の現れ方を提案している。またそのケーススタディとして、再計画の行われている旧東急会館跡地を計画地として選定し、多様な空間の体験を導くと共に、既存都市空間と呼応する新たな高機能・高密度の都市建築を具体的に構想した。

機能複合の構成的特徴



●機能複合の一般構成
各機能用途をフロア毎に挿入する構成。この構成は、エントランスからアトリウム、縦動線を経て各フロアへといった体験上の階層性が存在する。この階層性が導く明示性が空間の展開の多様性を失わせている。

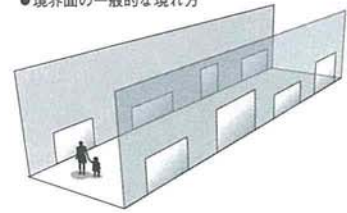


●機能複合の新たな構成
独立した縦動線をもつ垂直方向に伸びるヴォリュームに各機能用途を挿入し、自律した部分の集合体とする複合建築の構成。体験上の階層性を解体することで、多様な空間の体験を獲得する。

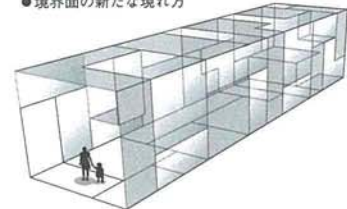
商業空間の現れる空間

ラチ外空間より多様な空間の展開と賑わいを生み出すため、空間を規定する複数の面に各機能用途が挿入されたヴォリュームの境界面を表出させる。

●境界面の一般的な現れ方



●境界面の新たな現れ方



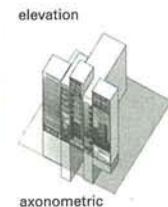
Exterior

敷地周辺に存在するペンシルビルと同程度の高さで開口をもち、空間の奥行きや展開の異なるヴォリュームを敷地に沿って配置する。更にそこにテナントを入れることで、中・低層部は既存ペンシルビルと共に一体的な街路の立面を形成する。

●平面の基本形

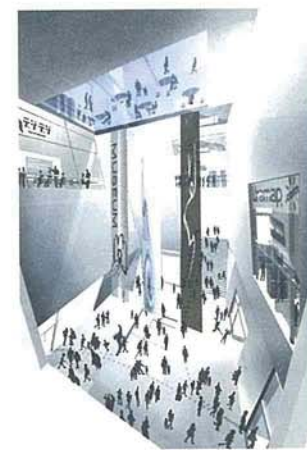
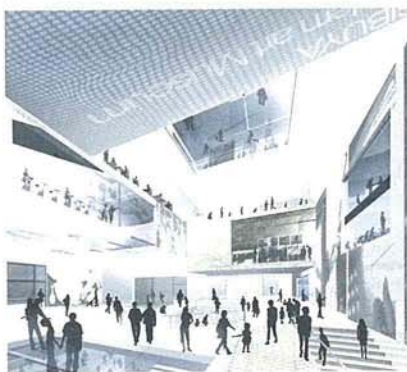


□ 機能用途の挿入されたヴォリューム
□ 境界面の表出する空間



Interior

法規によって決定される全体型から機能用途の挿入されたヴォリュームを配置することでできた残部空間は、複数のヴォリュームの境界面が表出し、更に都市空間や各ヴォリューム間との緩衝領域として機能する空間となる。背後に存在する空間の大きさや性格とは無関係に空間の構成面に開口が開けられることで、展開を想起させない多様な空間の拡がりを獲得している。



台湾におけるあそび環境を 配慮した小学校の環境形成に 関する研究

A Study on Making Schoolyards of Elementary Schools from the Research of the Children's Playing Conditions in Taiwan

王 銘顯
Wang Minghsien

台湾は近年、急速に経済が発展し、都市化や情報化により生活環境は大きく変化している。1990年の台北調査ではこどものあそび環境について量的に小さく、質的に多様性に乏しいことが指摘されている。今回、台湾のあそび環境の現状を把握するため台北地区・宜蘭地区・中部地区の3地区10校でアンケート調査・ワークショップ(サンプル673人)を行った。その結果と過去15年間の変化、さらにこれまでの研究から、今後は特に小学校が、公的な地域のオープンスペースとして多様なあそび環境を確保する上で重要になっていくと推測される。

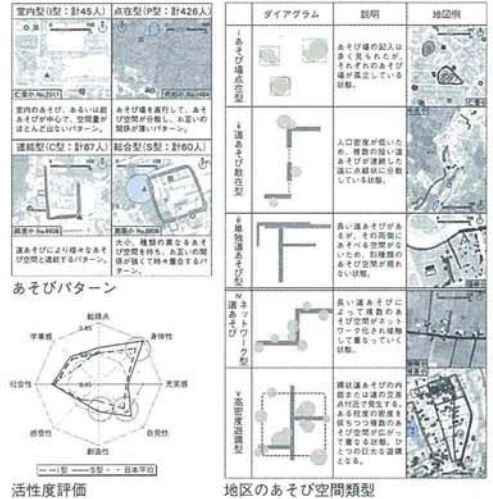
本研究では、あそび環境の現状に特に問題が見られる台北地区から2校、中部地区から1校の小学校を選び、その外部環境に対して計画・提案を行った。各地区のあそび環境の課題を客観的に見出し、それを補完する空間をこどもの生活の大部分を占める小学校において整備することは、こどもの健全な成育環境整備という観点からも重要である。本研究では、台湾のあそび環境の特徴と問題点を踏まえ、こどものあそび環境改善に配慮した小学校計画を行うことにより、小学校計画の新たな可能性を示した。

00 調査データ

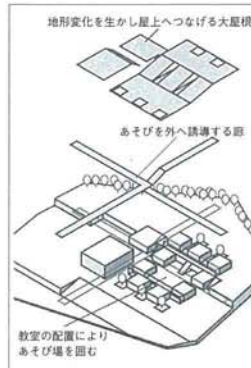
673人のあそびマップの集計を分析し、こどものあそびパターンを4つに分類した。パターン別にこどもの身生活性度を見ると、室内型(I型)のこどもに比べ、総合型(S型)のこどもの活性指標が概して高い傾向が見られる。地区別に見ると、宜蘭地区はあそび環境が良好と考えられ、台北と中部地区では構成比に偏りがあり、あそびの多様性とネットワークが確保できない。それを補完する空間をこどもの生活の大部分を占める学校において整備し、あそび環境を「道あそびネットワーク型」、「高密度遊環型」へと発展させる。



あそびマップ記入例(福林小学校、72人分)



01 民和小学校(中部地区)



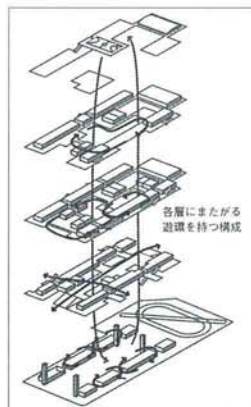
構成アイソメ

●現状
土砂災害のひどい地区であり、こどもは自然スペースで遊ぶことができない。また教室が分散型で、厳しい日射からこどもを守る空間が少ないため、日中の外あそびが乏しい。
●対策
学校の積極的なあそびの誘発により、あそび集団の形成を促し、地区のあそびの中心拠点として位置付ける。



断面図

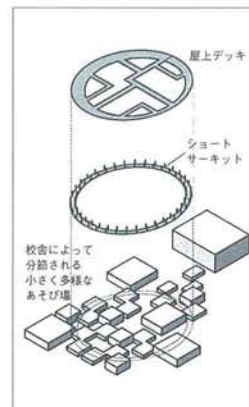
02 仁愛小学校(台北地区)



構成アイソメ

●現状
高層住居と交通量の多い道路のため、こどもは道で遊ばない。あそび場は学校、公園に散在し、その種類も限られている。
●対策
校舎の中央で遊環構造を立体化させ、地上だけでなく3・4階も含めた多様なあそび場のネットワークを形成する。あそびを学べる場所としての役割を果たす。

03 福林小学校(台北地区)



構成アイソメ

●現状
地区の代表的なオープンスペースであり、河川敷公園も隣接するが、周辺のオープンスペースをネットワーク化に至っていない。
●対策
地区のあそび空間類型の理想型をモデルとし、オープン空間と多様なあそび場を提供することで、周辺のあそび場とネットワークを形成する。



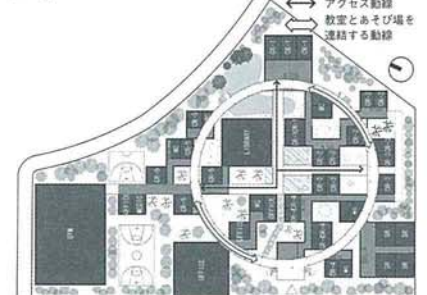
2階平面 1:4000



パース



パース



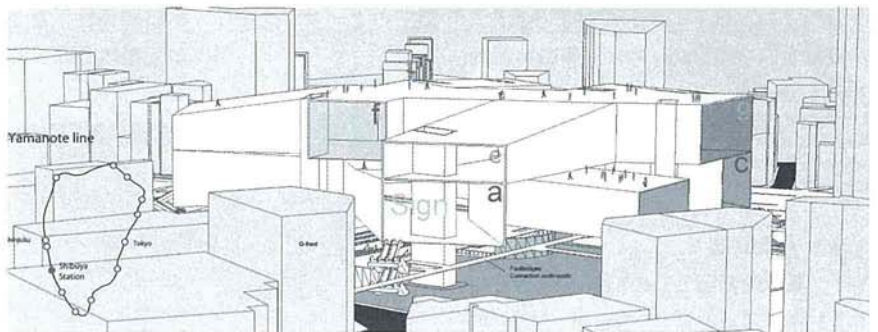
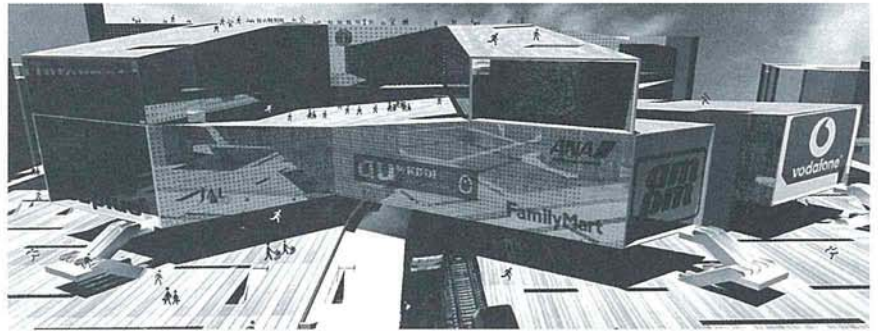
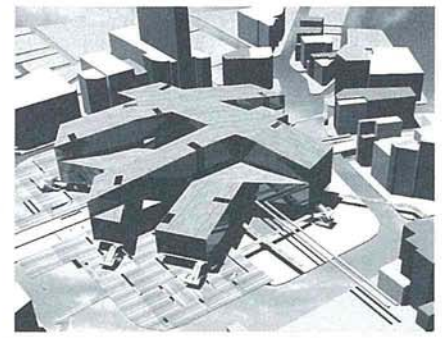
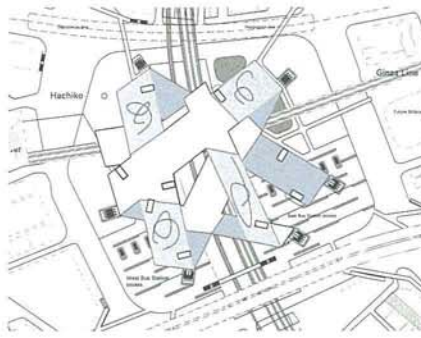
計画平面 1:3000

Connecting Shibuya station and its area by improving space and signs relationship

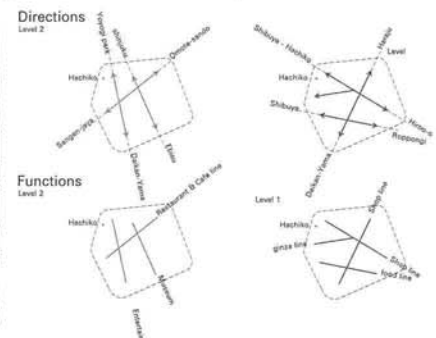
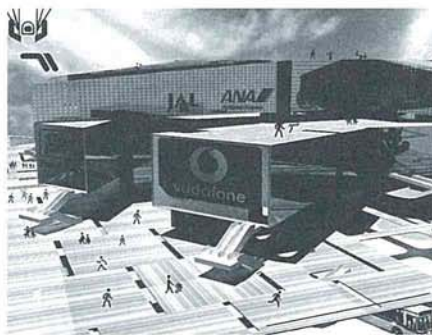
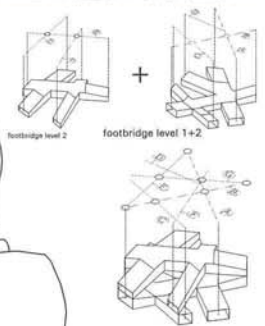
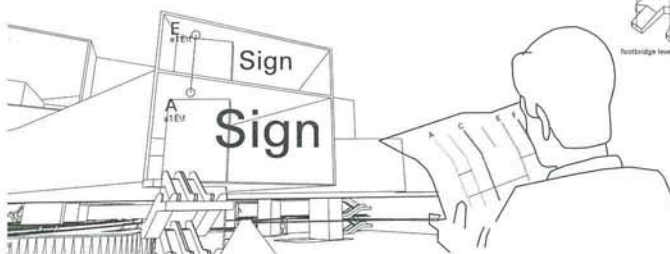
Fernandes Luis

Shibuya station is a very complex building in which it is difficult to travel, even though guide floors are available. Moreover, it fragments the area surrounding it. Therefore, the purpose of this project is to remodel the station, to connect together the fragmented spaces of Shibuya's neighborhood and to create a new guide floor, a new interface to help people practice the station.

The main goal of this project is, on the one hand, to connect together the fragmented spaces of Shibuya station area and, on the other hand, to connect the station itself to its neighborhood. To achieve that, I have created a building that is composed of two levels of footbridges. These footbridges have defined directions; in other words they are adjusted to their surroundings that way people can cross the station to go from one point of Shibuya to another. Shibuya station is now fully part of its neighborhood.



New floor guide type



建築設計製図 第一

Sophomore Studio Work: Spring Semester

住宅設計課題：木造戸建住宅
"Detached Houses"

担当：

藤岡洋保 [教授]、宮本文人 [助教授]、塚本由晴 [助教授]
Hiroyasu FUJIOKA (Professor), Fumihito MIYAMOTO (Associate Professor),
Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor)

山崎鯛介 [助手]、吉村英孝 [D3、TA]、藤村龍至 [D2、TA]
Taisuke YAMAZAKI (Reserch Associate), Hidetaka YOSHIMURA (D3, Teaching Assistant),
Ryuji FUJIMURA (D2, Teaching Assistant)

以下は、授業の内容を山崎 [助手] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。

設計製図第一では、実際の建物の構成を具体的に把握することを目的とし、以下の演習課題を与えた後、以下のテーマで住宅の設計を行った。

The purpose of this assignment was to explore and learn what an actual building should be (whether a combination of building elements, a structural system, or whatever else). Following several practice sessions (tracing the drawings of two legendary houses built in the 1950's-60's), the project got underway to design a detached house located in Okusawa for a family running a barbershop.

1. トレース課題

- 1-1：増沢洵自邸（1952年）、鉛筆描き
- 1-2：軽井沢の山荘（1962年、吉村順三）、インキング
- 1-3：同前、透視図（着彩）

2. リサーチ「住宅の空間構成の調査」

1950年代から現在までを10年ごとに区切り、班単位で各年代ごとにどのような空間構成の住宅が作られてきたかをリサーチし、それを各自A1ポスター1枚にまとめて発表する。

できるだけ違うタイプの作品を選び、作品間の意図の違いを明確に説明できるようなストーリーを作ることが条件。

3. 住宅設計課題「店舗付き都市型住宅」

[課題内容] 世田谷区奥沢の住宅地の敷地に、祖母、両親、成人した子供、計4人3世代が住む店舗付きの木造住宅を設計する。店舗は床屋で、もともとこの場所で経営していたものとする。4人とも理髪師だが、建て替え後は両親と子供で床屋を経営する。祖母はとうの昔に引退して隠居の身である。駐車場は家族用に1台あれば良い。店舗付き住宅にふさわしいまちとの関係性、3世代住宅にふさわしい家族同士の関係性や世代交代の可能性、さらにこの住宅地にふさわしい建物と庭と道路と隣家の関係性、などについての新鮮な提案を求める。「家の中のことだけで終わらない家」を期待する。

[設計条件]

構造形式：木造
住所：世田谷区奥沢4丁目
地域・地区：
第一種低層住居専用地域
防火地域：準防火地域
敷地面積：246.8㎡
建蔽率：50% 容積率：100%
高度地区：第一種高度地区
高さ制限：道路斜線、北側斜線



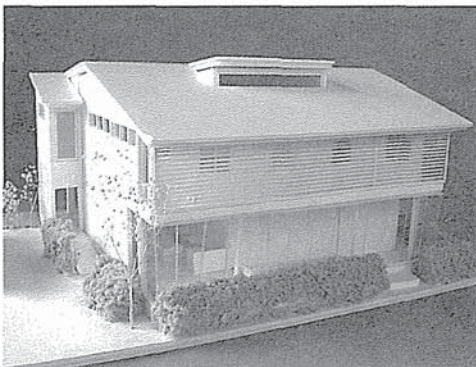
敷地図

[提出物]

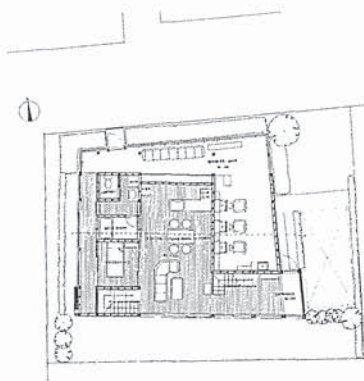
設計趣旨、1階平面図（配置図・外構図兼）、各階平面図、断面図（2面以上）、立面図、パース、アイソメ・アクソメ数点
模型 1/50、軸組図（壁量計算の結果がわかる資料）

組み合う家

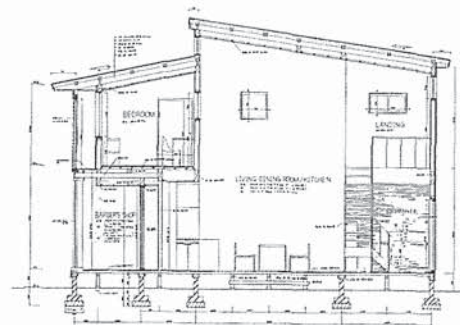
五十嵐麻美 Asami IGARASHI



模型写真



1階平面図



矩計図

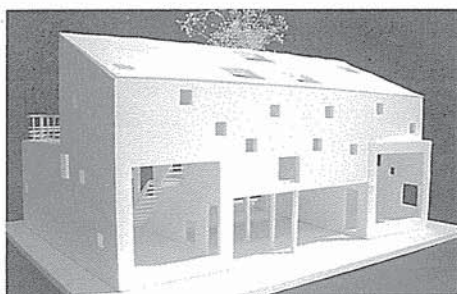
生活の中に床屋の存在が組み込まれるように、壁を作らずに空間を分節できるL字型を用い、床屋と住居のスペースを組み合わせて全体を構

成した。床屋は北側道路に面した待合を開放感のあるガラス張りとし、L字型に連続するカットスペースとの明るさの対比を強調した。北立

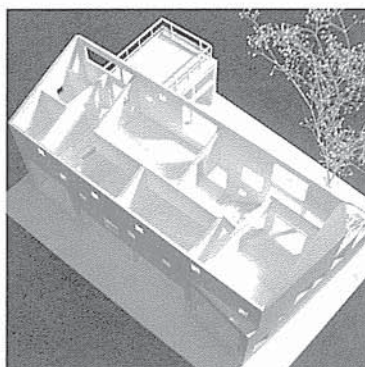
面のルーバーは、1階待合の開放性を残しつつ、道路から2階寝室への視線を防いでいる。

Cube × Cube

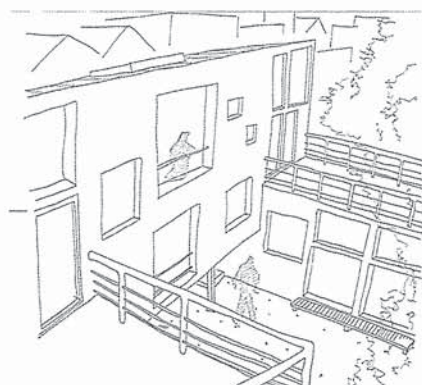
佐々木 啓 Kei SASAKI



模型写真



模型写真



パース

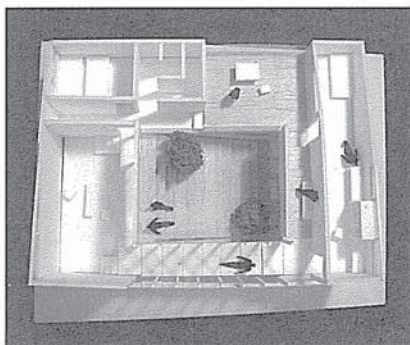
一日の多くを家の中で過ごすことになる住人のために、外を意識した住宅を考えた。一階部分にはLDKのあったCubeと床屋の入ったCube

を置き、一階ではこの二つのCubeを行き来することで外部を意識させ、二階の家族スペースには大きな開口部を設け、庭が良く見えるよう

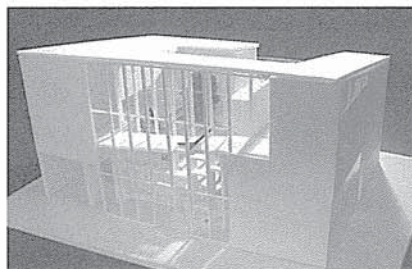
にした。外部を積極的に取り入れることで家全体に大きな生活の動きが生まれると考えた。

絡居楽座

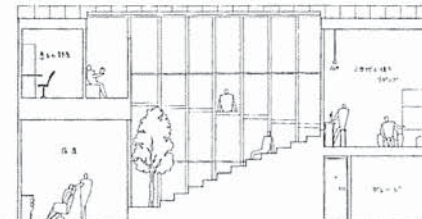
鈴木英理子 Eriko SUZUKI



模型写真



模型写真



断面図

外部と内部、仕事場と居間と私室、世代間がそれぞれ浸透しあうような空間づくりを目指した。そのため座れる幅をもった階段型の中庭を作り、

周りを多様なヴォリュームの部屋で囲むという形態をとった。中庭だけでなく家中のそこかしこを座れる幅を持つ段差をつなぎ [絡居]、そ

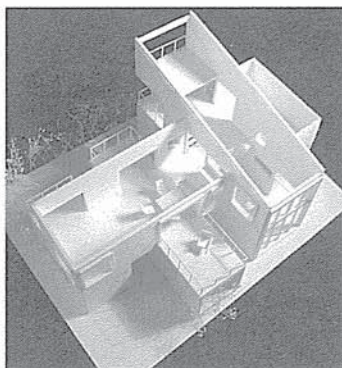
の段差に座ること [楽座] で、住む人が家の中だけでも日々新鮮な発見ができることを期待している。

視線のぬける家

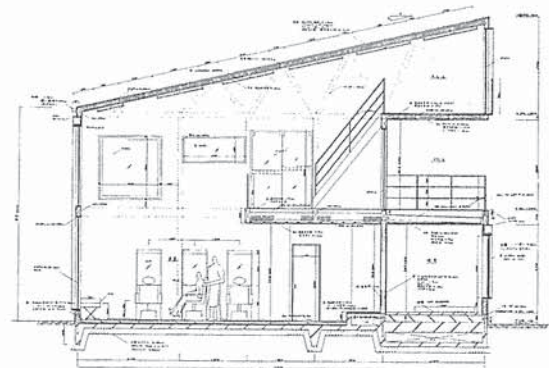
巽 彩子 Ayako TATSUMI



模型写真



模型写真



矩計図

店を自宅で構えることは外の動きに敏感である必要があり、店舗付き住宅だからその仕組みである。開口部を単に外と内をつなぐものとし

てではなく、同じ「家」の中で店舗とリビング、店舗と個室など部屋と部屋をつなぐものとして捉えることで、家と外とのつながりが大きくな

り、家の色々なところで外の動きをキャッチできるようにする。

建築設計製図 第二 / 第1課題

Sophomore Studio Work: Autumn Semester

住宅設計課題：ふだんの居場所を考える
 “Design a Daily-Use Space”

担当：

藍澤宏 [教授]、青木義次 [教授]、藤井晴行 [助教授]、
 大佛俊泰 [助教授]

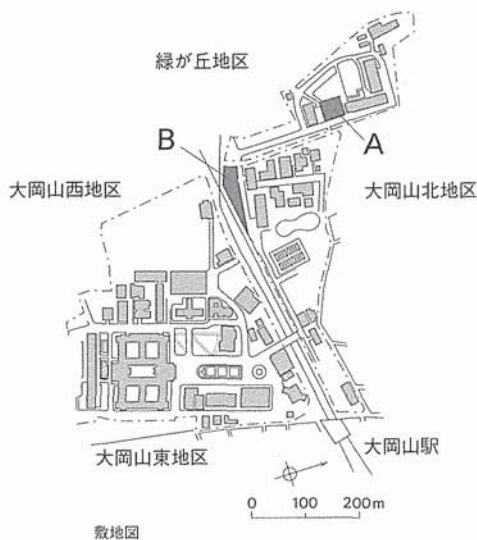
Hiroshi AIZAWA (Professor), Yoshitsugu AOKI (Professor),
 Haruyuki FUJII (Associate Professor), Toshihiro OSARAGI (Associate Professor)

菅原麻衣子 [助手]、木下芳郎 [助手]、熊井正喜 [M2, TA]、
 香川卓也 [M1, TA]、西野孝弘 [M1, TA]、山田晋治 [M1, TA]
 Maiko SUGAWARA (Research Associate), Yoshiro KINOSHITA (Research Associate),
 Masaki KUMAI (M2, Teaching Assistant), Takuya KAGAWA (M1, Teaching Assistant),
 Takahiro NISHINO (M1, Teaching Assistant), Shinji YAMADA (M1, Teaching Assistant)

講評会：

奥山信一 [助教授] Shin-ichi OKUYAMA (Associate Professor)

以下は、授業の内容を菅原 [助手] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。



課題は大岡山キャンパス内に学生のためのふだんの居場所を計画することである。建築系の学生の主な行動圏域においてA・Bの2敷地を設定し、敷地ごとの魅力やおもしろさを生かし、また自分たちが使いこなしていく空間の提案を求めた。

課題を進めるにあたり、前半はグループディスカッションを行なった。候補地として与えた2つの敷地についての分析、ふだんの居場所に必要なとされる機能、その機能を各敷地において建築空間としてどのように展開できるかについて議論した後、グループ発表の場を設けた。グループの話し合いの中では、スケッチや模型などが用いられ、発表の場ではCADによるフォトモンタージュなど、イメージを視覚的に表現する様々な試みが見られた。

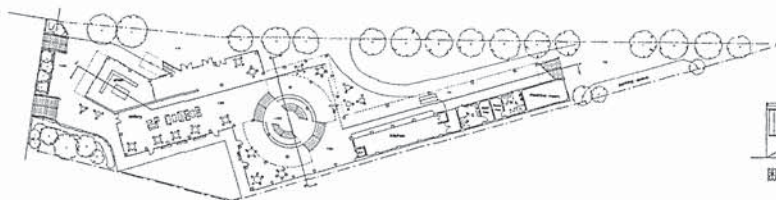
後半は、グループごとに選んだ敷地において各自の設計を進めることとした。グループコンセプトを生かし、各自のアイデアを発展させるものである。中盤には中間講評会を設け、互いの計画案を評価しあう場とした。

この課題を通して、学生自身、身近な環境を見直すとともに、現在の空間イメージにとらわれない斬新なアイデアや計画案がみられた。ディスカッションも徐々に活発になり、学生間のコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上、また様々な利用者を想定して計画することにつながった。

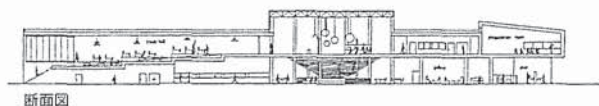
This assignment required small groups of students to design a daily-use space for the Ookayama campus. First, each group analyzed the site and discussed the necessities and functional basis of the chosen area. After a brainstorming session, the students then drew up individual plans which were expanded on group concepts. Some of the proposals were quite original, even unique, and a little unconventional. Through this type of theme-based project the students were given an opportunity to enhance their communication and presentation skills.

燈籠階段 [敷地B]

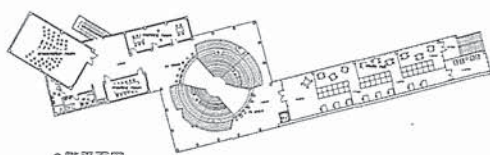
五十嵐麻美 Asami IGARASHI



1階平面図



断面図



2階平面図



北立面図

大岡山・緑が丘・轟橋の下・東急線の電車からの様々な視線の交わる場所に学生の動きを映し出す階段室を計画した。昼は日光が階段から

漏れ、階段が照明となり、夜は階段室自体が発光し、イチヨウ並木を照らす照明となる。人々の活動により階段は動く光をもたらし、24時

間活動している建物であることを示す。大岡山から並木道に入ったとき階段室にむけて視線が通り光のグラデーションを感じる事ができる。

A CHANGING LANE [敷地A]

巽 彩子 Ayako TATSUMI



断面パース



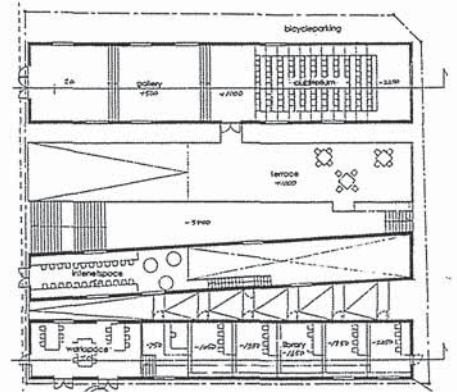
西立面図



北立面図

敷地Aには緑ヶ丘—大岡山間のはっきりと方向性を持った動線が通り、多くの学生の通り道となっている。この通り道を複数に分割し、分割

した道の間にプログラムを配置することで、各道にそれぞれ違った表情を持たせた。間に置かれたプログラムを通り抜け、隣の道へ移動する

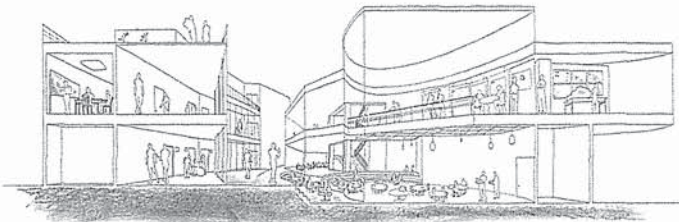


1階平面図

ことで、通る人は様々な経路を選択できる。通る人の数だけ経路が存在し、それぞれの自由な体験がある。

つむじ風 [敷地A]

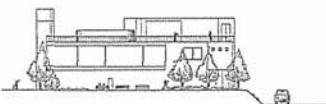
大澤久美 Kumi OSAWA



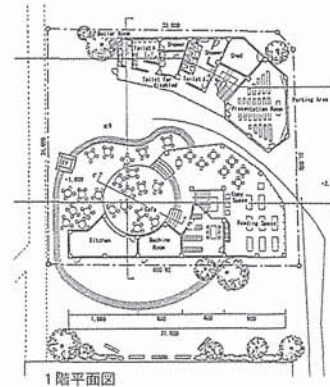
断面パース



東立面図



南立面図



1階平面図



2階平面図

いろいろなものを巻き込むモノ
それは建物でなく、つむじ風。
人の流れを巻き込む風

「動」と「静」を巻き込む風
“学びの空間”と“楽しみの空間”を巻き込む風
相反するものを自然と調和させてゆく。

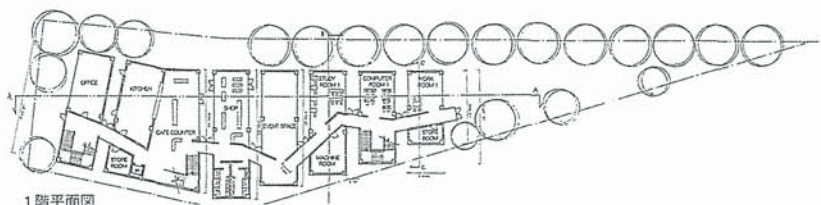
お互いは干渉するのではなく、
お互いが波を与えあう。
無意識に巻き込まれて、出会う居場所。

イバシヨ コンプレックス [敷地B]

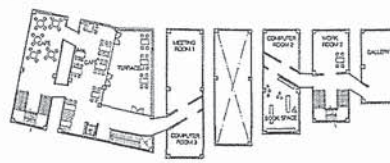
佐々木 啓 Kei SASAKI



断面パース



1階平面図



2階平面図



北立面図

東工大の敷地に分散する学生の居場所を集め、新たな居場所を計画する。集まっているからこそ出来る空間を実現するために、異なるアク

ティビティ同士を透明な外部空間で分けることにした。東西方向に長い敷地をタテに分割し、そこにアクティビティを配置する。異なるアク

ティビティをすり抜け、異なるアクティビティが積層する様子を眺める。学生が自分たちの居場所だと体で実感できるような空間を設計した。

建築設計製図 第二 / 第2課題

Sophomore Studio Work: Autumn Semester

住宅設計課題：都市と住居

“City and Housing”

担当：

青木義次 [教授]、奥山信一 [助教授]、藤井晴行 [助教授]

Yoshitsugu AOKI (Professor), Shin-ichi OKUYAMA (Associate Professor),
Haruyuki FUJII (Associate Professor)

木下芳郎 [助手]、菅原麻衣子 [助手]、熊井正喜 [M2, TA]、
香川卓也 [M1, TA]、西野孝弘 [M1, TA]、山田晋治 [M1, TA]

Yoshiro KINOSHITA (Research Associate), Maiko SUGAWARA (Research Associate),
Masaki KUMAI (M2, Teaching Assistant), Takuya KAGAWA (M1, Teaching Assistant),
Takahiro NISHINO (M1, Teaching Assistant), Shinji YAMADA (M1, Teaching Assistant)

講評会：

藍澤 宏 [教授]、大佛俊泰 [助教授]

Hiroshi AIZAWA (Professor), Toshihiro OSARAGI (Associate Professor)

以下は、授業の内容を木下 [助手] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。

本課題は6-7人のグループで商業・公共施設と複合した集合住宅地を設計するものである。都市に住むことの意義について考え、これを実感できる集合住宅地として提案することを求めている。敷地は去年と同様に東急東横線都立大学駅近くに設定した。グループで行う活動を第1課題からさらに広げ、全体コ

ンセプト、ゾーニング、複合する施設内容や各自が設計する敷地のわりふり等をディスカッションによって決めながら課題を進めることとしている。抽象的な議論に終始することのないよう、具体的なスケールのボリューム模型やスケッチを用い、手を動かしながらお互いの考えを確認するよう配慮したが、具体的な形になかなか至らず個人の設計に移ることができないグループもあり、各自の設計に割く時間にはグループ間で差が見られた。今まで周囲との関係のとり方は平面的な配置の調整やブリッジでつなぐといったかたちがほとんどであったが、互いの建物を立体的に組み合わせて空間を作り出すといった、本課題の特徴を生かしたデザインの可能性の広がりが見られた。

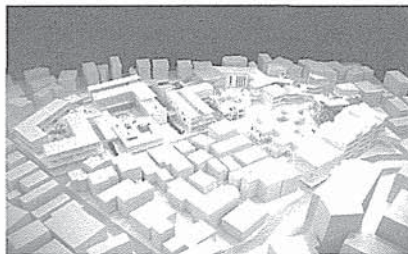
This assignment specified the design of an urban housing complex and was produced by groups of students. Most participants had difficulty with meeting deadlines, since reaching agreement with other members took a long time. One group designed their space by simply adding together each individual member's building in interlocking fashion. This type of design exploration has not been attempted before at Titech.



敷地図

層

Aグループ Group A



模型写真



断面図



平面図



断面図

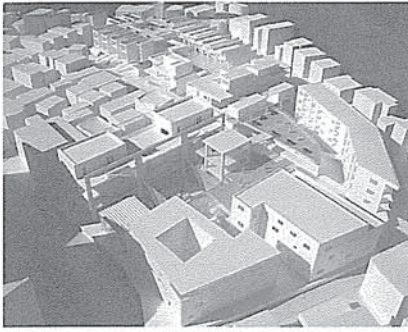
都市を異なる用途の層の重なりとしてとらえた。層によってつながる住居を行き来することにより、異なった世界を体験できるよう設計した。

Aグループメンバー：
浅野貴文、新垣祐子、安藤広隆、五十嵐麻美、
石波友輔、牛渡ふみ、大口信也

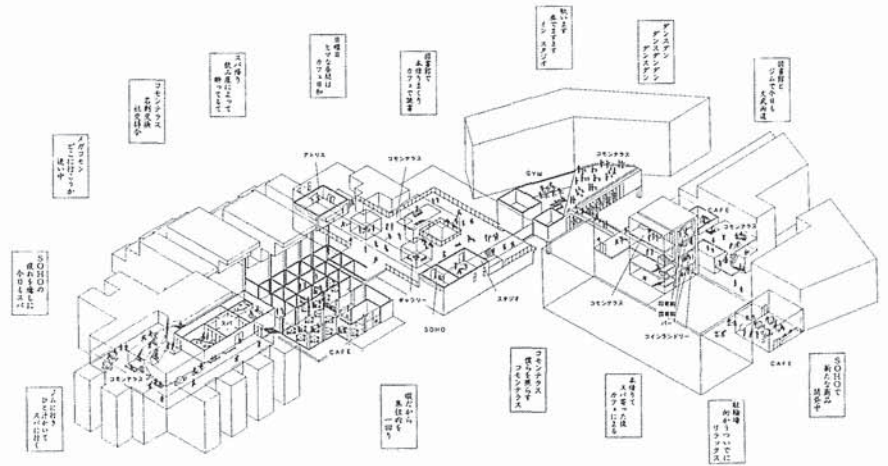
Takafumi ASANO, Yuko ARAKAKI, Hirotaka
ANDO, Asami IGARASHI, Yusuke ISHIWATA,
Fumi USHIWATA, Sin-ya OOGUCHI

メガコモン

Eグループ Group E



模型写真



アクソノメトリック



断面図

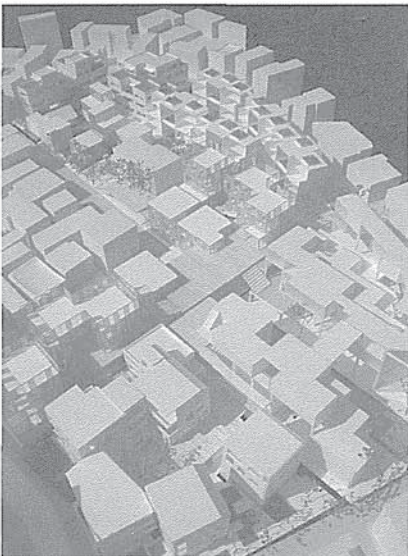
集合して住まうことで生まれるスペースを住民がどのように使うか、その使い方、カスタマイズ方法のきっかけとしてメガコモンを提案した。

Eグループメンバー：
玉井英輔、津村万梨子、土井 司、内藤智之、
中野修太、中村真広

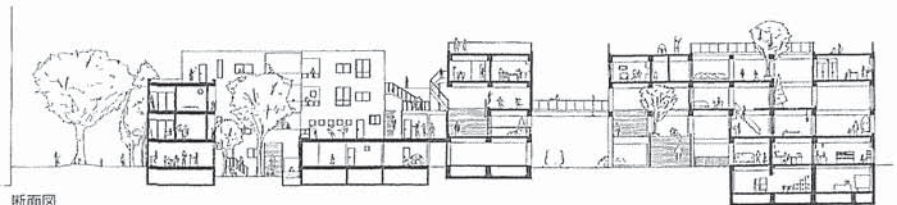
Eisuke TAMAI, Mariko TSUMURA,
Tsukasa Doi, Tomoyuki NAITOH,
Shuta NAKANO, Masahiro NAKAMURA

住人十色

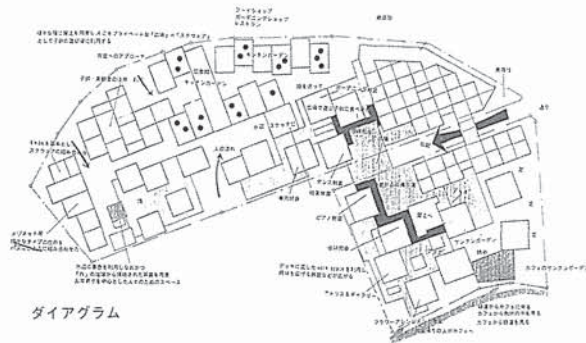
Hグループ Group H



模型写真



断面図



ダイアグラム



断面図

多種類の住戸プランによって住み手が自分の好みのライフスタイルを選択できることが、多様な暮らしの集まる都市に住むことと考えた。

Hグループメンバー：
山崎康太、山本 茂、吉岡 慶、吉田 泰、
若村祐介、巽 彩子

Kota YAMAZAKI, Shigeru YAMAMOTO,
Kei YOSHIOKA, Yasushi YOSHIDA,
Yusuke WAKAMURA, Ayako TATSUMI

建築設計製図 第三／第1課題

Third-year Studio Work: Spring Semester

「代官山に建つギャラリーとシネマコンプレックス」
“Cinema Complex in Daikanyama”

担当：

佐藤尚巳 [非常勤講師、佐藤尚巳建築研究所]
Naomi SATO (Guest Professor, Naomi Sato Architect)

八木幸二 [教授]

安田幸一 [助教授]

Koji YAGI (Professor)

Koichi YASUDA (Associate Professor)

是永美樹 [助手]

武田新平 [M2,TA]、田中盛志 [M2,TA]

Miki KORENAGA (Research Associate)

Shinpei TAKEDA (M2, Teaching Assistant), Seiji TANAKA (M2, Teaching Assistant)

ゲストクリティック：

金箱温春 [非常勤講師、金箱構造設計事務所]

工藤和美 [シーラカンズK&H]

坂本一成 [教授]

Yoshiharu KANEBAKO (Guest Professor, Kanebako Structural Engineers)

Kazumi KUDO (Coelacanth K&H)

Kazunari SAKAMOTO (Professor)

以下は、2004年5月25日に行われた講評会の模様を、学生編集委員の深澤千賀子 [M2] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

[課題内容]

代官山の猿楽町交差点に面する一等地にギャラリーとシネマコンプレックスを計画する。

周辺には横文彦氏設計によるヒルサイドテラスの一連の建築群、デンマーク大使館、数多くの低中層のファッションビルが建ち並び、良好な賑わいと都市景観を形成している。現在敷地には、奈良県渋谷寮が建っているが、街路に面して閉鎖的な構えをしており、周辺環境から孤立している。代官山駅から猿楽町交差点への通過点でもあるので、街づくりの視点から人の流れや溜りを考慮した好ましい都市環境を提案する。

[課題条件]

1. 貸しギャラリースペース：750～1000m²。
2. ミニシネマ：50～200席。3館。ロビーを共用とする。
3. ショップ、カフェ等：数店舗。延べ500m²程度。
4. 搬入用トラックの駐車スペース確保。



課題敷地

[総評]

佐藤 6週間の短いプロジェクトで間にゴールデンウィークを挟んでいたのですが、3年生の最初の課題としてはとても熱心に取り組んでいたし、私自身もみなさんのエネルギーを感じて嬉しく思いました。今回選んだ20作品それぞれに力が入っていたし、個人の思い出のようなものも出ていて非常によかったです。プレゼンテーションの手法としても、3年生の最初の課題としてはレベルが高いと思います。また、今回展示していない学生の作品にも捨てがたい、レベルの高いものがありました。

今回は、議論しやすい、アイデアが突出したものを中心に選びましたが、その議論が皆さんの糧になることと思います。選んでない学生の中にも、街に対していねいに構えを作っていたりとかがんばっている人はたくさんいました。私自身も、みなさんと楽しいひとときを過ごさせていただきました。ありがとうございました。

[敷地条件]

計画地：渋谷区恵比寿西1-36 敷地面積：約1,350m²

延床面積：4,000m²以内 建築面積：950m²以内

高さ制限：なし。但し、周辺環境との関係、人の流れを考慮すること。

その他の条件：1. 敷地地下の一部を東急東横線が通過しているため、線路から3m以内は地下建築物の構築は禁止。2. 既存樹木の伐採は、各自考慮の上判断すること。3. 敷地内には約1層分の高低差がある。

[提出物]

設計概要、配置図 1/500、各階平面図 1/200、断面図2面以上 1/100、立面図3面 1/100、外観パース、内観パース、模型1台 1/200

The site is a prime commercial district of Daikanyama facing the intersection at Sarugaku-cho. Surrounding the site, a pleasant bustle and city-scape are formed by the Hillside Terrace series and the Embassy of Denmark designed by Fumihiko Maki, and a number of fashion buildings. A dormitory stands on the site now, but this façade is uncommunicative and isolated from the surroundings. The assignment was to design a gallery and cinema complex as a favorable urban environment taking into consideration the flow of people from Daikanyama station to the busy Sarugaku-cho intersection.



佐藤尚巳 Naomi SATO

1955年 東京都生まれ

1979年 東京大学工学部建築学科卒業

1979～86年 菊竹清訓建築設計事務所

1988年 ハーバード大学デザイン学部大学院建築学科修了

1988～1990年 I.M.Pei & PARTNERS

1990～1996年 ラファエルヴィニオリ建築士事務所

1996年 佐藤尚巳建築研究所設立

主な作品：東京国際フォーラム、南通英会館、

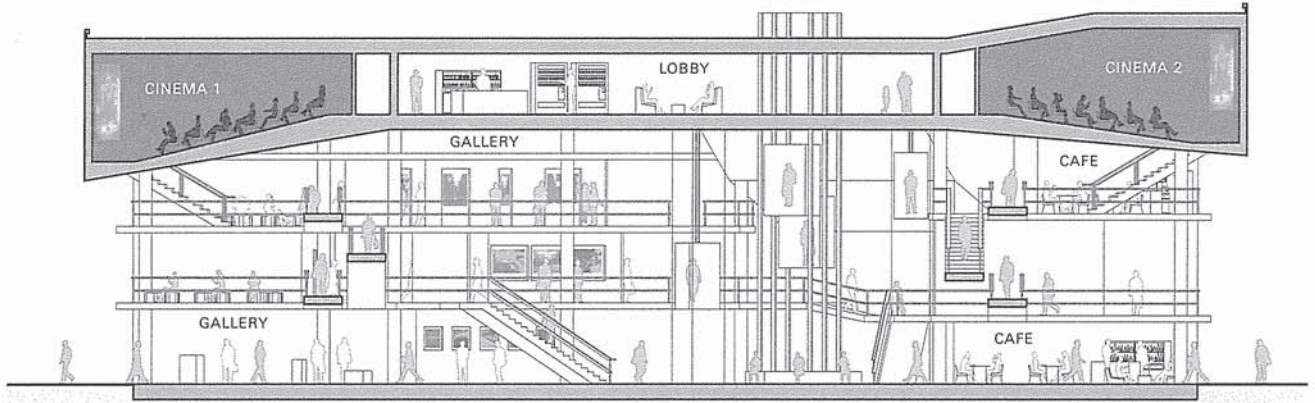
武蔵野市吉祥寺シアター



講評会風景

CINEMA-MOVE-COMPLEX

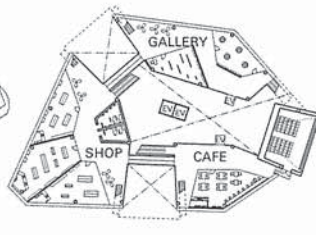
岩間直哉 Naoya IWAMA



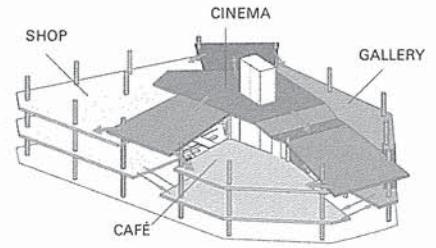
断面図



2階平面図



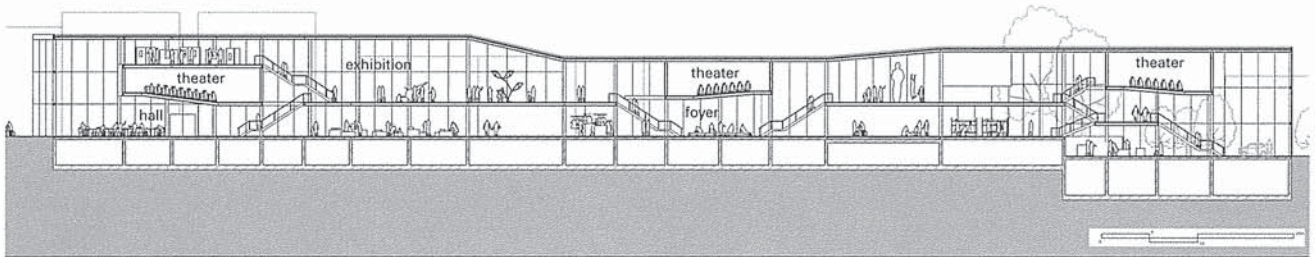
3階平面図



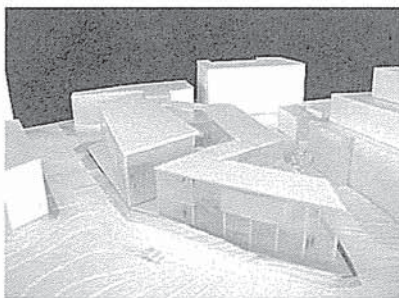
コンセプト

DAIKANYAMA CINEMA TUBE

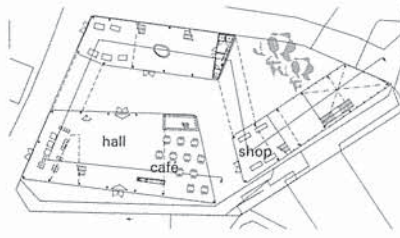
塚越智之 Tomoyuki TSUKAGOSHI



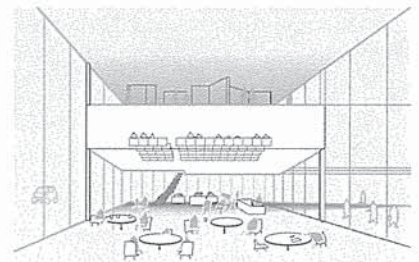
長手断面図



模型写真



1階平面図



内観バース

CINEMA-MOVE-COMPLEX

岩間 建物の中に人の流れを生み出すことを考えシネマを目的空間として捉えました。最上階に共有ロビーをもつ道とシネマを放射状に配置し、分節されたヴォリュームにランダムなレベルでスラブを配置し、ショップやギャラリーを設置しました。映画を見た後は共有ロビーに戻ることなくスラブに人が排出されます。ファサードは上から下への人の流れが外からも見えるように工夫しました。

安田 三方の入り口の上に必ず映画館があり構成が明解。映画館のロビーを共用することに

よって、変型プランをうまくまとめている。

佐藤 シネマへのアクセスがエレベーターしかないのは問題。

金箱 複雑な形態だが、構造もよく考えられている。

DAIKANYAMA CINEMA TUBE

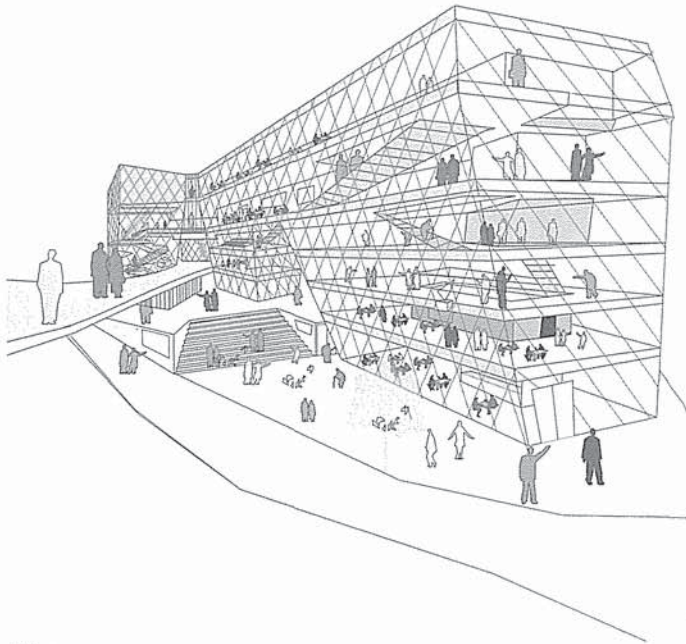
塚越 移動する時に、建物内のソフトを全て体験できるようなチューブ状のヴォリュームを考えました。2層または3層の高さになっていて、上からはシネマのヴォリューム、下からはショップのヴォリュームが突き抜けることに

よって残部空間に抑揚を持たせ、そこをギャラリーなどに使っています。

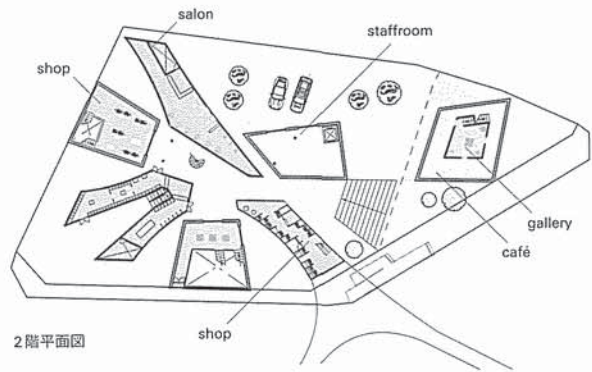
佐藤 料金をとったり、限られた人がギャラリーを使うような場合は、他の人はシネマに到達できるの？

塚越 チューブのパブリックな部分は、芸術家の卵たちが自由に展示できるようにし、料金を取るギャラリーと分けています。

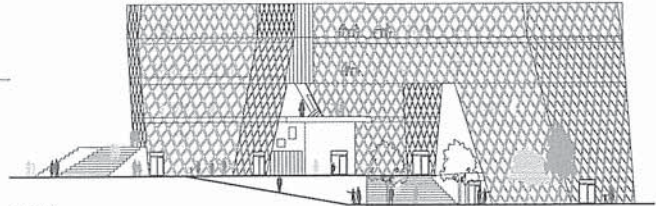
佐藤 長い空間の腹の部分に、ソリッドな部分が出てくるコンセプトは明解で成功している。吹き抜け等をうまく配置し、閉鎖感もない。



外観パース



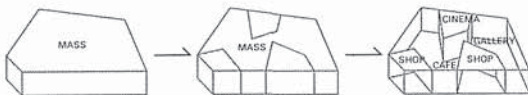
2階平面図



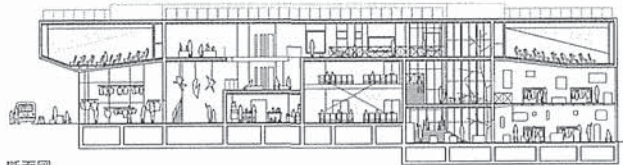
立面図

characture

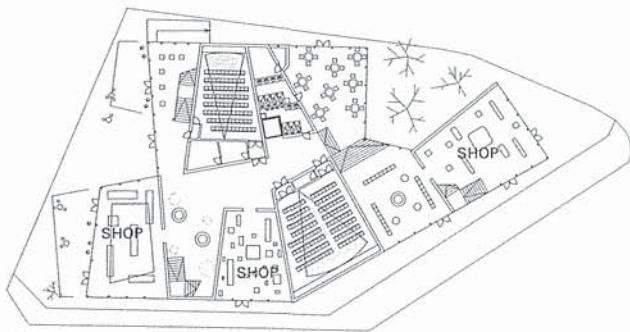
千田友己 Yuki CHIDA



コンセプト



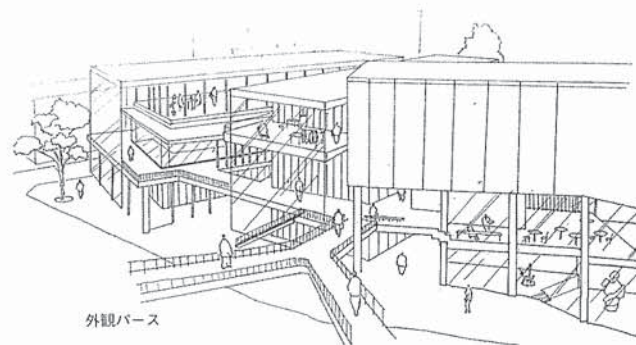
断面図



1階平面図

cinema houses

木下皓之 Koji KINOSHITA



外観パース



1階平面図

D4LS

金塚 敷地の周りの人の流れに沿うように道を作り、+3000のレベルにメインの活動の場を設けました。その周りに機能を持たせてあります。目的性の高いシネマは上部に配置しました。
 金箱 構造と外層のイメージは？
 金塚 外も内も全てブレースです。ブレース以外の部分は全部ガラスです。
 金箱 床に交わる部分が全てブレースの交点になっている。良く考えてあります。
 金塚 それはたまたまです。

characture

千田 大きなヴォリュームから、ある特定の空間を搾取することによってショップやシネマを作りました。残った曖昧な空間に、パブリックなショップ等を設置し、動線を選択肢が多く飽きの来ない空間を目指しました。
 佐藤 映画館を3つではなく5つにした理由は？
 千田 シネマのヴォリューム感を利用するのに、3つでは弱いと思いました。
 八木 隙間をうまく利用する為に増やしたの？
 佐藤 ソリッドなものが欲しかったのですね。
 坂本 説明の際に、構成がおもしろいからとい

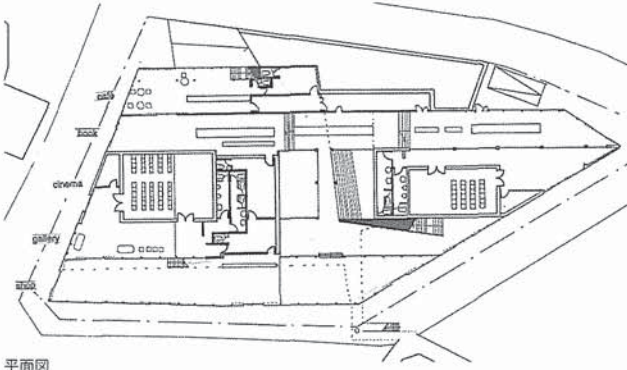
う以上の説得力が欲しいですね。

cinema houses

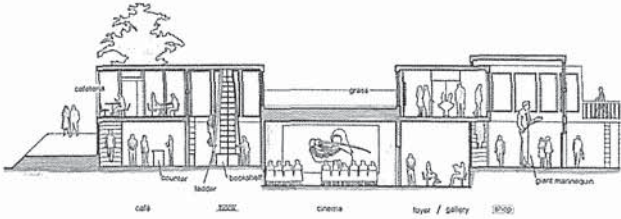
木下 閉じたシアターと開いた店舗の関係を、街並みの住宅と店舗の関係のようにイメージし、街並みのように奥行きのある建物を設計した。八木 駅からのアプローチは重要だが少し配慮不足。東側は庭的な場所になると言ったが、通りに面したほうの隙間も考えるべきだね。
 金箱 シアター部分の構造は多少考えられているが、屋上のカフェは構造が描かれていない。

stripes

石川翔平 Syohei ISHIKAWA



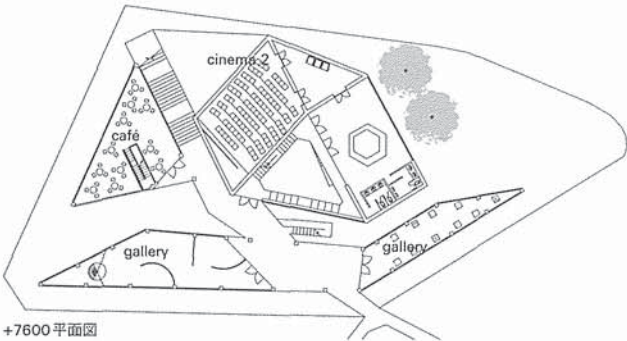
平面図



断面図

C + D

岡山俊介 Syunsuke OKAYAMA



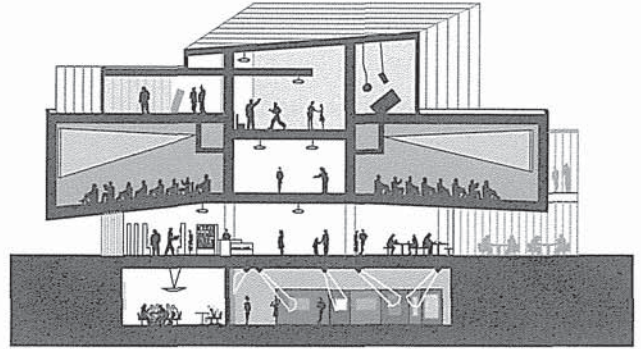
+7600 平面図



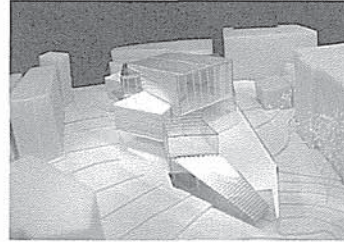
模型写真

landscape gallery

中川大紀 Daiki NAKAGAWA



断面図



模型写真

Daikanyama cannon

重田光雄 Mitsuo SHIGETA



断面図



1階平面図

stripes

石川 映画館を特化せずプログラムを層状に並べ、相互の関係性を楽しめるようにしました。
 佐藤 層レイヤーで切るのはわかりやすい。レイヤー間の行き来がほとんどできない構成は、この規模だからできる。
 八木 建物だけでなく、その隙間にも人を引き込むようになっているとよかった。
 安田 真ん中の映画館が閉鎖的なので、建築全体を視覚的に分断している。

landscape gallery

中川 敷地の風景を一部残す事を考え、残した風景によって軸線をつくりました。
 坂本 発散させる形態は、意図しているのか？
 中川 街が変化するので色々な正面性を持ち、変化を受け止めることを考えました。
 坂本 そのことをより明解に表現すべきですね。

C + D

岡山 大きな動線とそれをつなぐ路地を設け、様々なサーキュレーションを作りました。シネマは螺旋状にあがっていきます。

佐藤 階段下のスペースなど、細やかな部分までしっかり設計されています。
 安田 動線もなかなかおもしろい。

Daikanyama cannon

重田 代官山は歩く事は楽しいが、上下の移動は建物内で完結しています。分棟と外部階段により、街の延長としての施設を設計しました。
 佐藤 分棟の高さが違うのだが群としての建物の見え方が表現されていない。
 安田 動線として二重螺旋を利用しているのがおもしろい。

建築設計製図 第三／第2課題

Third-year Studio Work: Spring Semester

「都市公園に建つスポーツ・コンプレックス」
“Sports Complex in an Urban Park”

担当：

金箱温春 [非常勤講師、金箱構造設計事務所]
Yoshiharu KANEBAKO (Guest Professor, Kanebako Structural Engineers)

安田幸一 [助教授]

八木幸二 [教授]
Koichi YASUDA (Associate Professor)
Koji YAGI (Professor)

是永美樹 [助手]

武田新平 [M2,TA]、田中盛志 [M2,TA]
Miki KORENAGA (Research Associate)
Shinpei TAKEDA (M2, Teaching Assistant), Seiji TANAKA (M2, Teaching Assistant)

ゲストクリティーク：

佐藤尚巳 [非常勤講師、佐藤尚巳建築研究所]

関野宏行 [佐藤総合計画]

坂本一成 [教授]、竹内 徹 [助教授]

堀田久人 [助教授]、奥山信一 [助教授]
Naomi SATO (Guest Professor, Naomi Sato Architect)
Hiroyuki SEKINO (AXS SATOW INC.)
Kazunari SAKAMOTO (Professor), Toru TAKEUCHI (Associate Professor),
Hisato HOTTA (Associate Professor), Shinichi OKUYAMA (Associate Professor)

以下は、2004年7月13日に行われた講評会の模様を、学生編集委員の須賀貴康 [M2] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります (敬称略)。

[課題内容]

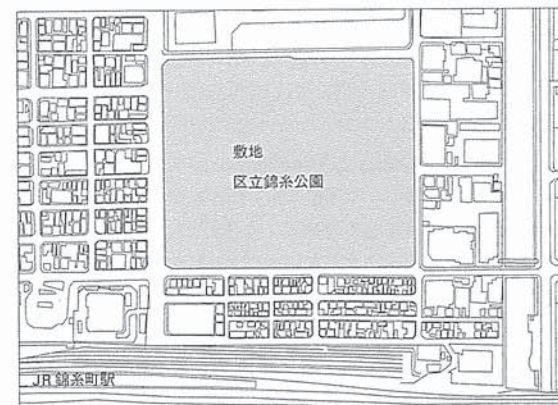
JR錦糸町駅前の区立錦糸公園 (5.6ha) における老朽化した区立体育館の建て替え。旧体育館を残したまま、新体育館を建てる。その後旧館を解体し、旧館跡地も含めて公園全体をスポーツ総合施設として整備する。周辺の都市環境を読み込み、公園全体のランドスケープデザインと建築との関係を考える。

[課題条件]

オプションA：バレーボール3面を持つメインアリーナと500席の観客席とランニングコースの併設。

オプションB：50m×25mの一般用プールと15m×6mの幼児用プール。飛び込み台設置は自由。自然光が入ることを考慮する。

A、Bいずれかを覆う大スパン屋根を設計する。



課題敷地

[総評]

金箱 今年には構造の全体模型を作ってもらいました。1/100ということでもかなり大きく、途中で1/200でも仕方ないかなとも思いましたが、最終的には1/100で作ってもらって成功でした。例年だと講評の際に、模型があっても図面の描き方とか計画に議論が集中するのですが、今回は終始構造的な内容に議論が盛り上がりました。それくらい1/100模型は魅力的です。課題の初めに、力の流れを立体的に考えて欲しいと言いましたが、輪切りの構造でも部材を少し斜めにしたりすることで力の流れが変わるし、エスキスの段階でいくつも模型をつくってみるとずいぶん良くなるのがわかります。そのわずかな差が、実際にはとても重要なことをこの課題を通して学んで欲しかった。

安田 今回の課題はきつかったかもしれませんが、1週間の前に図面を提出してもらい、残り1週間は模型作りに集中してもらったのですが、そのため模型の密度が上がりました。去年は部分を作ってもらったのですが、今回は大きくても全体を作るよう課題を出してしまい、内心心配していたのですが、構造体全体をつくることによってどちら側に倒れるか、どこかの部分が弱いかなど、実感として理解できたと思います。

[敷地条件]

計画地：区立錦糸公園内

[提出物]

全体模型 1台 1/500、大スパン構造模型 1台 1/100、設計概要、配置図 1/1000、平面図 (メインフロア) 1/200、その他の各階平面図 1/500、断面図 (架構模型部分) 1/100、その他断面図 1/200、立面図 2面 1/200

The assignment was to reconstruct the old public gymnasium at Kinshi Park in front of JR's Kinshi-cho station taking into account the relation between the landscape of the park itself and the architecture of the surrounding urban environment. After reconstruction, the old gym would be demolished, and the park redesigned as an overall indoor-outdoor sports complex.

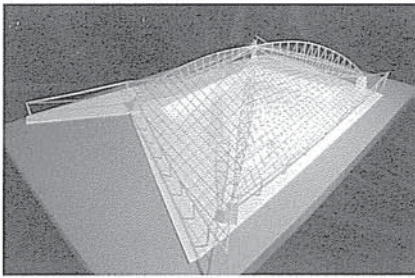


金箱温春 Yoshiharu KANEBAKO

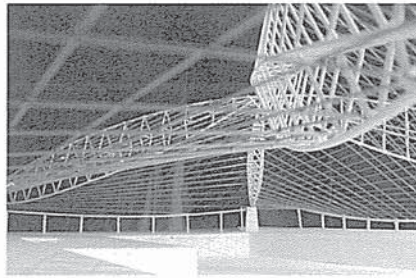
1953年 長野県生まれ
1975年 東京工業大学工学部建築学科卒業
1977年 同大学院修了、横山建築構造設計事務所入社
1992年 金箱建築構造設計事務所設立
1998年 日本建築構造技術者協会賞受賞
2005年 松井源吾賞受賞
主な作品：京都駅ビル、ふれあいセンターいづみ、遊水館、
湯博物館、広島市立基町高校、兵庫県立新美術館



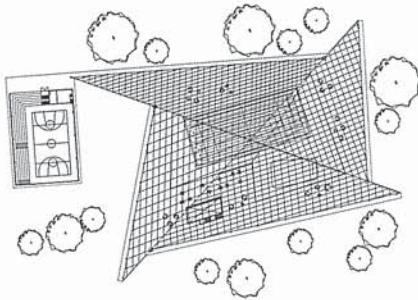
エスキス風景



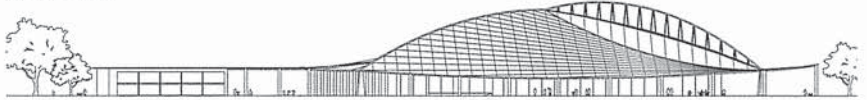
模型写真 外観



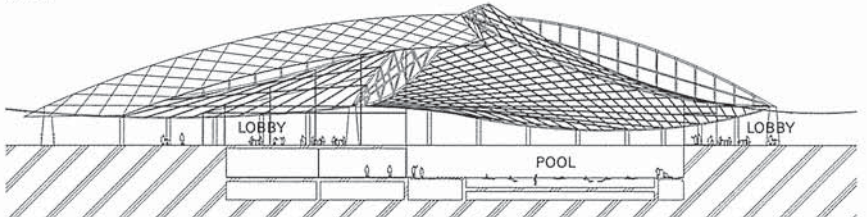
模型写真 内観



1階平面図



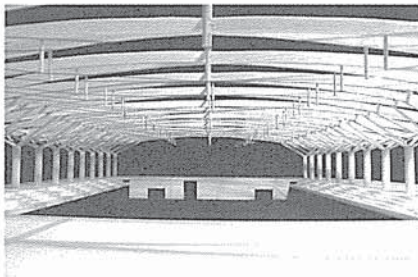
立面図



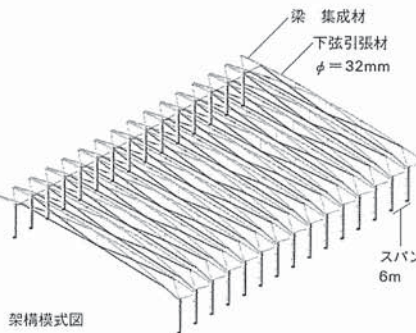
断面図

Connected sports park KINSHI

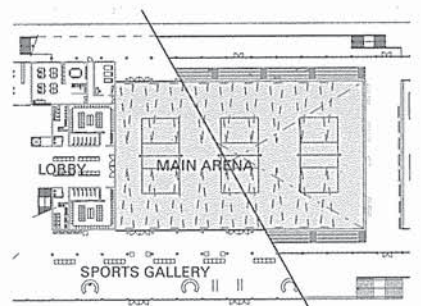
大熊克和 Yoshikazu OKUMA



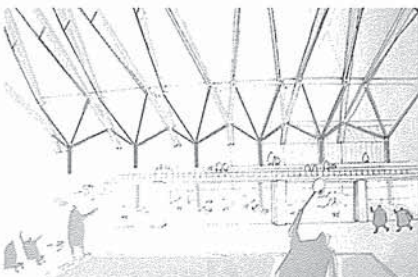
模型写真



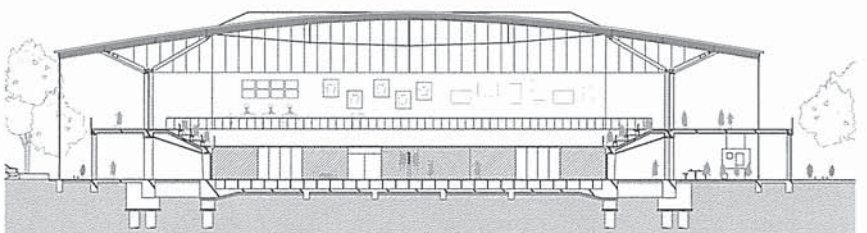
架構模式図



1階平面図



内観パース



断面図

CENTRIPETAL

丸山 公園という開放的な特長を生かし、大屋根を乗せ半外部の空間を作りました。構造は立体トラスにHPシェルで力を分散させています。こうすることで外部からは四方からアクセスでき、内部からは外と繋がるようにしました。

竹内 HPラチスシェルはせん断には弱いですが、三角形状にしてがんばってもたせている。

金箱 エスキスを行うたびに少しずつステップアップし、最終的にもすごく良くなった。

安田 ライズを上げることで、空間的な広がりや抑揚が出て良くなった。

佐藤 実際に屋根を張っても光が入ってインテリアがきれいになりそうだね。

安田 こういう架構はありそうで見たことがないですよ。

竹内 駒沢の体育館で似たのがありますが、段違いに組み合わせたものはないですね。

Connected sports park KINSHI

大熊 敷地全体を大きなプロセスと考えて、中心に大きなフィールドをつくり、周りにスポーツ施設を配置しました。圧迫感をなくすために張弦梁を多用する構造を考えました。

安田 部材数が多いかもしれないが、表現としては成功しています。

八木 屋根を隠してしまうのもったいない。

竹内 そうですね。構造の蛇腹が見えた方がきれいですね。ただ妻面がうまくいっていない。屋根をきれいにしても外観は前から見るから、こういう風になると普通の建物と同じに見えてしまう。

安田 大スパン建築は妻面に一番テクニックがいるんですね。

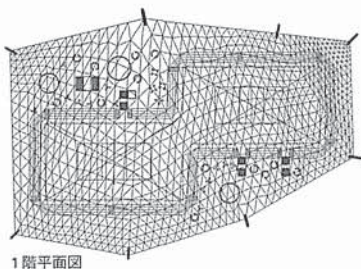
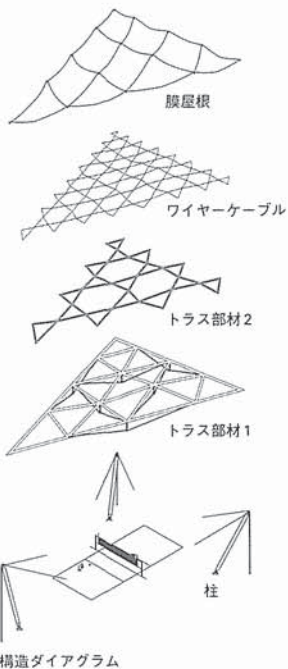
竹内 皆さん何となくガラスにして終わってしまう人が多いですよ。

RE; PLAY GROUND

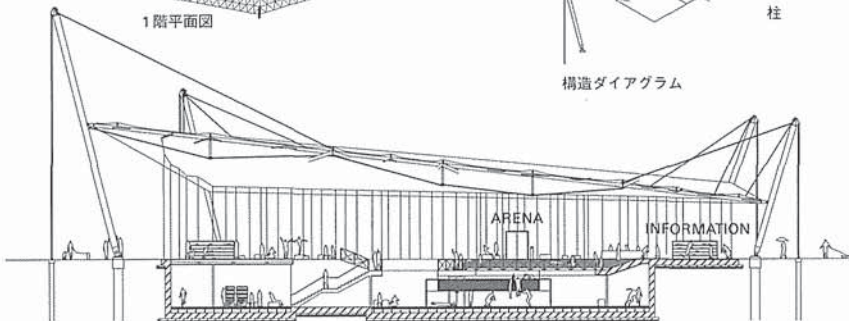
千田友己 Yuki CHIDA



模型写真



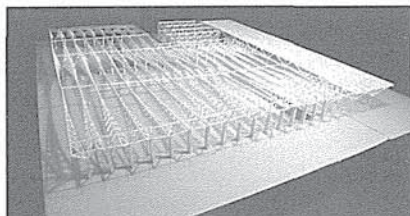
1階平面図



断面図

Co-operation

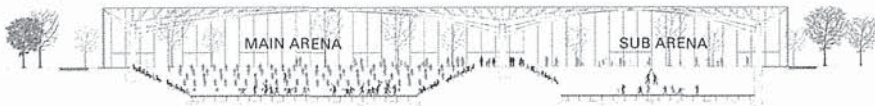
廣野雄太 Yuta HIRONO



模型写真 外観



模型写真 内観



断面図

RE; PLAY GROUND

千田 建物を分散させて配置することで、そこを起点に公園全体がまんべんなく利用されることを考えました。構造は屋根をある規則で三角に割り、張弦梁を利用して支えます。

安田 模型は図面よりデフォルメされているが、もっと力の流れのヒエラルキーが表現された方が葉脈のように面白くなったのでは。

金箱 ガラスと屋根の取り合いがあまり考えられていないが、ひとつはガラスを自立させる方法で進めると解決できる。

キリコドーム

下平 このあたりは江戸工芸の工場などがあり、その江戸切り子をモチーフにしたドームを考えました。また公園には池を張り巡らせ、それぞれの施設を島のようにしました。ドーム内にも水の反射光が入るようになっています。

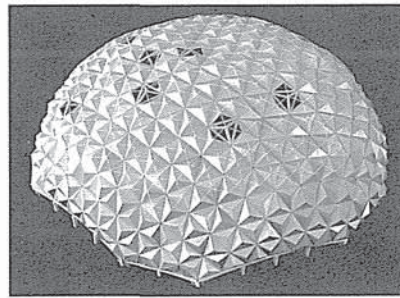
竹内 形は完全な球形じゃなくてメロンパン風になっているので頂点が弱くなっている。だから模型は正直に垂れてしまっている。

安田 図面も切り子の感じがよく出ているね。

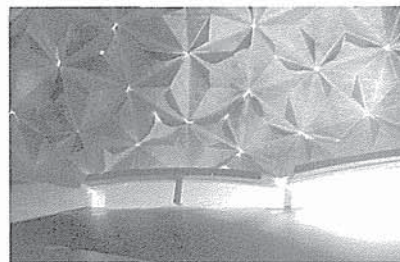
竹内 この模型の設計と施工は大変だったね。

キリコドーム

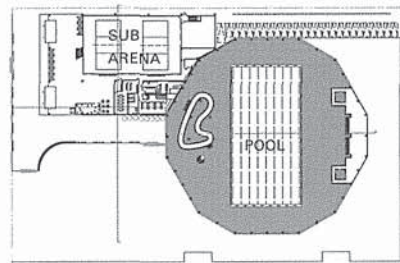
下平真子 Naoko SHIMOTAI



模型写真 外観



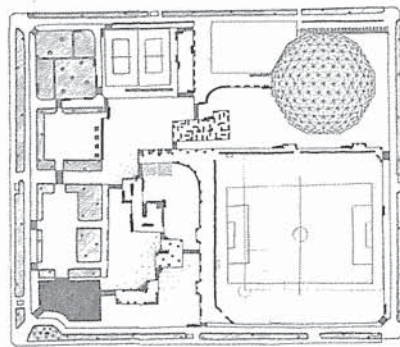
模型写真 内観



1階平面図



断面図



配置図

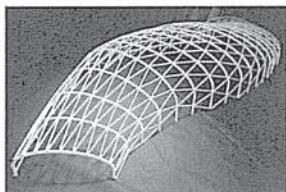
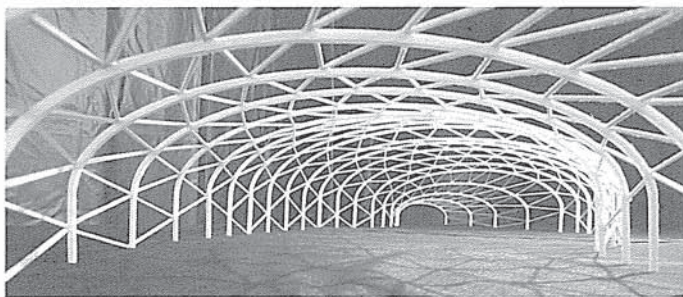
Co-operation

廣野 運動施設と公園をうまく分節するために施設を半地下にし、公園を歩いている人がベンチで休んだ時に観客にもなれることを考えました。構造は中心にヒンジのあるトラスを考えメインとサブのアリーナを連続させました。

安田 構造部材が足りなそうに見えて足りている。トラスの中心はちょっと細すぎますね。

金箱 ガセットプレートのデザインがすばらしい。この使い方だと施工が楽になります。

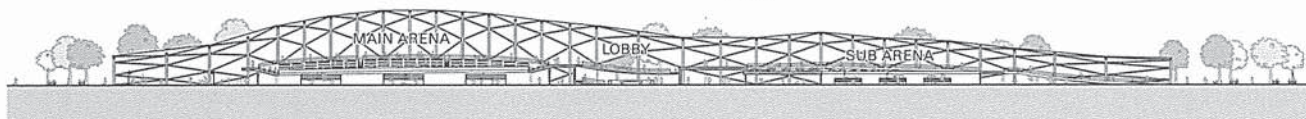
安田 なんか昔懐かしい感じがするね。



模型写真 外観●、内観●



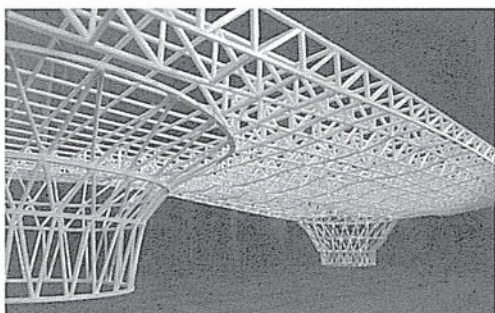
配置図



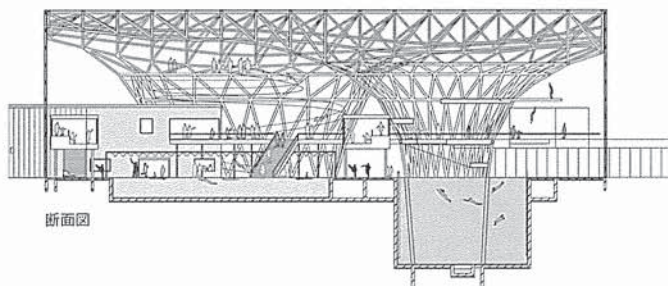
断面図

AQUA CUBE

金塚雄太 Yuta KANEZUKA



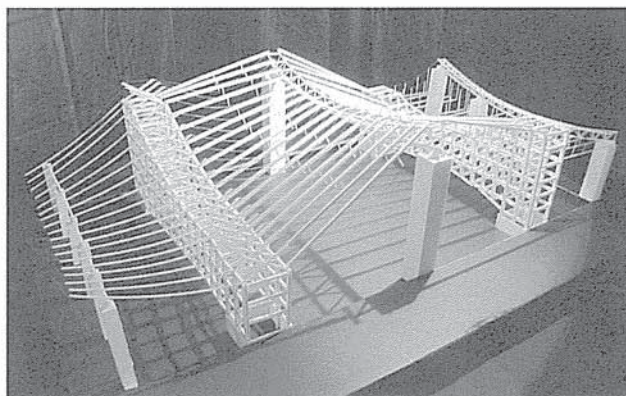
模型写真 外観



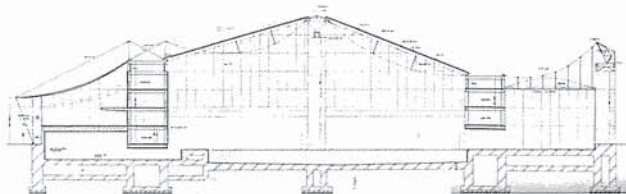
断面図

P3

山崎新太 Arata YAMASAKI



模型写真 外観



断面図

sports-tube-complex

岩間 公園内を、広がりを持つストライプで構成しました。同じように体育館もチューブ状にして、構造は鋼管リブをアーチ状に配したシェル構造にしました。

竹内 中が見えないなら立面をストライプにできますが、ポリカーボネートを張るとなると中が見えてしまい印象が変わると思います。

八木 実は立面に三角の線が入るはずだから、どちらにしてもそのようには見えないね。

佐藤 伊東豊雄さんが似たのをつくっているがこれはもっと構造がシンプルだね。

AQUA CUBE

金塚 プールコンプレックスを設計しました。屋根をうねらせることで、中にいる人が空を見るとき海の中から見ているようにしました。主構造は二本の足で支えることを考えています。

安田 リングの中にはウォーターライダーが入るんでしょ？ それを表現して欲しかった。

佐藤 図面では柱から屋根まで連続的に繋がっているが、模型はそうになっていない。

金箱 現実的にはグリッドを考えると模型のように不連続点ができるが大きな問題ではない。

P3

山崎 公園に周囲の街区と対比させたグリッドを持たせ、全体をメインの道と小さな公園の集合でつくりました。構造はメインの道が貫通している所の上を主構造としています。

安田 徐々に変化する架構が面白いですね。竹内 せっかくトラス梁なんだから部材はこんなに太くなくて良い。柱も太い。

佐藤 構造がすごく資源のムダ使いに見える。張弦梁はもともと材料を少なくするために使うのだから、もう少し考えられるはず。

建築設計製図 第四／第1課題

Third-year Studio Work: Autumn Semester

「Void Archipelago」

“Void Archipelago”

担当：

北山 恒 [非常勤講師、横浜国立大学教授]

Koh KITAYAMA (Guest Professor, Yokohama National University)

坂本一成 [教授]、奥山信一 [助教授]、塚本由晴 [助教授]

Kazunari SAKAMOTO (Professor), Shinichi OKUYAMA (Associate Professor), Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor)

中井邦夫 [助手]、足立 真 [助手]、

久野靖広 [D3,TA]、遠藤康一 [D3,TA]

Kunio NAKAI (Research Associate), Makoto ADACHI (Research Associate),

Yasuhiro KUNO (D3, Teaching Assistant), Koichi ENDO (D3, Teaching Assistant)

ゲストクリエイター：

野口昌夫 [東京芸術大学助教授]

西沢大良 [西沢大良建築設計事務所]

安田幸一 [助教授]

Masao NOGUCHI (Guest Professor, Tokyo National University of Fine Arts & Music),

Taira NISHIZAWA (Taira Nishizawa Architects), Koichi YASUDA (Associate Professor)

以下は、2004年11月19日に行われた講習会の模様を、学生編集委員の四ヶ所高志 [M2] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

[課題内容]

或る日、六本木ヒルズの跡地が森ビルから巨大な森として当該行政単位に寄贈されることになった。ということにする。これを受けて僕たち都市再生NPOは以下のような都市戦略を考案した。

『20世紀に開発された最大の都市ニューヨークは中央にセントラルパークという領域が初期設定されていたことで世紀の間都市を持続させることが可能であった。とすれば、21世紀の東京は島状に残るヴォイド群(皇居・上野公園、代々木公園、新宿御苑・明治神宮・神宮外苑・青山墓地・隅田川・東京港湾など)の連鎖による「Void Archipelago」というシステムによって都市再生を行うという仮説がたてられる。

現状ではこのヴォイド群と既存市街地は不連続なエッジを形成しているが、それを互いに浸透する(またはボイドと既存市街地の両義的な)機能をフリッジに与えることによって、その場所を定義づけようというものである。僕たちは寄贈された六本木ヒルズ跡地の森を都市実験の場所とすることにした。

この森のフリッジの帯状部分にプロジェクトサイトを設定し、連鎖する施設として計画する。このヴォイドと既存市街地の両義的な施設は、必ず何らかのテーマ設定がされた居住とパブリックスペースの集合形式とする。この施設が都市内にプラグインされることで、都市はヒエラルキーを持ったテーマコミュニティという環境単位の連鎖と、そのレイヤーの重なりとして構造化される。』

この計画は1927年のヴァイゼンホフ・ジードルンクにおいて20世紀の都市住居が定義されたように、21世紀の都市構造を定義するものとして構想されている。

このスタジオは以下のような作業手順で行われます。

● STAGE 1 都市の読み取りと評価

READING：六本木ヒルズに行き、独自の「都市の読み方」を発見し、それを地図上に記述して下さい。

VISION：面白いと思う区画(1000m²程度)を決め、どのようなテーマコミュニティを提案するかそのプログラムを作成して下さい。

● STAGE 2 仮説をダイアグラムとして構想する

INTERVENTION：人々がここに集まって住む根拠を与える施設、ここを訪れた人々が気持ちよく過ごせる場所、そのような空間のダイアグラムを構想して下さい。既存市街地との空間的・時間的連続性を必ず織り込むこと。
PERFORMANCE：建築の形態は必ず論理的根拠が存在します。自分の意図が最も明快となる建築空間を構想して下さい。そして、あなたが考えた内容を最も効果的に伝える建築的表現を作成して下さい。

[総評]

北山 この課題はある政治的な意味合いをもっていて、20世紀の都市がどのようにつくられてきたのか、そして20世紀の都市をどのように再構成、再編集するかということまで本当は考えて欲しかったです。そういうポリティカルなメッセージを含んだ課題だったのですが、都市の成り立ちみたいなことまではとても考えが及ばなかった人が多かったのはちょっと残念です。課題が少し難しかったかもしれませんが、それに対して一生懸命やってくれた人もいるし、少し手を抜いている人もやはりいたという印象です。内容的には何人かはすごくいい答えを出してくれたので嬉しかったです。ただ、せっかくなので答えを考えられたのにプレゼンテーションができていなくてもどかしく思う人もいました。建築はやっぱり頭の中のアイデアやイメージをちゃんと相手に伝えることが大事ですから、もう少し真剣に相手に伝えようというプレゼンテーションをしてもらいたいと思います。

The project sets off from a supposition that, one day, the Mori Corporation will donate the site of Roppongi Hills to the government for the purpose of creating a large urban forest. We, an NPO (Non-Profit Organization) for urban regeneration are proposing an urban strategy called “Void Archipelago” — a hypothesis to bring about urban improvement by linking a group of isolated voids in Tokyo (Imperial Palace, Ueno Park, Yoyogi Park, Shinjuku Gyoen, Jingu Gaien, Aoyama Cemetery, Sumida River, and the area of Tokyo bay).

The task is to design a set of linked facilities, placed along a site to be selected on the “fringe” of this forest. The design should be based on a specific theme and contain both residential and public space in an attempt to integrate the two different characters that are the urban void and the existing city structure.



北山 恒 Koh KITAYAMA

1950年 香川県生まれ

1976年 横浜国立大学建築学科卒業

1977年 ワークショップ設立(共同主宰)

1980年 横浜国立大学大学院修士課程終了

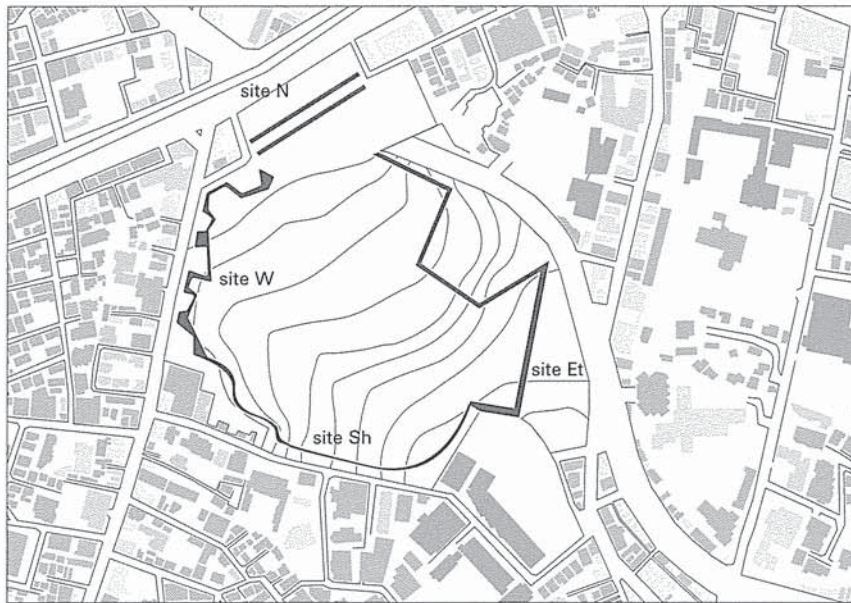
1995年 architecture WORKSHOP設立

現在 横浜国立大学教授、architecture WORKSHOP主宰

主な作品：F³ HOUSE、白石第二小学校(共同)、Lime House、Z-House、下馬の4軒長屋、住宅T×T、公立刈田総合病院(共同)

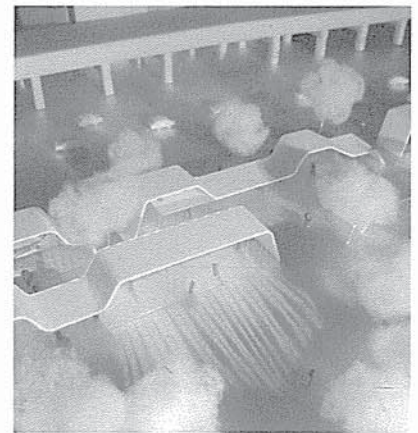
TOKYO VOID ARCHIPELAGO

服部 晓文 Akifumi HATTORI

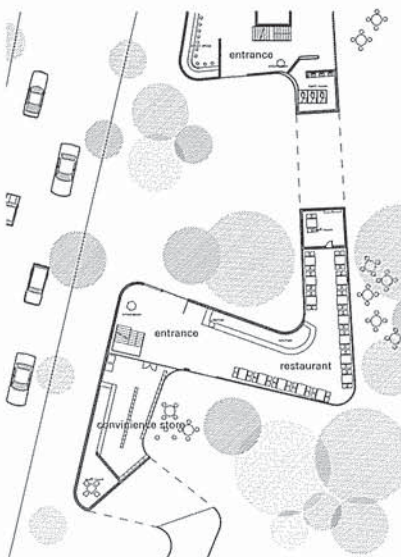


全体配置図

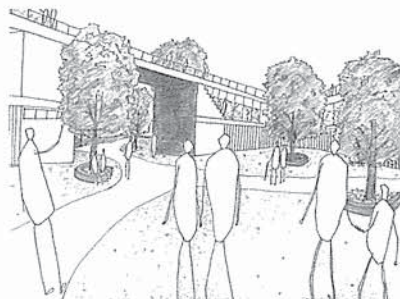
	Residential		Cultural/Embassy
	Office		Educational
	Food		Produce/Service
	Historic/Religion		



Site N 模型写真



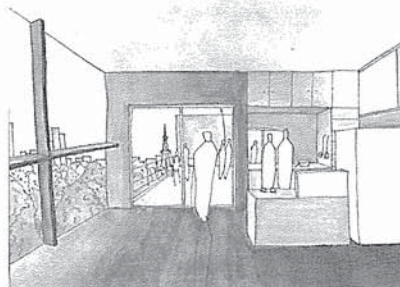
Site W 1階平面図



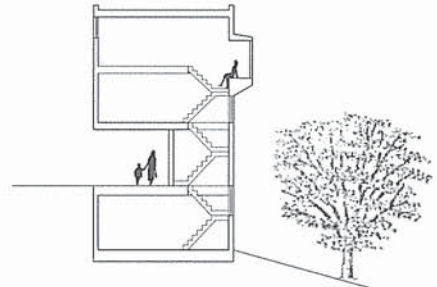
Site W パース



Site N パース



Site Sh パース



Site Sh 住宅断面図



Site Et 立面図

TOKYO VOID ARCHIPELAGO

服部 森の周りを囲むような建物を計画しました。この建物はそれぞれの場所で空間やモノの文脈を読み取り、それに応じて森とともに環境単位を形成します。この環境単位が場所ごとに独立するのではなく、環状の全体形を活かし「路」のメタファーとしての建築として曖昧につながっていくように考えました。

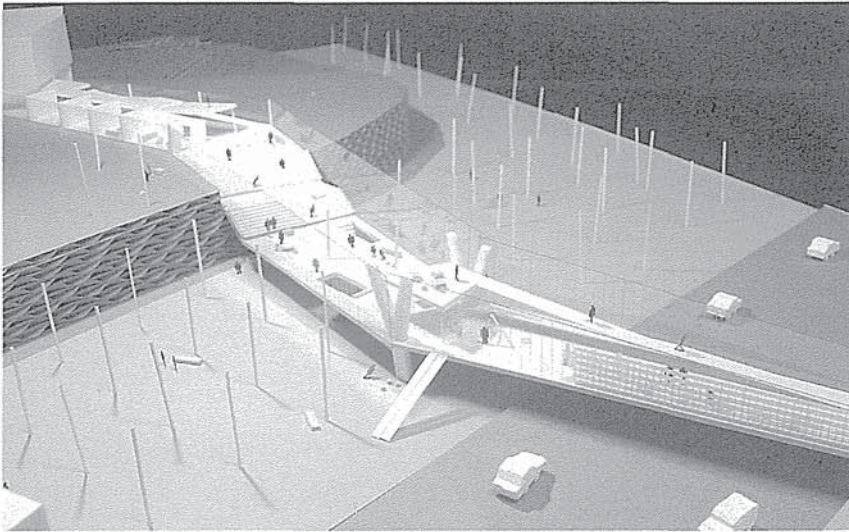
北山 課題としては、1,000m²程度の区画を決めるようにしていたが、規模とかを超越した全体計画を提案したのはこの案だけでした。その

ルールの破り方はとてもいいと思う。4ヶ所で具体的な図面を描いていますが、それぞれ周辺との関係を説明してください。

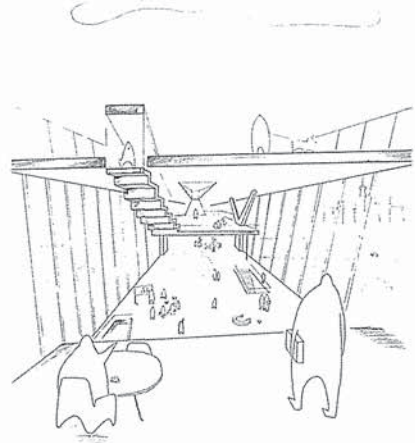
服部 旧テレ朝通り沿い (site W) は、商店街のような雰囲気なので、通り側には商店街の線を残しながら森の奥に入り込むようなもの考えました。南側の住宅地沿い (site Sh) は高台という立地を生かした4層の集合住宅とし、地上レベルのヴォリュームを最小限にすることで路を歩く人々に配慮しています。高速道路沿い (site N) は都市のノイズが大きい場所なので、

森と通りとの間にバッファーとなる2本の建物を建てました。高台の崖沿いの場所 (site Et) は一番眺めがよく、森全体を見られる住宅を計画しました。一層目を中心に幾つか穴を開けることで、この辺りを歩く人にも景色を楽しんでもらおうと考えました。

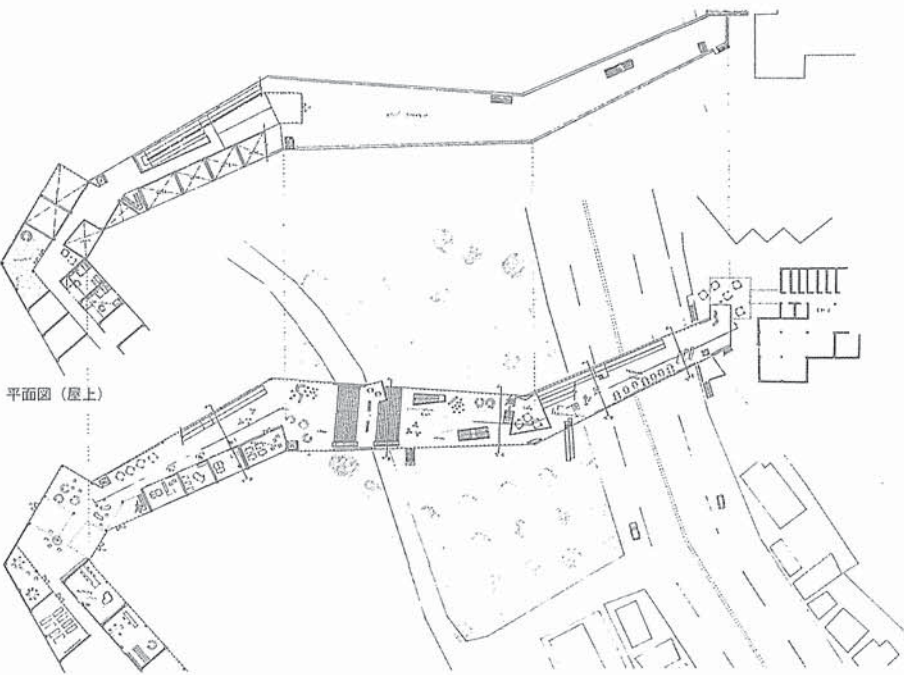
坂本 もっとランドスケープ的な提案として考えて欲しかった。大規模なものをつくればそれだけで都市空間に対する影響が大きくなり、建築でとにかく牛耳りたいという嫌味なものにも見えてしまうから。



模型写真

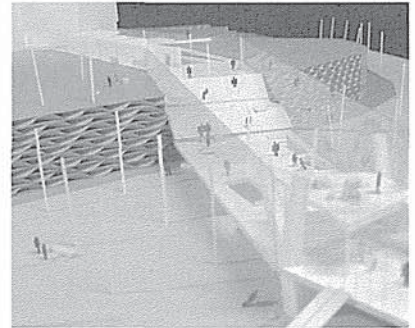


内観パース

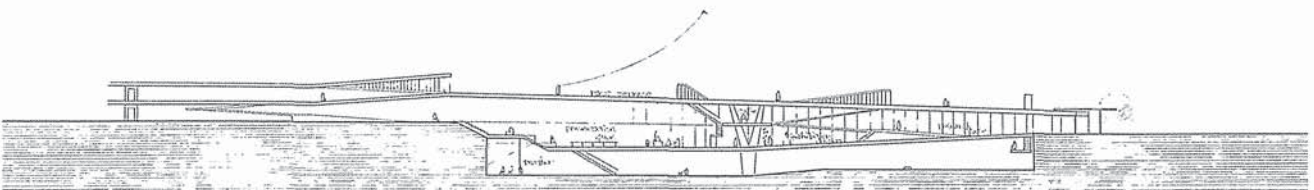


平面図 (屋上)

平面図 (メインフロア)



模型写真



断面図

NODE \ LINE

大熊 国際文化会館と六本木高校の近くの高台に挟まれた場所に、二つの文化施設を結ぶ拠点としての橋を計画しました。具体的な用途はギャラリーのような展示空間やモノづくりのスペースがあって、そこでの活動が森に展開するように考えています。

奥山 実際はほとんど通路空間になってしまうのかな。

大熊 基本的には、人の流れを外から可視化できるように考えていて、でもただ通り抜けるだ

けの均質な空間ではなく、例えば文化会館の機能をはみ出してきて幾つかのスペースができるようにと考えています。

西沢 全体を同じようなスペースにしているけれど、森の上空とそれ以外の上空の違いに対して何かしないといけない。内装が変化するとか用途や家具の配列が変化するとかでも良い。

野口 例えば主に通路として機能するときもあれば、ある時は閉じて観客室とステージにして使えるとか。機能をいくつか重ねできるようにしたほうが面白いと思う。

安田 森との関係性、つまり森とクロスするポイントで何が起るか、そこが重要だと思います。特に橋の下の空間での具体的な使われ方を明示して欲しい。

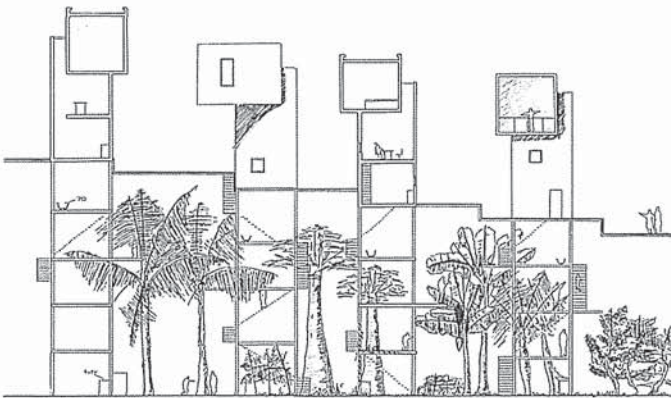
high density

山崎 六本木中学校の内側に温室と住宅の複合施設をつくりました。温室をつくっているガラスと、テラスと住宅のヴォリュームによって、森のような高密度な空間をつくらうと考えました。

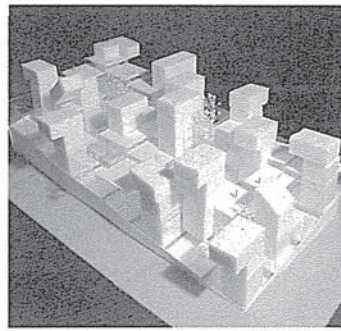
西沢 湿度のこととかをちゃんとイメージしな

high density

山崎新太 Arata YAMASAKI



断面図



模型写真



模型写真

PENCIL VILLAGE

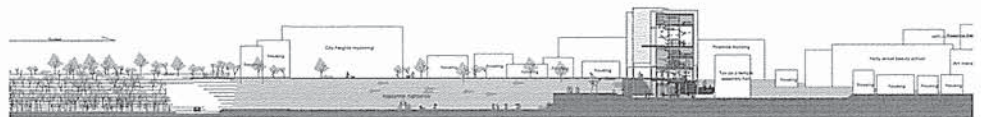
木下皓之 Koji KINOSHITA



配置図



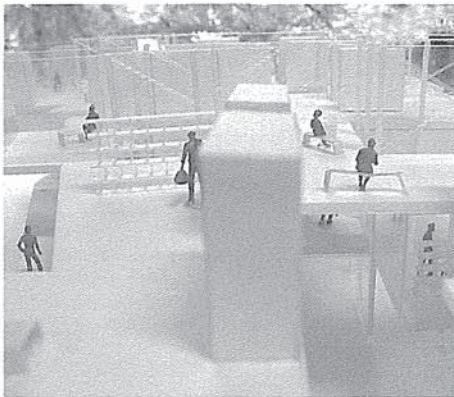
断面図



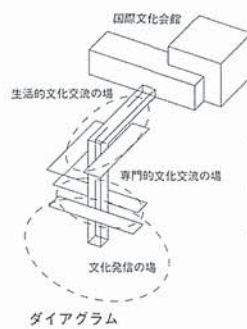
断面図

CULTURE COMPLEX

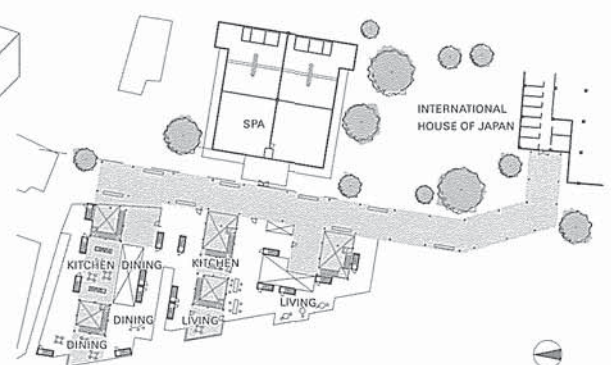
丸山耕一 Koichi MARUYAMA



模型写真



ダイアグラム



3階平面図

いとまずい。温室は一般に高温多湿で、住宅の居室とは両立しない。それを成立させるための工夫が欲しい。

北山 実現するととなると問題はいろいろありますが、こういう普通はあり得ない風景とかイメージを提出したことは評価できます。

PENCIL VILLAGE

木下 森を見るという視点から全体を考えました。敷地に起伏があり変化に富んだものなので、幾つかのヴォリュームに分散させて、森全体を

見る視点をつくりました。

野口 ペンシルビル状の建物をくっつけずに分散させることにどんな根拠があるの？

木下 互いを離れた方がどこからでも外を眺めることができると考えました。

坂本 説明がぼやけている。森に接していないところがわざわざ敷地にしているのだから、眺めるということでの森との関係をもっと説明しなくてはいけない。

CULTURE COMPLEX

丸山 国際文化会館と森との間に計画しました。今現在、擁壁によって森に対して閉じているので、文化会館からの流れを森に浸透させるようアクセスとしての施設を計画しました。

西沢 機能的に部屋をつないでいくだけでは住宅にならない。採光とか通風とかもうちょっと考えて欲しい。

塚本 その辺はちゃんと図面を描かないから分からないのでは。みんなダイアグラムみたいな図面が多くて建築の図面になっていない。

「メディアテークを包含した都市公園」 “City Park Including a Mediatheque”

担当:

伊東豊雄 [非常勤講師、伊東豊雄建築設計事務所]

Toyo ITO (Guest Professor, Toyo ITO & Associates, Architects)

東 建男 [伊東豊雄建築設計事務所]

Tateo HIGASHI (Toyo ITO & Associates, Architects)

坂本一成 [教授]、塚本由晴 [助教授]、奥山信一 [助教授]

Kazunari SAKAMOTO (Professor), Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor),
Shinichi OKUYAMA (Associate Professor)

中井邦夫 [助手]、足立 真 [助手]、

久野靖広 [D3,TA]、遠藤康一 [D3,TA]

Kunio NAKAI (Research Associate), Makoto ADACHI (Research Associate),
Yasuhiro KUNO (D3, Teaching Assistant), Koichi ENDO (D3, Teaching Assistant)

以下は、2005年1月31日に行われた講評会の模様を、学生編集委員の堀村健 [M2] が
レポートしたものであり、文責は編集部にあります (敬称略)。

[課題内容]

インターネットによる膨しい情報の交換とモバイルフォンを介したコミュニケーションの渦中であって、公共が果たすべき新しい知的サービスのための空間とは何か。

メディアテークはライブラリー、ホール、ギャラリースペース、オーディオビジュアルのスペース等を融合、再編してそうした要請に応えようとする新しいタイプの公共施設である。

一方、都市公園も激しく変わる都市生活から取り残され、単にわずかな自然をとどめるだけの空虚な場所となっている。

ここではメディアテークと公園を一体化して双方を活性化させるスペースの提案を求める。近隣居住者(子供から高齢者まで)は言うまでもなく、学生、遠方からの来訪者のすべてを受け入れ、それらすべての人々が違和感なく混在でき、楽しめる既存概念にとらわれないスペースを提案して欲しい。

[総評]

伊東 課題の意図が伝わってなかったという印象があります。今の洗足池に息吹を与えることはいくらでもあり得るように思えるのだけど、それに対する回答はなかったと思います。今日提案してくれた回答に自由で楽しげなものはたくさんありましたが、その自由というのは何のために自由がほしいのかということに対する回答を見なかった。私自身はルドルフスキーの『さあ横になって食べよう』に共感があって、ひたすら用途を少なくして磨き上げたミニマムな空間がいったい何で人間を豊かにするのだろうと思いついています。近代になかった人間のいきいきした楽しさをどうやって建築は解決するのかということを考えようとしています。それに対してあなたたちの回答は自由に建築をつくっているけれど、何に対してなのかを考えないとマナーもルールもいっさい何もないという所に行ってしまう。気楽に本を読むというのはいいけれど、単に怠惰になるということではなくて、不自由から解放されることによって何かをつくり出していく想像力がないといけない。そのことをもう一回考えてほしいです。

東 特殊なアイデアに依存しすぎていて普通のことできていなかった。他人に共感がもらえるかどうか頭になく自分の感覚だけに頼りすぎているのではと気になります。いろいろな建築家のプランから、なぜこういうスペースが与えられているか、なぜこういう関係性が生まれているのかということを読み込んでいかないと基本的なことができなくなる可能性があります。これからまだ時間があるので、自分の作り方や限界、問題の指摘などを考えていって下さい。

In the midst of abundant informational exchange via Internet and communication by mobile phone, what quality of space does the public require for the provision of intellectual services? The mediatheque is a new type of public facility that answers this demand by combining and reorganizing different entities such as library, public hall, gallery space, and audio-visual space. An additional issue is that in our rapidly changing urban habitat, parks have been left behind, resulting in an empty space with little nature.

In this project there were various proposals to combine mediatheque and park, which must also interact with each other. Each scheme is expected to provide a unique space that welcomes different people, not only locals but also students or visitors from abroad.



敷地図

[課題条件]

- 敷地: 洗足池公園
- 規模: 約 10,000m²
- プログラム
 - 図書メディア部門: 2,500m²
 - 映像メディア部門: 500m²
 - 展示部門: 1,000m²
 - ホール部門: 2,500m²
 - 会議・研究部門: 500m²
 - その他: 3,000m²



伊東豊雄 Toyo ITO

1941年 長野県出身

1965年 東京大学工学部建築学卒業

1965～69年 菊竹清訓建築設計事務所

1971年 URBOT設立

1979年 伊東豊雄建築設計事務所に変更

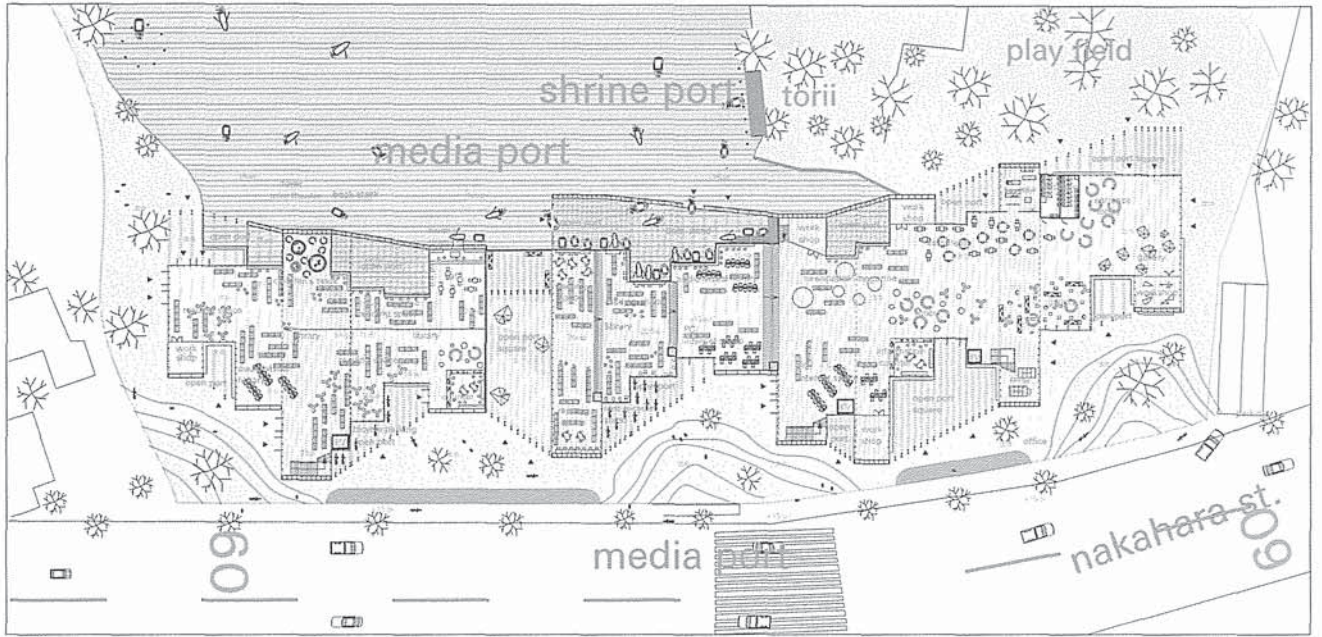
現在 AIA 名誉会員、ノースロンドン大学名誉教授

主な作品: 中野本町の家、シルバーハット、八代市立博物館、

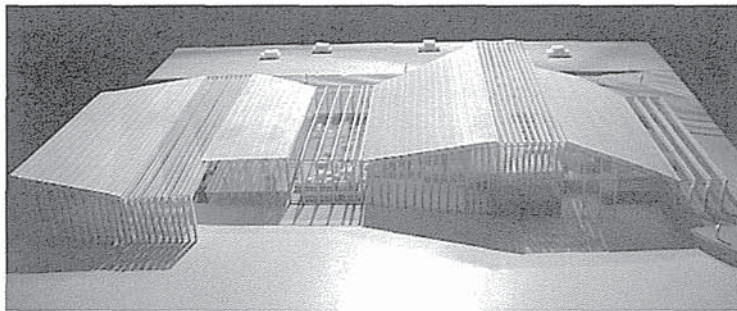
大館樹海ドーム、大社文化プレイス、せんだいメディアテーク、

サーベントイン・ギャラリー・パビリオン2002、

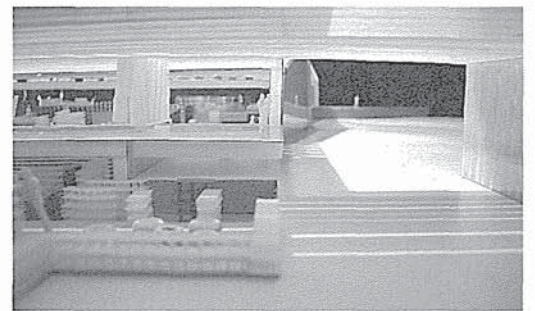
まつもと市民芸術館、TOD'S表参道ビル



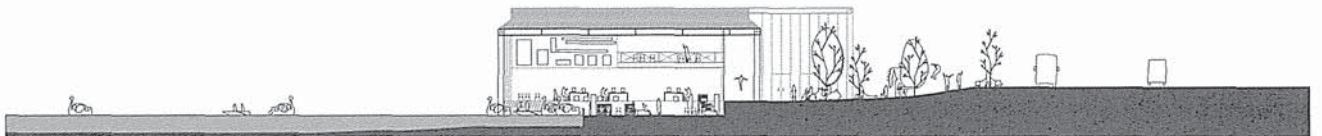
平面図



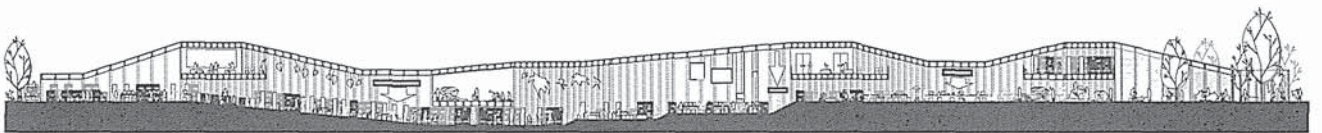
模型写真 (俯瞰)



模型写真 (内観)



短手断面図



長手断面図

port-able

千田 敷地は中原街道沿いです。池と道に対してヴォリュームを欠いたり出っ張らせたりして、いろいろな所から動線を建築内に入れてます。内部はそれが反映されてアルコーブや段差などいろんな凹凸ができて、一室空間だけドルーズな分節がある空間ができるのではないかと思います。

伊東 プランがいい。凹凸が突出すればするほどプライベートになっており、それを連続的につくりたいという点ではうまくいっている。柱

間の違いはどのように決まっていますか？

千田 人が通れるかどうかで変えています。
 奥山 長手方向の断面は見事だけど、短手断面をもっと魅力的にできるはず。
 塚本 水との関係をもう少し表現できればよかった。水際のモデルとして可能性を感じる。
 東 光の入り方が面白い。床面に映る光の感じが池の水面との連続感をつくっている。
 坂本 50mのスパンはできなくはないが、経済性とリアリティーの問題を超えてまで魅力的であるかどうかが問われる。

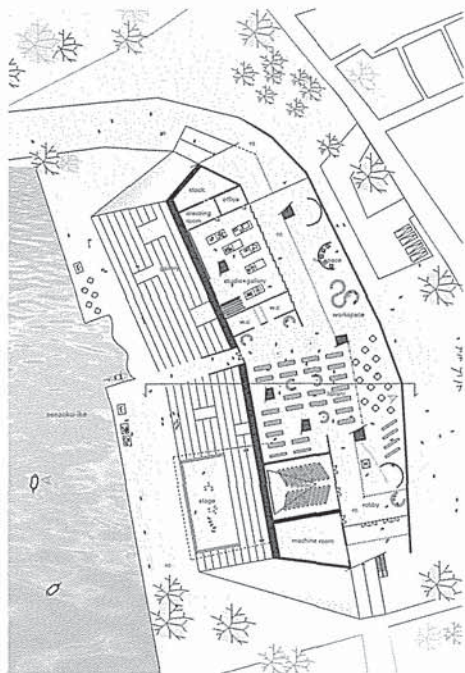
SENZOKUIKE GEKIJO

大熊 池の周囲の平らな部分になだらかな傾斜のついた建築を考えました。利用者が公園のいたる所から池を眺めながら各々の目的とするメディアを消費します。メディアを消費する際のアクティビティが融合される劇場は、公園の中に建てるメディアテークのあり方としてあり得るのではないかと考えました。

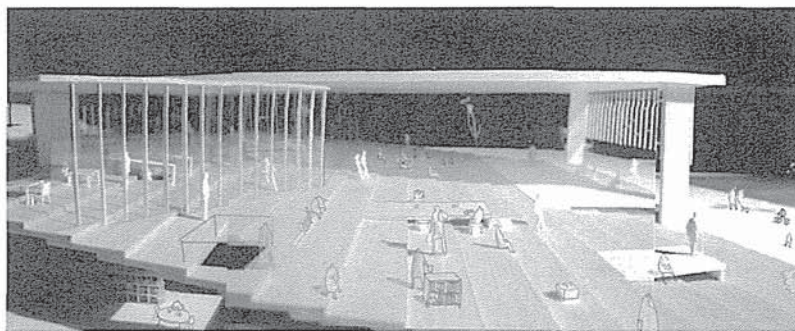
塚本 上下を分けすぎたかもしれない。スタジアムの観客席に書棚があるくらいの感じで、下に入っている内容が上にできてよかった。

SENZOKUIKE GEKIJOU

大熊克和 Yoshikazu OKUMA



1階平面図



模型写真



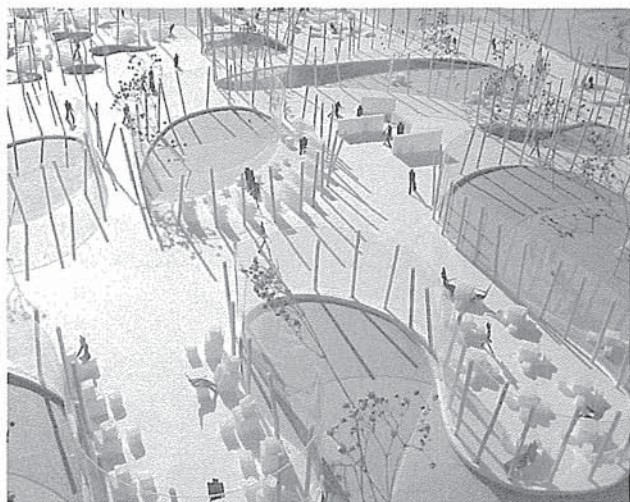
断面パース

MEDIA FOREST

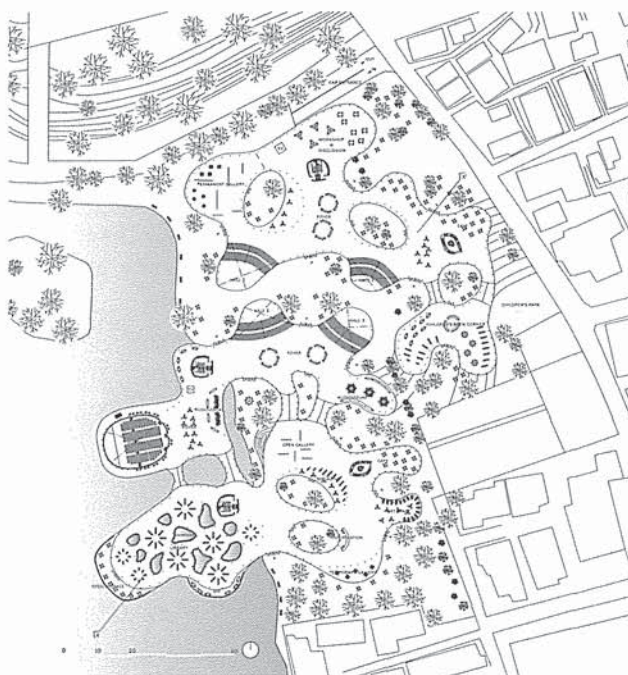
岩間直哉 Naoya IWAMA



断面図(部分)



模型写真



1階平面図

奥山 造形的なアイデアとしてはあり得ると思います。

伊東 表裏がはっきりしすぎている。それが曖昧になってくると面白くなるのだけど。全体として建築となっているというより、セクションをもとにつくった感じだね。

坂本 建物の後ろ側のイメージがつかめない。ネットワークを組んでいるのか、連続しているのかを水と周囲環境との両方の観点からちゃんと表現していくと面白くなると思う。

MEDIA FOREST

岩間 メディアテークを自由に居場所や行動が選べる森のような場所であると考えました。広い平面がとれて木がたくさんある場所に、既存の木を避けながら列柱を配置してプログラムが重なって奥まで見える空間構成にしました。外部を内部に取り込むことで境界を曖昧にして森のような場所をつくりました。

奥山 平屋だから中庭がなくても外側のくびれの強弱だけでつくれたのではないかな。水が取り込まれているところが不思議だね。

伊東 屋外と屋内がガラス面でクリアに切られていて、あまり相関していないように見える。建物をうねうねさせたりコートをつくれれば解決するだろうと甘んじている。内外の関係をもう少し突き詰める必然性があるはず。

東 全体性がなくいろいろな場所が見つけれ、部分部分の魅力はある。内部のような外部のような空間の体験はできる気がします。

SAKURA MEDIA THEQUE

中村 裏山は人が活動できる場所であるにも

SAKURA MEDIA THEQUE

中村文香 Ayaka NAKAMURA



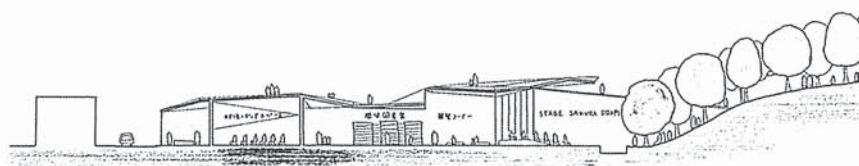
模型写真



模型写真



1階平面図



短手断面図

Senzokuike media piece park

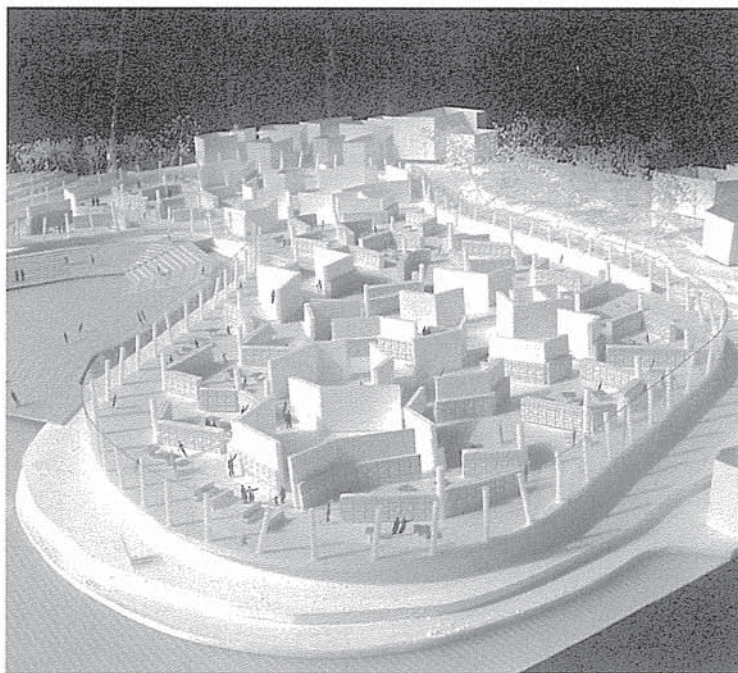
中川大起 Daiki NAKAGAWA



平面図 (部分)



断面図



模型写真

関わらず活動が及んでいないので、池辺のサーキュレーションの一部となる山を切り込んでいく建築を考えました。ランドスケープと一体となるように屋根に起伏をもたせました。人が様々な角度から見たり、楽しんで歩いて行けたりするのではないかと考えています。

塚本 この場所を選んだのはいいと思う。屋根は楽しそうだけど、内部が単調かな。自分がやったからこそ生まれるものももっとあれば魅力的になると思います。

伊東 建築とランドスケープとの関係ははっき

りしすぎている。内外ともにランドスケープのようになって連続すると内部空間がもっと楽しくなりそうです。

senzokuike media piece park

中川 公園全体にフォリーのようものを配置させ、そこに同じ趣味をもつ人々が集まる空間を考えました。棚の角度を振ることでいろいろな方向性をもたせ、予期せぬメディアと遭遇できるような建物を考えました。

伊東 建物の外形を規定している境界が外れる

と周りに対して広がりをもち始めるのでは。塚本 屋根が壁の単位と関係なく全体を覆ってしまっているのもったいない。くの字状に屋根まで付いたユニットを組み合わせると全体がカバーされるほうがよかったですね。

東 いろんな機能が隣接した面白さはあるがプランからは読み取れないのもったいない。

大学院 建築意匠設計 第一

Postgraduate Studio Work: Spring Semester

「フラックス・マネジメント／流れの取り扱いによる公共空間の提案」

“Public Space by Flux Management”

担当：

塚本由晴 [助教授]

Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor)

仙田 満 [教授] 坂本一成 [教授]

八木幸二 [教授] 藤岡洋保 [教授]

安田幸一 [助教授]

奥山信一 [助教授]

Mitsuru SENDA (Professor)

Kazunari SAKAMOTO (Professor)

Koji YAGI (Professor)

Hiroyasu FUJIOKA (Professor)

Koichi YASUDA (Associate Professor)

Shinichi OKUYAMA (Associate Professor)

ゲストクリティーク：

小泉雅生 [首都大学東京助教授]

Masao KOIZUMI (Tokyo Metropolitan University Associate Professor)

以下は、授業の内容を中井 [助手] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。

[課題内容]

公共空間をどのように持続させるのか、これは少なくとも現代日本においては一つの大きな課題である。大規模開発とは別のやり方で、公共空間を作り出すことはできないだろうか。そのために一つの視点を設定する。公共の空間を、そこに湧いてくるもの、流れていくもの（フラックス）の取り扱いを通して形成することを試みる。湧いてくるものの取り扱いを決めることが、その場所に一定の規範を発生させる。そのようなものの取り扱いの次元に、建築のデザインはどのように関わることができるのか。

このスタジオの目的は、都市の湧いてくるもの流れていくものの取り扱い（フラックス・マネジメント）を建築や構造物によって決めてあげることにより、新しいタイプの公共空間を作ることである。まず各自が東京の都市空間を一つのフラックスを通して読み解き、ビデオ、写真、図面などによって表現することによって、それらが空間の問題にどのように転じるのかを検討する。そうした都市規模でのフラックスの理解の上に、その一部に介入することによって、場所の固有性とその場所以外のつながりの両方の性格を併せ持った公共空間を設計する。成果物としてはできるだけ具体的な建築やランドスケープの提案を求める。表現方法は自由だが、フラックス・マネジメントの内容を説明する図面と、計画案の模型が必ず含まれていることにする。

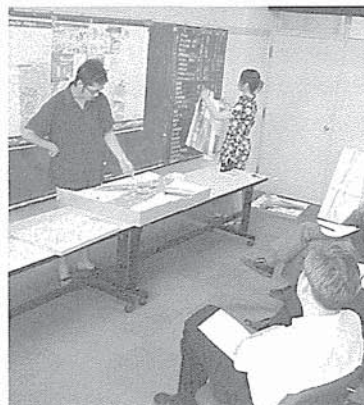


フラックス ブックレット

[総評]

塚本 この課題では「構想力」が問われているということをもっと意識して欲しかった。何を問われているか分かっていないというのは問題です。何か仮説を立てて、それを使って現実を解体し、そこからもう一度再構築して行く。その再構築して行くときにあり得べき方向性とかある種の批評性とか、そういうものを込めて行けば自分の立場というものは自ずからできてくるはずで、しかもその立場というのは独善的なものではなく現実にもつたものになるわけです。それは建築のデザインをするとき、建築家としての立場を作るときに必要な柔軟な側面で、そこを鍛えなければいけないのに、そこが分かっていない人が多い。もう公共空間とか建築が黙っていても成立する世の中ではなくなくなって、それをちゃんと持続させて行くための方向を考えなくてはいけない所に差し掛かっている、というのが社会的な認識だと思うんですが、それを全然考えない案、「とりあえずやっつけてしまえば人の流れができるだろう」というのがいくつかあった。そうではなくて、今はそういうものに利用されていないけれども、こういう流れとか目に見えない動きがあるんだからそれを捕まえるような形でやれば公共空間というのが作れるし、しかも持続して行けるじゃないか、ということを示して欲しかった。でもその辺の想像力というのは、もう普段からの問題意識なんです。

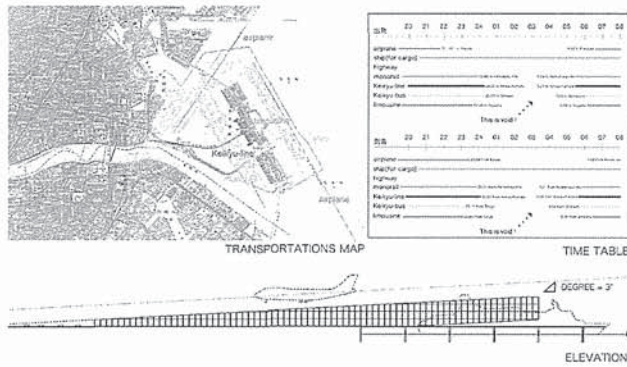
How to maintain public space is one of the critical issues of contemporary urban landscape in Japan. A challenge arises in creating a public space with different methods and techniques from those of large-scale developments by focusing instead on smaller and fluctuating events. For this inquiry, the experiment is to choose points of view for observation of a public space through activities that are in a state of germination or flux. By taking account of such fluid issues, it may be possible to generate a set of "rules" for a public space. Given that model, how should architectural design intervene? The purpose of this studio was to create a public space by modulating and encouraging "sprouting" and "flow", one that would thus generate a space penetrated by the public sphere. A set of rules and conventions for a place that a group of users experience constitutes an organic architectural design intervention. We wished to discover a "spatial management" that might reflect even such subtleties as the direction people are facing and their posture in a given space. At the same time, one tries to report and catalogue those features and qualities sprouting at a specific place, as well as all the other elements that help invigorate public space in general. The second half of the studio was to design a public space or a building based on this research.



講評会風景

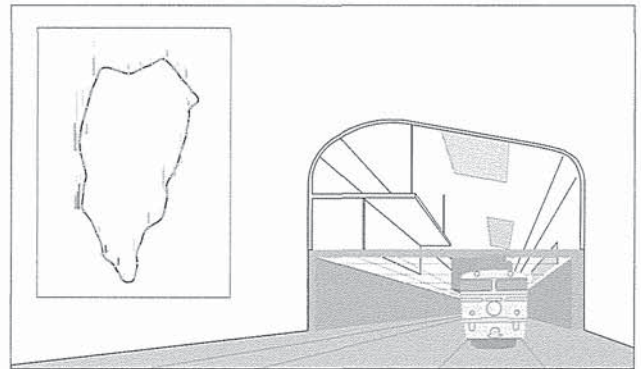
HANEDA PLATFORM

須賀貴康 Takayasu SUGA



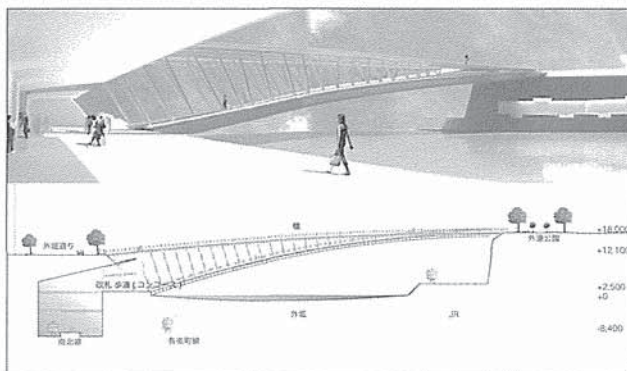
Passenger Management

鈴木宏昌 Hiromasa SUZUKI



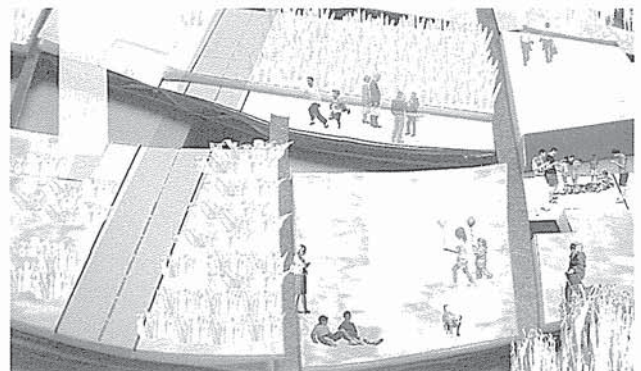
CANALSIDE CONCOURSE

立花美緒 Mio TACHIBANA



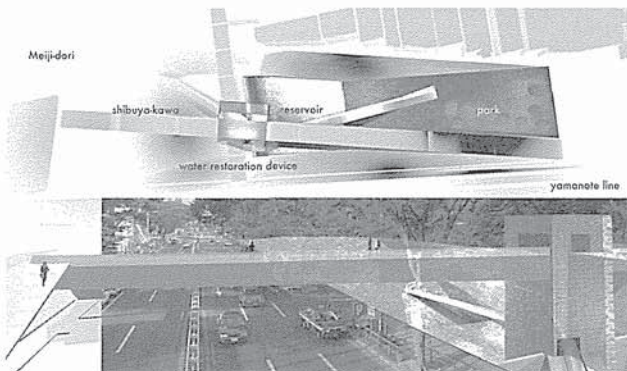
Floody-Agricultural-Park

立川玲香 Reika TATEKAWA



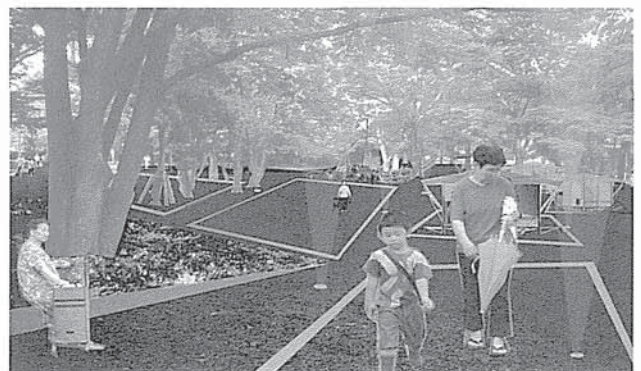
Shibuya Water Restriction Project

中野 弥 Wataru NAKANO



public green space

福原イザベル Isabelle FUKUHARA



HANEDA PLATFORM

これは国際化を進める羽田空港に、24時間利用可能な仮眠室、検索スペース、デッキ、レンタカー等を持つ施設の計画である。24時間化する人の流れをどう扱うかを考えた。

Passenger Management

山手線新宿駅と代々木駅は、駅間距離が700mと短い一方で、その乗降者数に大きな開きがある。この乗降者数をフラックスとしてマネジメントすることで、代々木駅の活性化を試みた。

CANALSIDE CONCOURSE

外濠沿いに地下鉄出口を設けコンコースを濠沿いの歩道と一体化した。プラットフォームは歩道レベルまで吹抜にし、地上から地下鉄の音が聞こえること、地下から地上の気配が感じられることを意図した。

Floody-Agricultural-Park

雨降れば川の水位は上がり、豪雨で決壊する。これは洪水時の環状七号線地下河川の貯溜水量54万m³を利用し、遮光栽培の白色作物9万株を育む67500m³の地下公園である。

Shibuya Water Restriction Project

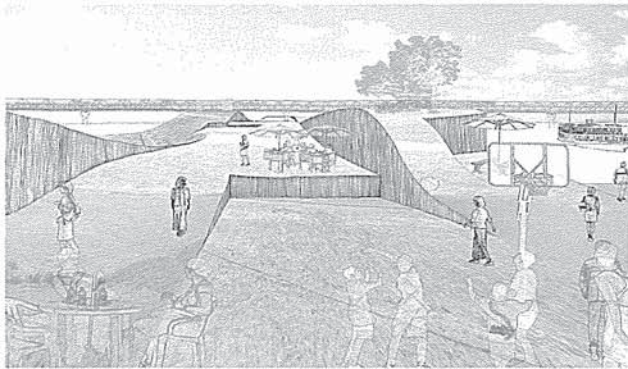
都市河川のおかれている状況を改善する初歩的の操作として水質浄化装置を都心に計画した。地下河川を引き込むため谷状のヴォイドを作り、そこに高速濾過処理施設や貯水池、斜面状の公園を埋め込んだ。

public green space

The idea is to redefine the space while reorganizing and while developing the fluxes of the visitors in the parklands in heart of island of the big sites of collective housings.

Arakawa sandbank station

文野義久 Yoshihisa FUMINO



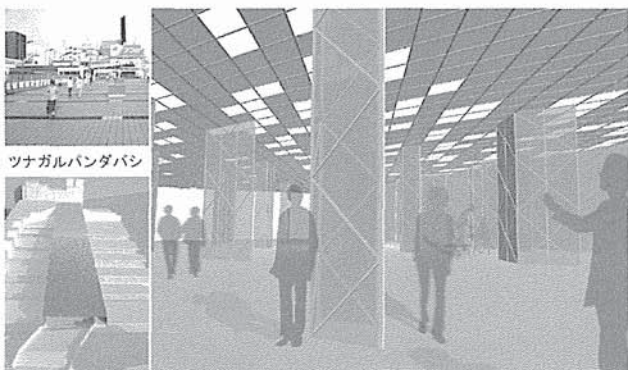
Water Expressway Landscape

溝口恵美 Emi MIZOGUCHI



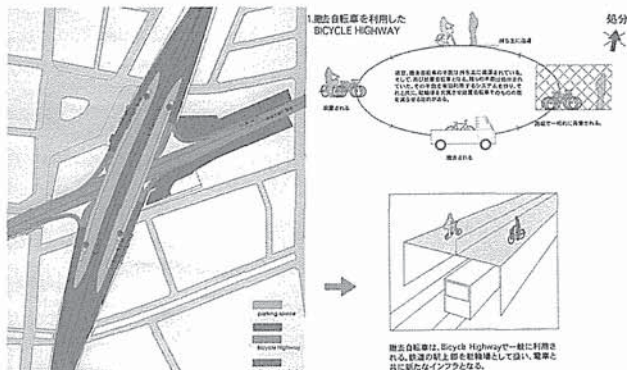
ツナガルパンダバシ

森 亮人 Akihito MORI



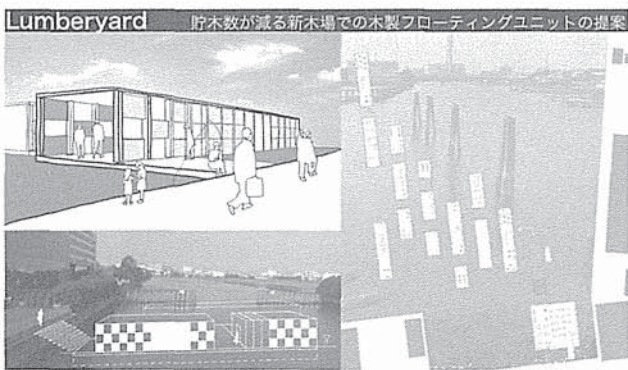
Bicycle High Way Project

山中悠嗣 Yuji YAMANAKA



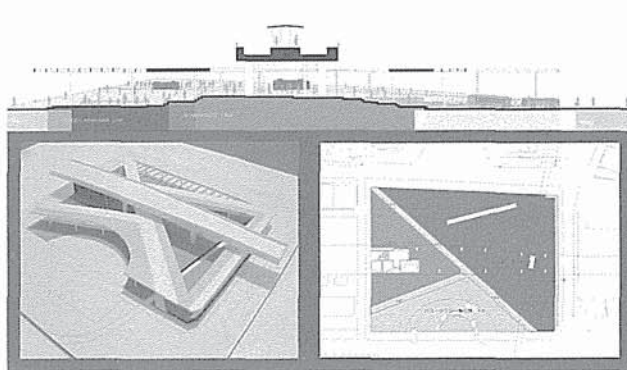
Lumberyard

山本友丘森 Yukari YAMAMOTO



STATION PARK 大塚駅再編計画

山本洋一郎 Yoichiro YAMAMOTO



Arakawa sandbank station

荒川中州の地形を操作することによって立体交差する5つの鉄道と水上交通とを繋ぐ計画。各鉄道から中州に降りて水上バスに乗換えれば、東京湾に出たり他の路線に乗換えたりできる。

ツナガルパンダバシ

大規模駅施設により町の雰囲気が分断された様相を持つ上野。そこに様々な溜り場を持った橋を掛けることで、人の流れ、文化の流れを再接続することを試みた。

Lumberyard

近年、貯木が減りつつある新木場にて仮設的な木造の「浮かぶユニット」を提案する。ギャラリー、レストラン、アトリエなどを作り、使わないときは解体し木材として使用できる。

Water Expressway Landscape

銀座の東側を走る首都高速道路の土地は元は河川だった。この場所にプールと濾過装置の組み込まれた施設を計画することで、常に透き通った水の流れる親水空間を再びつくりだすことを試みた。

Bicycle High Way Project

放置自転車や撤去自転車をフラックスとして扱い、鉄道線路ネットワークを利用した自転車専用の高速道路を考えた。ホーム上部は駐輪場であり、より迅速かつ簡単に各都市にアクセスすることができる。

STATION PARK 大塚駅再編計画

駅空間に流動性と、乗り物と大勢の人々によるランドスケープをつくることを意図した。流動性をもち様々なものが混在しながらも、自立性と幾何学的な秩序を持つ空間を目指した。

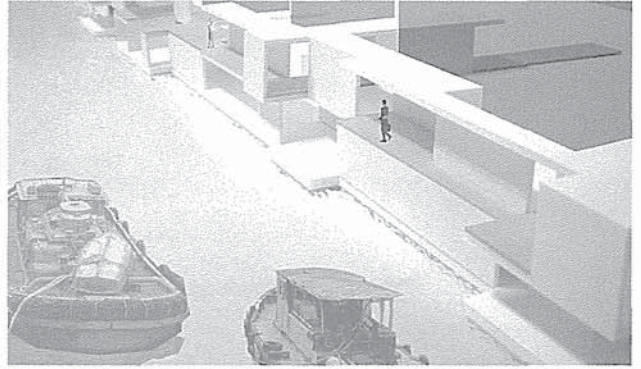
TRAFFIC RESTRICTION CITY

伊庭野大輔 Daisuke IBANO



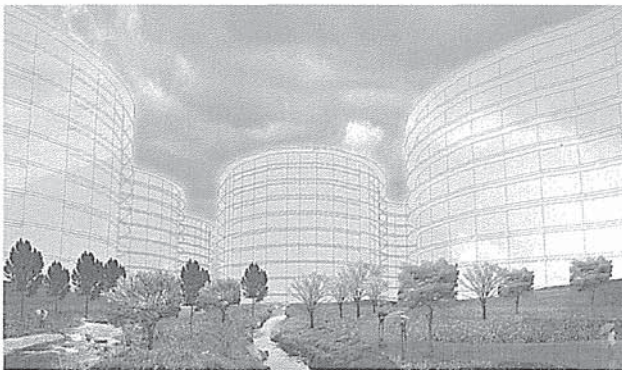
ゴミ吸収堤防

内部美玲 Mirei UCHIBE



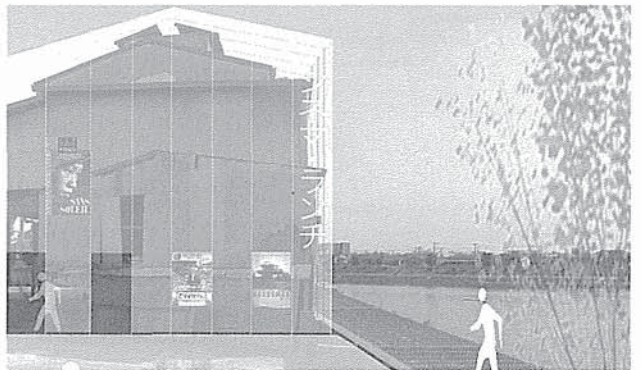
Living with rain

大森彩子 Ayako OMORI



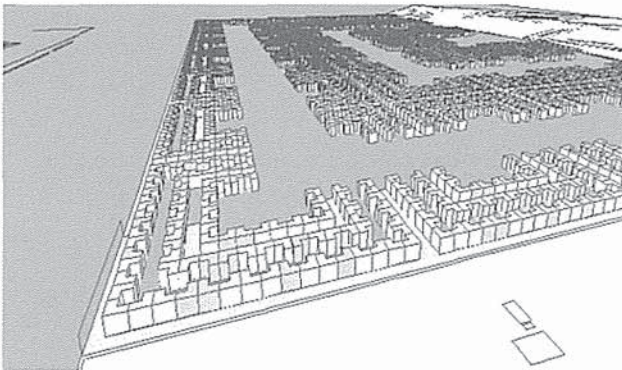
Social development in Keihin industrial area

オリビエ・セバスチャン Sebastien OLIVET



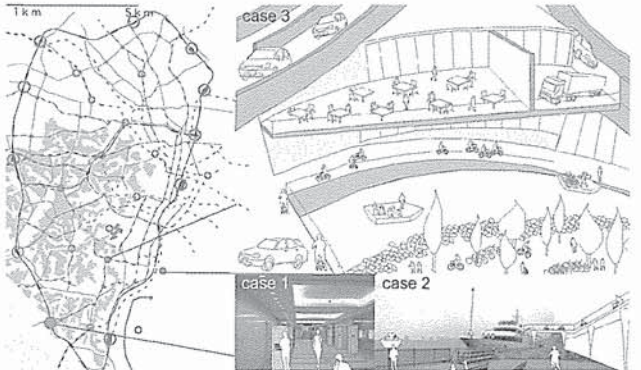
東京埋立地 Flux of reclaimed land

樟 茂育 Shigeyasu KUSU



Tokyo Rentacycle Project

新保佳恵 Yoshie SHINBO



TRAFFIC RESTRICTION CITY

都市の中には人と車が溢れかえっている。都市に入る車を制限（マネジメント）することで問題点を解消しつつ、都市の新しいランドスケープをつくりだせるのではないかと考えた。

ゴミ吸収堤防

運河をゴミ運搬に利用し、運河沿いを使うきっかけとする。高い堤防を断面方向にくねらせて両側にたまりをつくり、運河側はゴミ回収の場所、陸地側は人のためのデッキとして使う。

Living with rain

都心に降る雨は一直線にコンクリートの地面へと向かう。雨は各住戸をつなぐ水路を流れ時間をかけながら地面にたどり着く。集合住宅の中で住民の水路を通したコミュニティが生まれる。

Social development in Keihin industrial area

This project proposes, by a work of architecture and city planning, to combine divided spaces and make living places of it.

東京埋立地 Flux of reclaimed land

湾岸の水部における環境の変化と、長期的な視点からみた埋立地の変化をFLUXと捉えた、新たな埋立地の提案である。住空間として新たな土地と水の空間と使用が湾岸を変化させる。

Tokyo Rentacycle Project

自転車をフラックスとしてとらえた。東京の地形と現在の交通網を読み込み、拠点ケーススタディーし、既存の交通手段と組み合わせた自転車ネットワークのあり方を提案した。

大学院 建築意匠設計 第二

Postgraduate Studio Work: Autumn Semester

「セルフビルト・ハウス」

“A Self-built House”

担当：

安田幸一 [助教]

Koichi YASUDA (Associate Professor)

仙田 満 [教授] 坂本一成 [教授]

八木幸二 [教授] 藤岡洋保 [教授]

奥山信一 [助教] 塚本由晴 [助教]

Mitsuru SENDA (Professor)

Kazunari SAKAMOTO (Professor)

Koji YAGI (Professor)

Hiroyasu FUJIOKA (Professor)

Shinichi OKUYAMA (Associate Professor)

Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor)

ゲストクリティーク：

岩岡竜夫 [東海大学教授]

竹内 徹 [助教]

Tatsuo IWAOKA (Tokai University Professor)

Toru TAKEUCHI (Associate Professor)

以下は、授業の内容を中井 [助手] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。

[課題内容]

建築家一人が居住するための自邸を設計する。もちろん自分が建築家である。敷地は地球上であれば自由に設定して良い。写真などで具体的に示すことが望ましい。敷地選定の理由や設計に関するテーマは各自設定し、その意図を提出物に反映すること。住宅の面積、高さ、法規、コスト、構造などの建築条件も自由であり、詳細に各自設定して良い。ただし、自分一人で施工可能な構法を考えることを唯一の条件とする。実際に建設するつもりで設計に取り組んで欲しい。材料の選定（大きさ、重量等）や図面、模型表現はできる限り具体的な表現が望ましい。構造・設備や構法までも盛り込み、平面図や断面図も仕上材を記入した詳細図の表現とすること。最終的に各自A3サイズ2枚程度にまとめ合本することも考えている。授業が4回のみであるため、第一回目からエスキースを持参すること。時間は厳守して欲しい。授業の主旨として、装飾的な表現図面ではなく、白黒の線画で表現できることが望ましい。夢が現実となるような住宅を期待する。

[講評]

岩岡 表現が色々あって面白かったと思います。実際できるか試しに作ってみた人がいたのも新鮮でした。それと、予想していた以上にバランスよくきちんと建築になっているなというのが全体的な印象です。ただ何人かはセルフビルドを超えてできた空間のことだけを一生懸命語る人がいた。実際にもつのか、途中でどうやって作るのかが後回しになった人がいましたが、両方あると素晴らしいものになったと思います。

竹内 一人ぐらい建築材料じゃないもの、たとえばペットボトルとか傘とか空き缶とか、日常的なものを積み重ねて建てるという人がいても良かったかなと、ちょっと思いました。逆にそういう課題の与え方をしても面白かったかなと思います。セルフビルドってそういう可能性を持っていると思うんです。

八木 自分一人でどれだけ持てるか、どういう順番で作るかとかのリアリティが欠けている人が何人かいたけれど、全般的には面白かった。それから実際の幅や長さの建築材料を使ってどこまでできるか、建築材料の限界を追求する人がいなかったのは少し残念かなと思いました。建築材料ってもっと色々な使い方ができると思うんです。

[提出物]

●図面 配置図 スケール適宜（各自の案による）

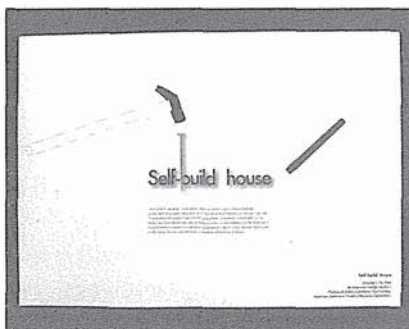
平面図 各階 1/20

立面図 2面以上 1/20

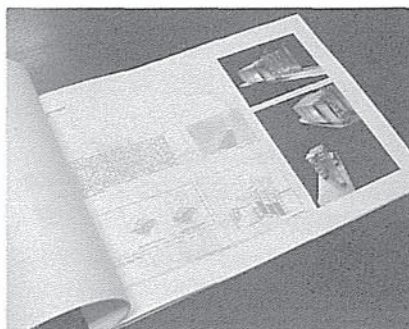
矩形図 2面以上 1/20

●模型 1/20（実際の色、テクスチャーも表現することが望ましい。外観だけでなく、インテリアを見ることができるよう壁が一面はずれるような工夫が欲しい）

The assignment was to design a house for the architect to live in him/herself. The site could be chosen freely though it had to be earthbound. It was deemed preferable to represent the design in detail using photographs. The elements (area, height, regulations and by-laws, costs, structure, and so on) were to be freely determined. The only condition was that the house had to be constructed by the designer him/herself. Participants were asked to demonstrate choice of materials, as well as plans or models, as specifically as possible. All plans and sections had to indicate fittings and materials.

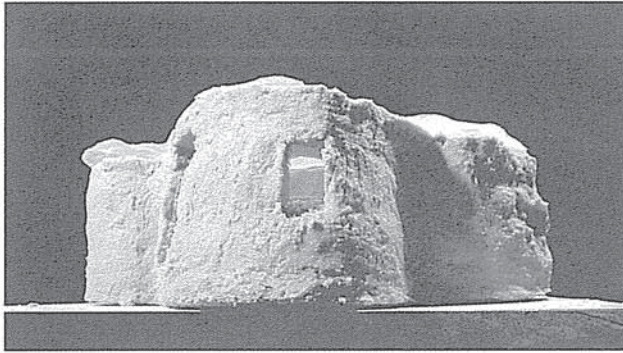


Self-built House ブックレット



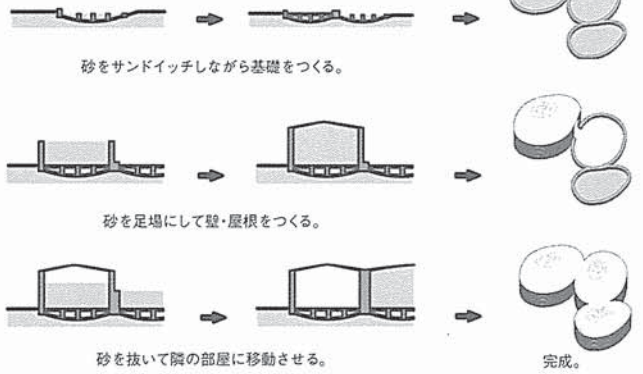
砂丘の家

文野義久 Yoshihisa FUMINO



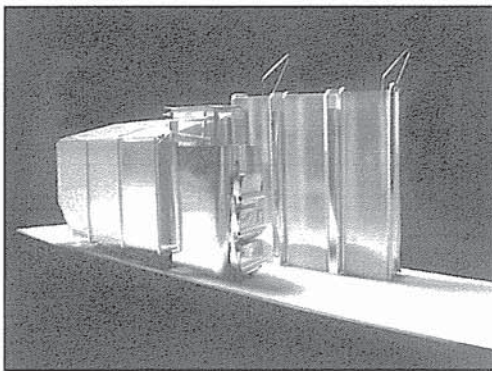
模型写真

●施工手順

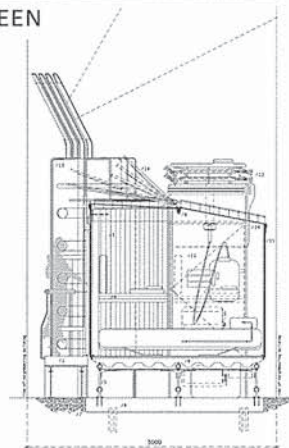
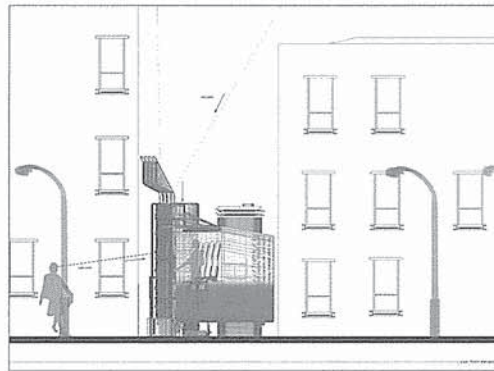


TOKYOPHILE HOUSE

Tamsin GREEN

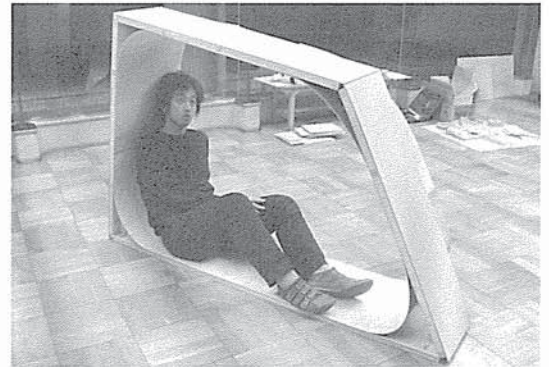
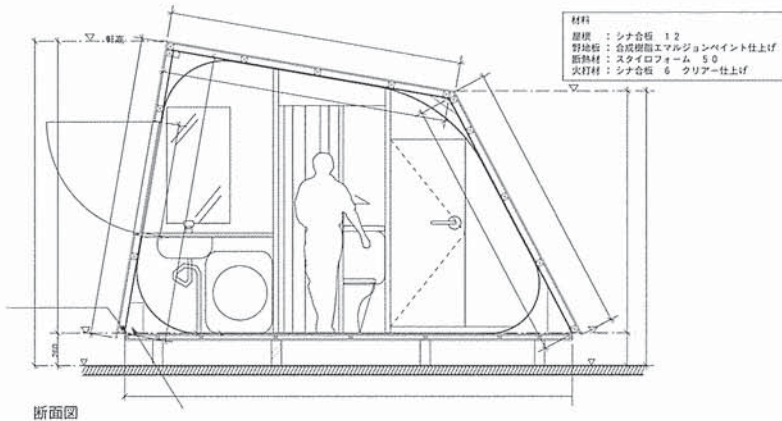


模型写真



Lunch Box House

黒川一史 Kazufumi KUROKAWA



部分模型

砂丘の家

敷地は茨城県の波崎砂丘と防砂林の境界部分。この住宅は、砂丘の砂とポリエステル樹脂を2：1の割合で混合した泥状の材料からできている。自由に手に入る砂を施工の足場や内部空間をつくる型として利用し、砂から伝わる熱で材料の樹脂成分を硬化させ建設する。その場で手に入る素材を最大限利用した材料・構法を考えた。

TOKYOPHILE HOUSE

The structure has no fixed site but can be constructed within gaps in the existing urban

fabric. The 'houses' comprises of a shower unit and sleeping/relaxation space, and is self sufficient; rain water for showering and a rechargeable car battery for electricity. The structure can be disassembled and reconfigured on a new site once it becomes obsolete.

Lunch Box House

流通や価格、規格などから合板を主要構造材として選んだ。形は正方形断面から始まり、雨や内部空間の有効断面などの検討からこの形とした。構造は断熱材を挟んだ合板パネルと内側の

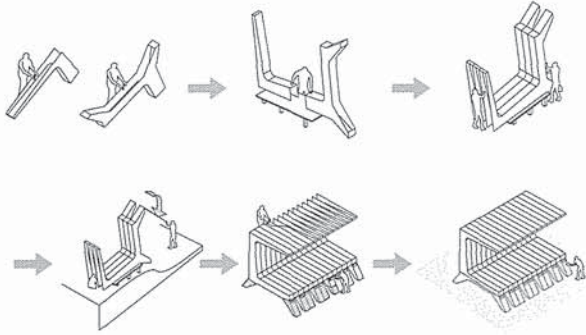
曲げられた合板による火打材で構成されている。施工が簡単になるようにパネルを下で作り、四辺を丁番で繋いで一つのピースを作った。

FRP HOUSE

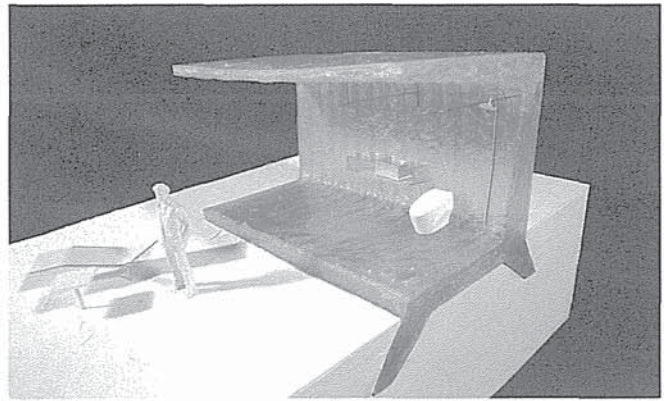
計画地は、石川県の松任海浜公園に隣接する海岸で、南に北陸自動車道、北は日本海、東西は砂浜が延々と続く景色である。砂浜の広がりの中にいる感覚を獲得する。海の横なので耐候性のあるFRPを採用した。FRPは軽量で強度もある。床・壁・覆いを一体のコの字型で制作し、それを連続させることにより別荘を建てる。

FRP HOUSE

山中悠嗣 Yuji YAMANAKA



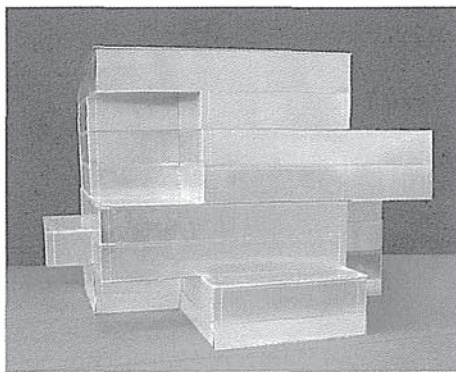
施工プロセス



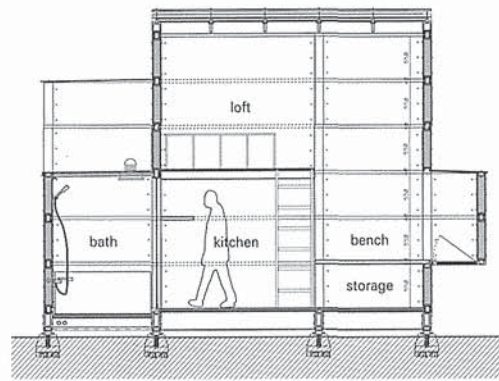
模型写真

blind house

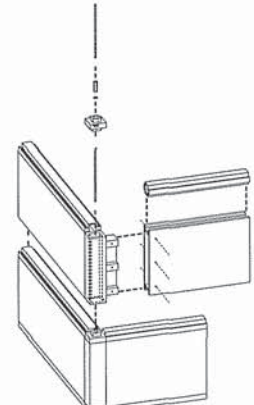
浅野浩克 Hirokatsu ASANO



模型写真



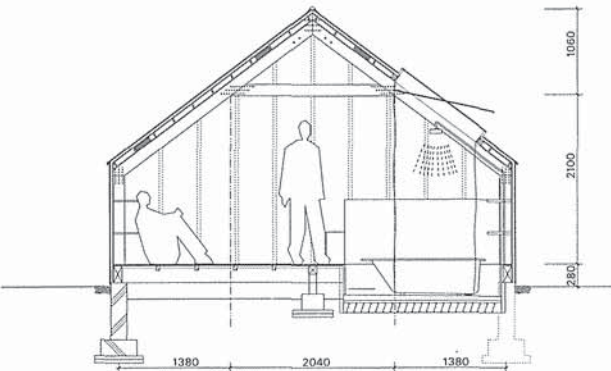
断面図



詳細図

軽井沢の家

伊庭野大輔 Daisuke IBANO



断面図



模型写真

blind house

幹線道路に切り取られた「孤島」のような敷地に建つ。腰壁ほどの高さのプレファブアルミ製ユニットで、内部の機能に応じて平面をつくり各層で異なる矩形をとり上方へと積みあげる。単一システムであるがゆえに「窓」という建築におけるインターフェースを欠きながらも、都市への強い接続を可能にすることを意図した。

軽井沢の家

休暇のための家なのでゆっくり出来るように、重心のなるべく低い空間とした。家型のフレー

ムを全体的に低くすることで、接合部が近くなり作業が容易になる。それにより家が半分埋もれたような断面になることで北側と南側にニッチのような空間を生み出し、まるで屋根裏部屋だけがあるような不思議な空間になった。

ハウス宅急便

セルフビルドという手法を活かすため、宅急便サイズの箱の集積で作れる住宅を提案する。これは「宅急便で送ることのできる住宅」でもあり、様々な場所から故郷に思い出を送り続けた後に完成した住宅では、パッケージされた思い

出と故郷の風景を同時に体験できる。

炭の家

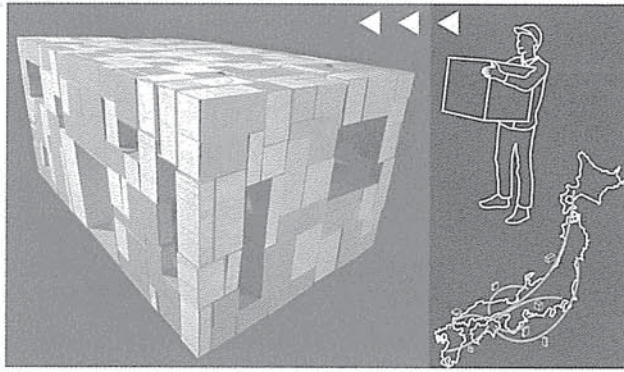
「炭ブロック」でつくるセルフビルドハウス。炭は多孔質な構造によって空気の浄化や断熱効果などが得られる。軽量で炭よりも高強度な木炭ボードを使用し炭ブロックをつくりそれを積み上げていく。建築自体も炭のように多孔質な形態にして、その孔（ポーラス）の中で暮らす。

谷沢川の家

等々力溪谷沿いに住宅を建てる。敷地は車道よ

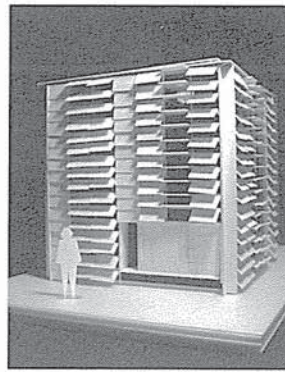
ハウス宅急便

藤井亮介 Ryosuke FUJII

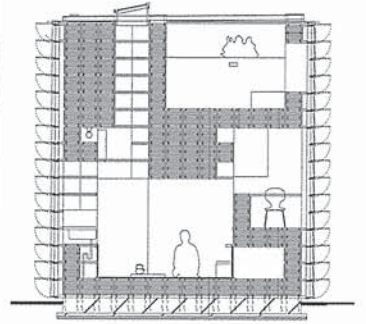


炭の家

梶村 健 Ken KAJIMURA



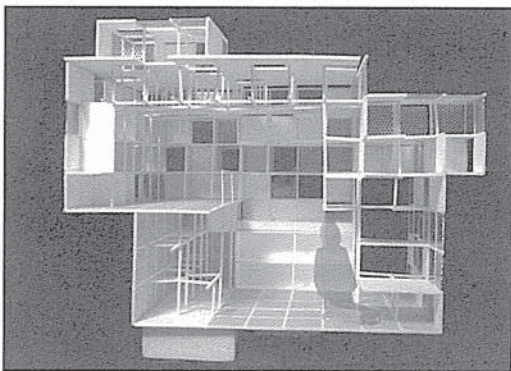
模型写真



断面図

谷沢川の家

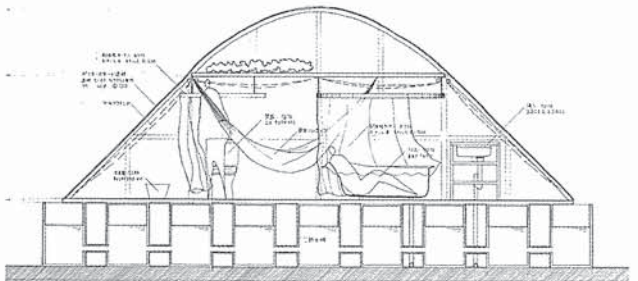
深澤千賀子 Chikako FUKASAWA



模型写真

赤道上的家

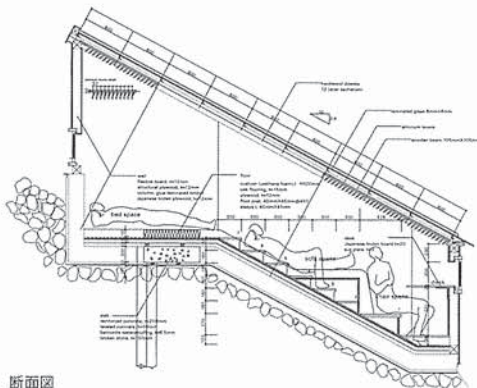
須賀貴康 Takayasu SUGA



断面図

small house in Yatsugatake

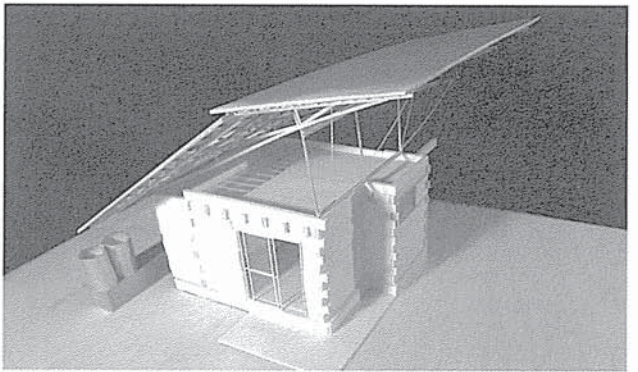
中野 弥 Wataru NAKANO



断面図

那須の家

本橋良介 Ryosuke MOTOHASHI



模型写真

り4mほど切り崩れた小さな崖添いにあり、重機や大きな材料は運べない。8種類の接合部のパーツで、鉄パイプとパネルを組み立てる。パネルは押し出し窓、エキスパンションメタル、断熱パネルの3種類を用意した。家具を作る感覚で少しずつ住みながら組み立てる家である。

赤道上的の家

赤道上にある海辺に計画されたこの住宅は、竹のしなりを利用して両端部を引っ張った形をしている。日中はドラム缶にためた雨水により、冷えた空気が床下を流れる。ハンモックで昼寝

をし、夕日を見ながらのんびりとお湯に浸かる。心ゆくまで緩やかな時間を過ごす。

small house in Yatsugatake

この計画は別荘の離れとして星や景色を観察するための空間である。建物の中では座る、寝転ぶ、寝るという行為に限定され、その3つの行為が生む視覚の違いを利用して計画した。基礎をコンクリート造、上屋を木造、居室の屋根面は全面トップライトという構成とし、より外部環境との関係が密接になるようにした。

那須の家

敷地は1970年代に分譲された那須の別荘地。水道、電気などのインフラが整備されていないので、建物がそれらの機能を賄えるように設計した。大きな屋根は雨水を集水するとともに、日光を受けてOMソーラー的な役割も果たす。基礎部はコンクリートブロック組石造、屋根架構はスチールアングル。

東工大・同済大学(上海) ジョイントワークショップ

「同済大学・設備倉庫周辺再開発プロジェクト」

Titech-Tongji University (Shanghai) Joint Collaborative Workshop

「建築意匠設計第二（担当：安田幸一助教授）」では昨年度と同様、上海の同済大学とのジョイントワークショップを行った。東工大からは安田助教授と大学院生14名が同済大学に約2週間滞在し、同済大学からは黄一如教授と大学院生12名が参加した。

●ワークショップ日程

- 11 / 1 上海着
- 11 / 2 敷地見学
- 11 / 3-5 グループスタディ
- 11 / 4 安田助教授講演会
- 11 / 6 蘇州・同里・朱家角視察
- 11 / 8 午前a+uオフィス、水晶石見学、午後中間発表
- 11 / 9 プロジェクトスタディ
- 11 / 11 最終プレゼンテーション
- 11 / 13 成田着
- 12 / 27 成果品提出(東工大生)

以下は、授業の内容を学生編集委員の立花美緒 [M2] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

課題：同済大学設備倉庫周辺再開発プロジェクト

今回の課題は、既存建物の改築・改修を行い、学生の交流場の不足を解消する新しい学生センターを建てるプロジェクトであった。敷地は同済大学中央軸線の奥に位置し、校舎と寮の境界である設備倉庫地区内に与えられた。設計条件としては、指定された3つの建物のうち少なくとも2つは残して新しい時代の機能要求に応じた学生活動センターを計画し、また周囲の環境を考慮してデザインすることが求められた。同済大学は上海北部に位置し、中国有数の歴史ある大学である。広大なキャンパスは正門から図書館・講堂に至る中央軸線を中心に、ポプラ並木や運河も流れる。構内には校舎に加え、

多くの学生寮があり、研究の場と生活の場が緩やかに連続している。敷地には事務棟、シャワー棟、ボイラー倉庫や解体中の食堂など密集しており、一部は荒廃している。課題として主に、敷地内の建物群の関係や、周囲への連続性といったキャンパス計画の検討、既存建築の保存方法等が挙げられた。

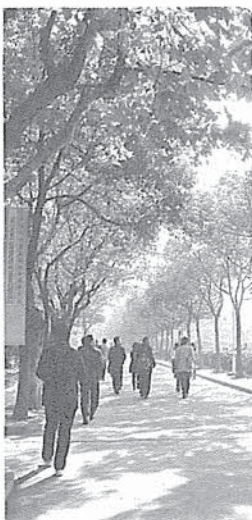
グループスタディ

前半は同済大生と東工大生のペアでチームを作り、計画のコンセプトを議論し、動線・インフラ・用途・大学の歴史・ランドスケープ・建築ヴォリュームなど様々な要素を検討した。

初日は敷地の見学の後、同済大学黄一如教授からプロジェクトの概要の説明を受け、既に2ヶ月スタディしていた同済



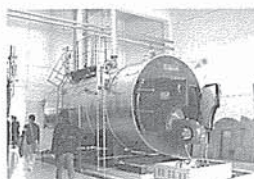
敷地



並木道



旧食堂解体現場



ボイラー



建築学科棟



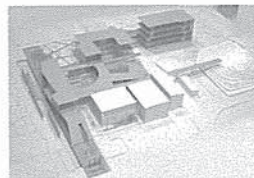
中間発表



製図室風景



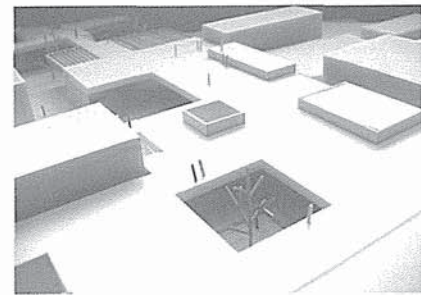
最終プレゼンテーション



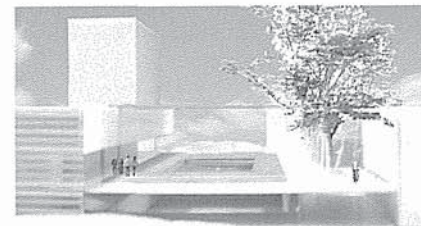
施道紅



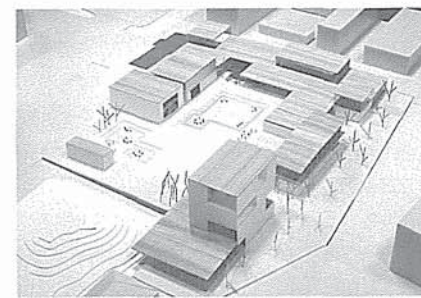
曙暁鳴



伊庭野大輔「Tongji University Student Center」



中野弥・張等「Landscape connection」



黒川一史・殿井環・遅英楠「Student's Nest」

大学生によるプレゼンテーションが行われた。それを踏まえ、同済大学生と2-3人のチームを作り、直ぐにディスカッションに入った。スタディの当初には、やや場当たりに設計を進める傾向が見られたため、安田助教授から動線・インフラ・用途・歴史・ランドスケープ・ヴォリュームを独立して検討し、最後に重ね合わせるよう指示があった。

プロジェクトスタディとプレゼンテーション後半はグループスタディで明らかになったテーマに対し、個人もしくはチームとしてプロジェクトを作成した。同済大学では今回のワークショップと同じ条件で実際に学生センターを建設することを検討しており、最終プレゼンテーションは副学長を迎えて行われた。キャンパス計画としての提案には、建物同士の関係性にウェイトを置いた案と、キャンパス全体としてのあり方にウェイトを置いた案の大きく2つの傾向が見られた。また改修を伴う設計では、既存建築にどう応えるかというテーマが常について回るが、今回は現在解体中であり、歴代の多くの学生が利用してきた食堂の記憶を残すことが大学側から求められた。

まず建物同士の関係性を重要視したものとして、伊庭野案では既存建築の間に多数のコアを配して全体に大屋根を架け、機能に応じて屋根を変形させることで大きな面積と統合性を獲得しながらも、内部機能と外部機能は密接な距離を保っている。梶村・陳案は敷地の複雑な動線に注目し、林のような構造体で支えられた半内部公園を中心に、スロープなどを用いて既存建物群を明快な構成でまとめ上げた。中野・張案は複雑な既存建築群を3つのボリュームにまとめ、中央の水庭を中心に屋上、室内と3つの庭を配している。大森・宮崎・胡案は階段とデッキで既存建築を結びつけ、中心広場を劇場的に使うことを想定している。

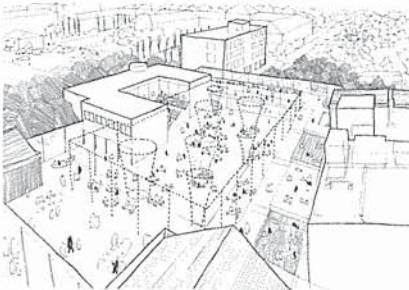
ランドスケープに着目したものでは、立花案が既存建物を減らし、敷地を緑で覆うことで敷地の3方を囲む緑と連続させるとともに、荒廃した建物とボイラーなどの設備を点景として見立て、緑の生命力と荒廃物・人工物との対比による緊張感を持たせた。立川案は、西側に位置する丘を上下反転させるように敷地内にすり鉢状のランドスケープをつくることで、丘との連続性や、交通量の多い周囲と高低差による距離を生み出している。

既存建物の改修方法としては、象徴的な食堂の入口を保存する案のほか、壁に用いられていた煉瓦をパイプメントとして再活用した内部・劉案や、旧食堂と同じ架構を反復させた文野・趙案など積極的に課題に対応した提案が見られた。

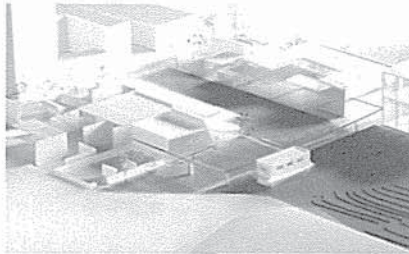
上海という都市

古い木造低層建物と屋台・市場といった典型的なアジアの風景と、そこにコピー&ペーストしたような新しい高層の集合住宅群が同居する上海市内を歩き回り、同済大学の学生との関わりの中で急速に発展する上海のスピードとエネルギーを感じ続けた2週間であった。一方で川沿いの倉庫街を改修したオフィスの見学や、既存建築の改修を前提としたキャンパス計画のワークショップを通じ、量とスピードの建設ラッシュの上海において、新たな流れが極僅かではあるが、生まれつつあることも感じられた。

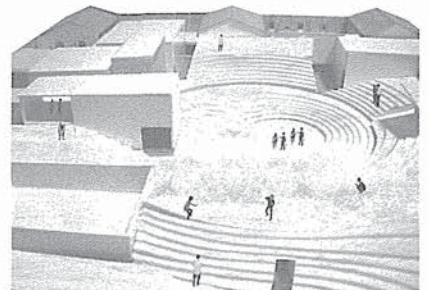
A Titech and Tongji University joint workshop was held November 1-13, 2004, in Shanghai, organized by Associate Professor Koichi Yasuda from Titech and Professor Huang Yiru of Tongji University. Fourteen postgraduate students from Titech and twelve from Tongji University worked on the design of a new Student Center by refurbishing existing buildings at the Tongji University campus.



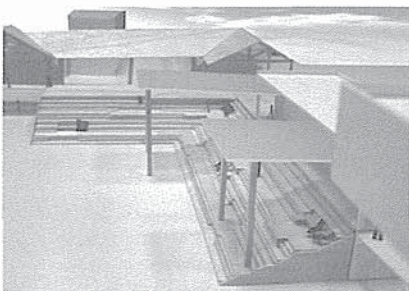
梶村健・陳家琦 [Tongji University Student Center]



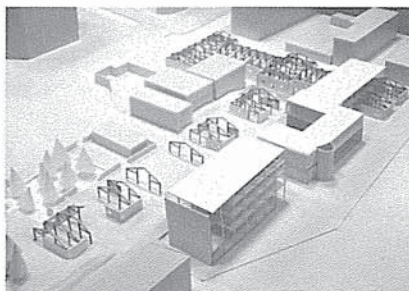
立花美緒 [TONGJI STUDENT ART PARK]



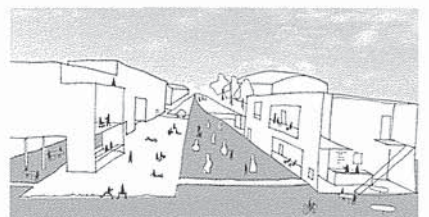
立川玲香 [DOUBLE HILLS]



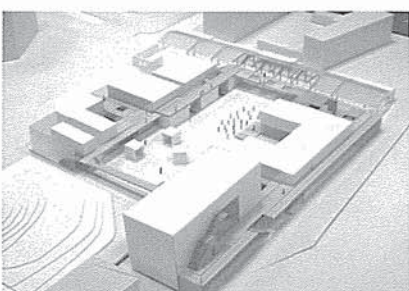
大森彩子・宮崎昭子・胡靚 [step square]



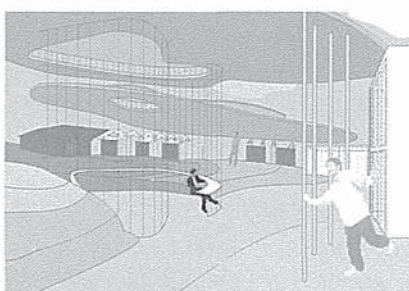
文野義久・趙傑 [Tongji University Student Center]



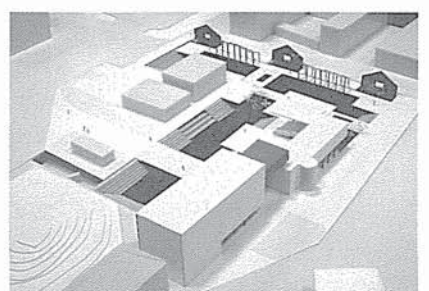
内部美玲・劉広哲 [Brick Trace]



新保佳恵・蔡單擘 [Flexible accession]



本橋良介・趙璐璐 [Paramecium]



藤井亮介・李東磊 [SPEAKING UNDER GROUND]

建築空間計画特論ワークショップ 「グリーンスケープ大岡山」 住宅地の再定義

“Greenscapes O-okayama” Redefinition of a Residential Area

2004年11月15日から26日にかけて、在ドイツの建築家／ランドスケープデザイナーであるベルント・クニース氏を迎え、ワークショップが開催された。参加者は大学院の集中講義「建築空間計画特論」の受講生で、大岡山1丁目の地域を対象とし、「住宅地の再定義」をテーマとしてリサーチとプロポーザルを行った。その内容は「建築批評特論」において編集され、冊子にまとめられた。

以下は、授業の内容を学生編集委員の藤村龍至 [D2] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

リサーチ —— 8つのトピック

リサーチはフィールドワークをもとに抽出された8つのトピック毎にチームに分かれて進められた。

〈地形〉グループは、等高線が緩やかなカーブを描く1930年代の谷状の自然な地形が、開発が進むに従いだんだんと人工的な段状の造成地へと変えられていく様子を明らかにしている(図1)。

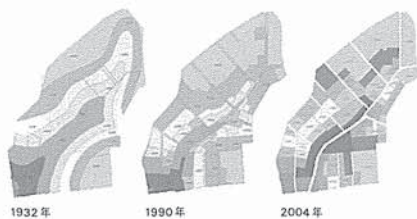


図1 地形の変化

〈インフラストラクチャー〉グループは自動車に注目し、各道路の性格、駐車場の状況、エリア毎の駐車台数を調べた。その結果、対象地域内で全住戸数の98%にあたる200台の駐車場が設けられていること、そのうちオープン形式の駐車場がピロティ形式の3倍以上を占めることが明らかとなり、住宅地の風景に相当量の自動車が現れていることが指摘された。

〈土地区分の歴史〉グループは、対象地の土地利用の変化を調べた。結果、杉

に覆われた谷であった1932年、周縁から徐々に路地が形成され開発が始まった1955年、路地のいくつかが接続され小規模なネットワークを形成しながら開発が進む1965年、谷に沿って地域の骨格となる道路が開通し、大量の建設が進んだ1970年、さらなる路地の発達と、それに伴う建物の過密化が進む2000年、というように、70年のあいだに道路が次第に細かく発達し、さらに土地が細分化され、街が建物で埋まっていく様子が明らかにされている(図2)。

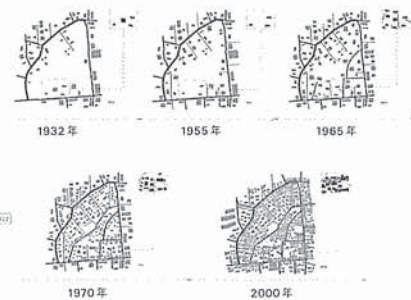


図2 土地区分の歴史

道路がどんどん枝分かれし、やがて細かい路地が統合されて骨格となる道路が生み出され、そこからさらに細かい路地が発生し、というように、あたかも自律的に都市が発達して行く様は生物的ですらあり、今後どのように「進化」して行くのか想像力をかき立てる。

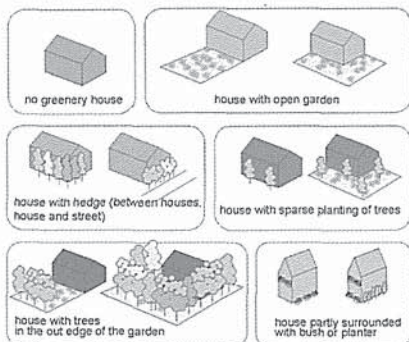


図3 植栽との関係からみた建物の類型

〈建物のタイポロジー〉グループは、建物の種類として「平屋」「普通サイズの住宅」「小住宅」「アパート」「旗竿敷地

ベルント・クニース／塚本由晴
Bernd Kniess, Yoshiharu Tsukamoto

の住宅」の5つを導いた。さらに「植栽なし」「オープンガーデン」「垣根つき」「庭の周縁に木」「部分的にプランターボックスや茂みによって囲まれたもの」の6つを植栽の種類として抽出し、これらの重ね合わせから、対象地域内に特徴ある6つの建物の類型を導いた(図3)。

〈建築の規制〉グループは対象地の斜線規制を調査し、対象地に最大容積で建築された場合の風景をシミュレーションしている。

〈世帯〉グループは、対象地域内の居住者の人口、年齢層等、社会構成を調査した。結果、人口は最近20年ではほぼ横ばい、年齢層は次第に上昇し、家族の人数は減少し、家族形態が断片化していることを明らかにし、対象地域内の世帯構成を「単世帯家族住宅」「2世帯住宅」「単身者用アパート」「2人以上用アパート」「店舗複合」として整理した。

〈隙間の空間〉グループは、対象地域内での隙間を調査し、「2住宅の間のスライス」「2住宅の間」「住宅の前」「オープンスペース」の4つが見られることを明らかにした。壁、窓、フェンス、植栽等の「隙間エレメント」の集合として、隙間の空間を捉えている。

〈緑のかたち〉グループは、植栽の現れ方に影響を与える要因について調査を行った。その結果として、盆栽やプランター等で小さな植栽を管理する「住人」、角地、旗竿敷地など、前面道路や隣地との接続など直裁の配列に影響を与える「敷地」、テラス状のフィールドとなる「地形」を緑のかたちの類型として取り出した。

パニック・シナリオ —— 2つの方向

以上のリサーチから明らかにされたように、対象地は区画整理等の計画的な都市整備の行われてこなかった地域で、道路

は狭く行き止まり、住宅とアパート、駐車場等が混在し、さらに土地の細分化が進んでいる。こうした地域に建築の見地から提案できることは何か。

議論の結果浮かび上がったのは、大岡山のようなコンテキストで将来像を描くとすれば、ふたつの方向があるということであった。ひとつは「防災や土地の有効利用の観点から土地を共同化し、建物を集約させ、道路を整備する」という方向。もうひとつは「現状の路地を維持する」方向。前者は対象地が持つ独特の雰囲気失われるというリスクを、後者は乱開発による局所的な環境の悪化、地震等の非常時に火災が発生した際に延焼が起るなどのリスクを、それぞれ抱えてしまうことになる。

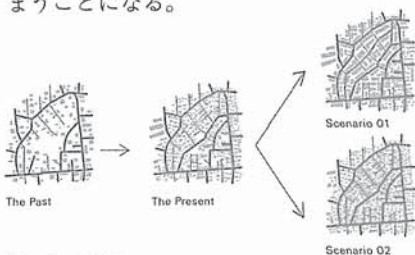


図4 2つの方向

プロポーザル

そうした議論をふまえ、提案が行われた。まず全体を更新する方向では、住居の単位を強調しつつ全体を単一の形式で覆う提案がいくつかみられた。これらは「各部屋の横に必ず緑を置く」といった細部のルールを初期に設定し、そのルールを維持しつつ全体に敷衍させるというもの。単位の設定には部屋単位（大森案）、住居単位（殿井案、深沢案、楠案、山中案、宮崎案）、ブロック単位（藤井案、伊庭野案=図5）などのバリエーションがみられた。

また、生活を「パブリック/コモン/プライベート」というように図式的に分節し、それらをダイレクトに建築化する提案もいくつかみられた。並列する建築ヴォリュームの間を路地のようなコモンスペースとするもの（本橋案）、プライベート空間を地下化し、地表面をパブリックスペースとするもの（内部案）、レベル差をもったベルト状の建築ヴォリュームを横断しながらプライベートルーム、ダイニングルーム、ガーデンを獲得していくもの（立川案）、1階部分を基壇としてパブリックに解放し、その屋上をコモンスペースとするもの（黒川案）、ブロック毎に共同食堂、共同風

呂等のコモンスペースを持つ建物を挿入していくもの（梶村案）、老人のための家と緑化された東屋を挿入していくもの（Kropp案）、それぞれの領域の境界に植栽を利用するもの（新谷案）など。

他方、現状を維持する方向では、路地に着目する提案が多くみられた。裏庭を繋いで路地とするもの（Urvoy-Fukuhara案、浅野案=図6、Bielinska案）、テラス、バルコニー、裏庭など、小さな植栽空間（グリーンポケット）を街区全体に散りばめて立体的な緑のネットワークを構築しようとするもの（Lemrini案=図7）など。

また、日本文化をフィクショナルに挿入して固有性のある風景を構築しようとした試みとして、茶を栽培する環境を人工的に構築し、茶の文化と都市を共存させようとするもの（Green案=図8）、白砂利と竹林を挿入するもの（立花案）、竹林を挿入し、それが作り出す環境によって建築の環境を再構成しようとするもの（Kockum案）などがみられた。

住宅地の固有性をどう再構築するか

対象地域について、実際に近所に長期間にわたって居住している者、留学生のように初めて本格的に日本の住宅地に接した者など、様々な他者性がこのプロジェクトを取り巻いた。短い期間ではあったが、住宅地という日常的なテーマに対して、アプローチに興味深い発見が見られたのは講師のベルント・クニース氏を始め、多くの留学生との共同作業の成果であったと思う。

今回のワークショップでは、植栽という日常的、散逸的な素材と建築の関係を出発点にすることで様々なタイプの建築が提案された。そこでは空間を形式的、図式的に捉え、土地に構造を与えようとしたもの、路地や文化など住宅地独特の要素で捉え、固有の風景を与えようとしたもの、というように、アプローチにはいくつかの傾向がみられたが、ともに建築的なアプローチによって土地の固有性を見だし、提案に結びつけていた点で共通しており、対象地のような住宅地の将来を考える上で興味深い成果が得られた。

A workshop for postgraduate students was held with architect/landscape designer Bernd Knies and Yoshiharu Tsukamoto, Associate Professor at Titech, November 15-26, 2004, with "Redefinition of a Residential Area" as its theme. A research and development proposal for the local residential area in O-okayama 1-chome was prepared and a booklet issued to show the result.

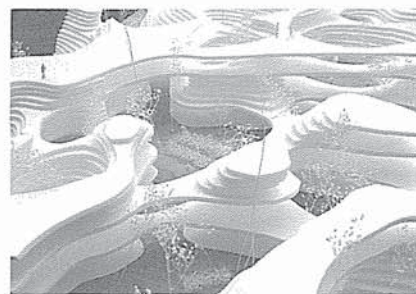


図5 伊庭野案・植栽を優先した建築

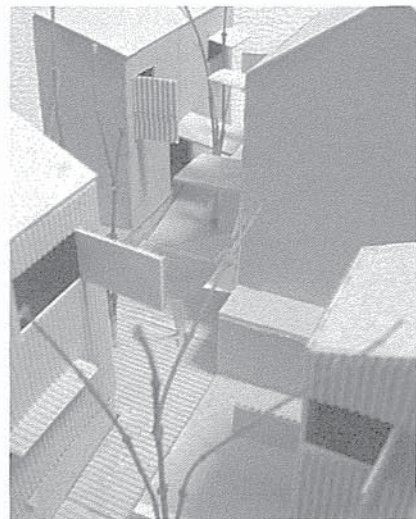


図6 浅野案・路地のネットワーク

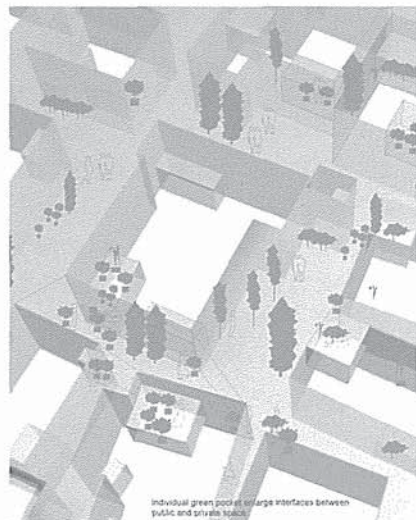


図7 Lemrini案・立体的に配置された庭

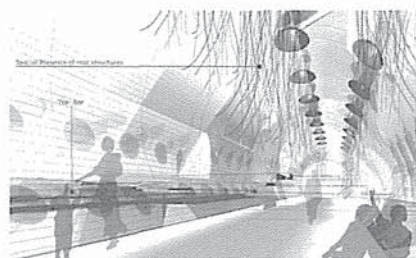


図8 Green案・茶の文化を導入

●ベルント・クニース氏 略歴
建築家・ランドスケープ造園家。1961年生まれ。1995年よりフリーランスの建築家として活動。2003年よりベルギー大学ブッパルタル校客員教授。

林 昌二氏 特別授業「江戸から22世紀へ」

Lecture "From Edo Period to the 22th Century"

建築プログラム特論（安田幸一助教授担当）第1回授業では林昌二氏のレクチャーおよび新建築副編集長である橋本純氏との対談が行われた。

以下は、学生編集委員の須賀貴康 [M2] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります（敬称略）。



林 昌二氏

林 昌二：江戸から22世紀へ

江戸時代は文化が爛熟して非常に愉快な時代だったのではないかと思います。なんでもあまり働かなくても食えたそうです。とても貧乏な人もいましたが、人口が少なく、とにかく全体としてはなんとなく上手くいっていた。ところが明治維新になり西洋から文物が流入して色々と忙しくなった。この忙しくなったというのがそもそもまずいんじゃないかと考えているんです。その象徴がワールドトレードセンターの崩落、ジェット機と超高層の衝突という最悪の事件ですね。エネルギーを多量に消費する文明が発展し、ジェット機と超高層ができた。両方も常にエネルギーを補給していないと成り立たないんです。ジェット機はもちろんエンジンを回していきなきゃ落ちてしまいますが超高層も実は同じで、空調とかエレベーターとか常にエネルギーを補給しないと生活が成り立たない。この衝突がこの文明の未来を暗示している気がします。アメリカの文明がどういうことになるのか。このままではうまくいかなくなるでしょう。そうなるとうどうなるか。今まできたライフスタイルを急には変えられませんが、ただ目標は必要ですからどこに設定するか、ということで22世紀だと思っているんです。21世紀中にはそこまでいかない。少なくとも100

年くらいかかるんじゃないだろうか、つまり江戸時代のライフスタイルを取り戻せるのが22世紀ではないかと思います。

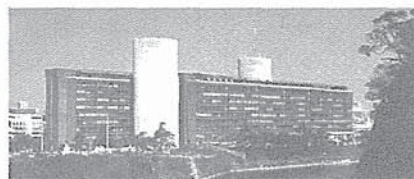
設計力とは

私は建築には縁のないところで育ちました。そして中学くらいで一番面白かったのが模型飛行機をつくることだったんです。材料自体は簡単で、割り箸と竹ひご、それに薄美濃紙と動力のゴムひもでした。学校ですから決まった設計図があるのですが、それだとちょっとは飛ぶが全然面白くない。でも設計をやり直したらもっとよく飛ぶんじゃないかということをやってみると全然違うものができるんですね。材料自体は変わらないんですが、プロペラの削り方なんかをちょっと工夫すると、例えば2〜30秒飛んでたものが5〜60秒飛ぶようになります。自分のつくったものが1分ふらふら飛んでいるというのは結構面白いもんですよ。私は「設計次第で色々できるんだ」と、これで掴んだんです。ところが戦争が終わると日本で飛行機の製造が中止になり、航空学科がすべて解散してしまうんです。ちょうどその時大学を受ける時期だったものですから、建築でもやるかとやむを得ず建築をやることになりました。ところが建築の設計でも面白いことがあるんです。いろんな案をつくって検討する。一応これでいいかなんていうのはすぐできる。でも自分で納得できないものにまずはなる。そして何十案もつくってみて、ある時「これだ」というものができるんです。これが設計の神秘的なところですね。それにはやはりそれまでやってきたものがあって、初めてそこに到達できるんです。そういうものが設計の面白さだと思います。それを感じると設計をやって行こうという気になるんですね。ですからそこにたどり着く前に時間切れ、建てなさいいけないというケースは悲劇です。

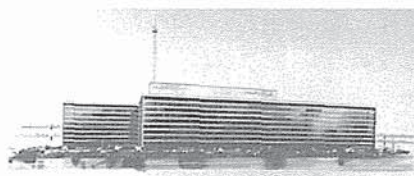
設計は高次多元方程式を解くこと

実はそれに近いことがあったんです。最

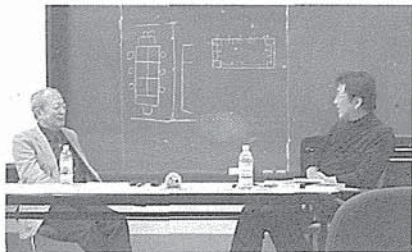
も大きな仕事の一つであるパレスサイドビルなんですが、なかなか良い案ができない。そして日米同時発表があるからどんなビルが建つのか絵を描いてくれと言われるんですが、いかにも気に入らない案しかできない。これは本当に脂汗をかいて七転八倒したんですが、ある時ふと名案が浮かんだ。でも新聞発表しちゃった後だったんです。私はこの案に直してもらいたいと言ったんですが、発表したものは今更直らないんだと言われて、でもそこはもう頑張って頑張り抜いて、その案に直してもらったんですね。それで今日の建物が建っている。まあ、こういった建物はエレメントがべらぼうにあるし、高次多元方程式を解くようなものですね。たくさんの要素を詰め込んで、一気にある形にしないといけない、というのが設計だと思います。この位でいいのかな、というのはいくらでもできるけれど、自分で納得できるものは結局一つしかないし、到達できるかできないかというのは力を振り絞らないとできないんですね。私は去年もう設計をしませんという宣言をしました。それは何故かという、50年設計をやってきて75歳になったんですが、体力・気力が落ちて一気に高次方程式を解くことができなくなったからなんです。体力・気力が充実していないと設計はできない。経験があればいいというものでもない。経験を活かすように体力・気力をコントロールするのはとても大変なことだと思います。



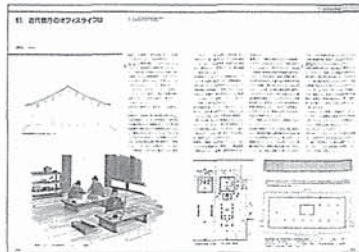
現在のパレスサイドビル（1966年）



パレスサイドビル新聞発表案



林昌二氏(左)と橋本純氏(右)



「オフィスの世紀」(『新建築』1993年5月号より)



旧掛川市庁舎(1955年)内観

対談：林 昌二・橋本 純

日本で最初のオフィス

橋本 12、3年前に「オフィスの世紀」という『新建築』の連載で林さんに色々とお話を伺ったのですが、まず聞きたいのは、なぜあの時の第一回目が奈良時代のオフィスの話だったのでしょうか。

林 日本のオフィスは奈良時代に律令制ができて、官庁ができた所から発生しているんですね。そこからオフィスとはいかなるものかを語り始めたんです。

橋本 現存する日本最初のオフィスは唐招提寺の講堂(平城宮朝集殿の移築)というお話でしたが、印象的だったのが林さんの視点で、それは「奥行」の話、つまり梁方向のスパンと机面照度の問題について話されていましたね。

林 掛川市庁舎まではその考え方が残っているわけです。今は人工照明が当たり前ですが、あの頃はまだ停電が多くて、停電しても何とか仕事ができる建築にしなければいけないということがありました。何とか字が書けるくらいの自然光を採るために、天井の高さとか奥行とか中庭のとり方をいろいろ考えました。

橋本 掛川市庁舎に限らずきちんとした建築に共通しているのは、付帯条件をどこまではずして建築が成り立つかということですね。

林 建築は100年もたなきゃいけないなんて言ってますよね。100年の間に世の中が相当変わっても建築は基本が耐えなければならぬ。だから例えば窓が開かないなんて言語道断でね。窓が開かなきゃ死ぬでしょ。

現代のオフィスは工場から生まれた

橋本 以前伺った話ですが、近代のオフィスは「工場」から生まれたと。

林 まず商店には「帳場」というものがあって、これは近代のオフィスとはちょっと違うものです。日本は近代になって急速に工業社会になり、その過程で企業がオフィスをつくり始めた。おそ

らく組織的なある規模のオフィスは工場に付属した管理部門として発生したのではなかろうかと思うんです。ただ日本の製造業はオフィスを大事にしないんですよ。工場や設備は一流なんです、オフィスや人は裏方という考え方が当時はあって、とても貧弱でした。もちろん大きくなきゃいけないというわけではないけど、企業規模に見合った適正規模をつくる気がなかったわけですよ。その伝統は今でも生きているんじゃないですか。

日本の世界的な大企業はアメリカのような大きなビルを持っていませんよね。

橋本 そうですか？ 確か林さんはそのうちの一社をやられてましたよね(笑)。

林 そうでした。70年代の最初の頃になってようやくオフィスをちゃんとしなきゃいけないということになった。その理由が面白いんですが、いい人が事務の方に来なくなっちゃったんですよ。それでマネジメントもしっかりしないと会社が上手くいかないということに気がついて、ちゃんとした部屋をつくらうということになったんです。

オフィスに住む

橋本 以前からお話を伺っていて思うのですが、林さんはオフィスと住宅を同列に扱っている。それは設計する中で一番面白いのが中で活動する人だからですか。

林 人の生活ですね。

橋本 オフィスに人は住んでいますか？

林 あれはハコの中で物が動いているのではなくて、人が住んで生活しているわけですよ。そして生活が上手くいかないと仕事も上手くいかない。以前会社の幹部から言われたことなんです、「トイレに行く時間が貴重なんだ。すぐ近くにあれば便利と思うかもしれないがそうじゃない。仕事がうまくいかなかったときにトイレに行くことが多く、トイレの往復でいろいろ考えているんだ。だから遠いことを気にするよりも途中で空が見れたり気分が変わることの方が大事だ」と。私も考えてみたのですが、やっ

ぱり人の暮らしは便利であれば良いという訳ではないなと思いました。これは人の暮らしのキーポイントですね。

オフィスは『帯』である

橋本 林さんのお仕事はポラ五反田ビル、三井物産、NSビルと続いて行くわけですが、その中で林さんは「オフィスは帯である」と言われますよね。そう言い切るまでには色々あったと思うんですが。

林 話はまことに簡単でね。オフィスは7、8人がユニットになって片方が窓で片方が廊下で、そうすると奥行が推定できるんです。これがあまり変わらずに、規模が大きくなると建物がいくらかでも横に大きくなる。これが建物の奥行を幅にした「帯」という意味です。これは色々な所を調べてもほぼ共通しています。

橋本 それは今でもそうなんですか。

林 今でもだいたいそうですね。

橋本 僕がこの話を出したのは、林さんは実はヤケクソでこれを言ったんじゃないかと思ったんです。これからのオフィスは帯であってはいけないのではと思っていただけないですか？

林 いや、もうしょうがないと思っていました。今でもそう思っています。つまり帯みたいに組織の規模が大きくなってしまったらたむしかなない。たまたで時々のはじめてみるしかないですよ。そういう大きな組織が世の中に求められているなら、それは世の中の責任であって我々はやりようがないですよ。でも、そこまで大きな会社が必要なのか、私にはわからない。

In this lesson Shoji Hayashi of Nikken Sekkei Ltd. lectured on the topic of "What's the fascination of designing architecture?" based on his own experiences. Afterward, Jun Hashimoto, an editor from /A magazine, held a dialogue with Mr. Hayashi. In this dialogue, they talked about what an office building should be.

講演会レポート アーキグラム講演会「アーキグラムと教育」

Lecture: Archigram and Education Archigram (Dennis Crompton, David Green and Michael Webb)

2005年1月25日、水戸芸術館での個展のために来日中のアーキグラムのメンバー、デニス・クロンプトン氏、デヴィット・グリーン氏、マイケル・ウェブ氏を本学にお招きし、百年記念館フェライト会議室で講演会が行われた。講演はアーキグラムが活躍した1960年代の話が中心で、当時作られた映像やドローイングのスライドに沿って話が進められた。

アーキグラム発足時の時代背景

まず、デニス・クロンプトン氏がアーキグラム発足時の様子について、当時の社会背景に重点を置いて話された。1960年代、イギリスの社会が急速に工業化していった様子を、オーシャンライナー、コンコルド、ケネディ宇宙センターや衛生TVの誕生などのドキュメント映像によって説明し、社会が変化していく中で、建築は空間的・社会的にどう変化して行くのかを常に考えていたことがアーキグラム発足時のモチベーションであったと語った。ビートルズの映像を多く混ぜていたのは、彼らが自分たちをビートルズに重ね合わせ、ビートルズの誕生が音楽の世界を一変させたように、アーキグラムの誕生によって建築の世界を一変させてやろうと当時の彼らが意気込んでいたことの現れであったように思う。

アーキグラムが捉えた1960年代

次に、デヴィット・グリーン氏が1967年に作成した映像を紹介した。一般的に建築あるいは建築家が当時の社会からどう評価されていたかについて、氏は建築

が大衆から離れたものとなりつつあったと批判的に認識し、危機感を感じていたことを述べた。こうした危機感を背景に、積極的に大衆紙の広告や漫画をカラージュの材料として取り入れたアーキグラム独特の表現が生み出され、1960年代のポップカルチャーが認められ始めた社会の共感を得たことは想像に難くない。

アーキグラムの建築

最後に、マイケル・ウェブ氏がスライドを用いて当時のプロジェクトについて語った。当時のアーキグラムの興味は静止画の中にかに動きや時間といった概念を取り入れることができるかにあり、車を住宅の一部として利用し車が付いたり離れたりすることで住宅の居住環境を変化させようとしたカーハウスや、時間とともに自然に組み上がる住宅など、実験的なプロジェクトを通して、本来動かない・変化しないと思われていた建築が動き・変化するというアイデアが表現されていた。そこには、都市が移動する『ウォーキング・シティ』（1964年）、組立て可能な都市が飛行船や自動車で運搬され移動と滞留を繰り返す『インスタント・シティ』（1968年）といった、アーキグラムの代表的なプロジェクトへとアイデアが展開していく初期の段階を見ることができた。

教育者としてのアーキグラム

アーキグラムのメンバーは現在、デニス・クロンプトン氏がAAスクール、デヴィット・グリーン氏がロンドンのウエ

ストミンスター大学、マイケル・ウェブ氏がクーパーユニオン、コロンビア大学とプリンストン大学でそれぞれ教鞭をとる教育者でもある。

常に建築の枠を飛び越えようとする姿勢とその構想力もさることながら、実際の建築を建てずともドローイングや映像といったあらゆる表現の方法を的確に用いることで自分たちのアイデアを鮮明に表現したかつてのアーキグラムのプロジェクトは、今でも私たちにとって最高の教材であろう。

On January 25th, a lecture entitled "Archigram and Education" was given at Titech by three former members of Archigram: Dennis Crompton, David Green and Michael Webb. First, Mr. Crompton talked about English society in the 1960's in an age of rapid techno-industrialization symbolized by the building of Concord, the Kennedy Space Center in the U.S., and the growth of satellite broadcasting. Then Mr. Green projected a short film. It included interviews showing the newfound critical recognition of architects and architecture, which made him anxious that the profession was becoming distanced from ordinary life. That suggests why Archigram used advertisements and comics as collage material in their presentations and succeeded in striking a familiar chord with people. Then Mr. Webb, who has taught drawing at Princeton, showed slides of Archigram's early projects including the original idea for "movable or changeable architecture" that developed into their well known "Walking City" and "Instant City".

All the members of Archigram are still in full activity, not only as architects but also as educators. Not to mention their highly imaginative quality, it was Archigram's drawings that also most clearly and accurately expressed their ideas. These remain at the very least an excellent source of teaching materials.

レポート：殿井 環 [修士2年]

Report: Tamaki TONOI (M2)

- アーキグラムとその周辺の活動を理解するための参考文献
- [a+u] 1977-10 特集：アンビルト・イングランド
- [SD] 1992-02 特集：ロンドン・アヴァンギャルド
- [a+u] 1989-12 臨時増刊：ピーター・クック
- [a+u] 2004-01 特集：アート・スペース
- …ピーター・クックの最新作を掲載
- 『建築文化』2001-10 特集1：「20世紀建築モデル・カタログ」、特集2：バックミンスターフラー
- 『アーキグラム』浜田邦裕/鹿島出版会、1999年
- 『アーキグラムの実験建築 1961-74』ピエ・ブックス、2005年
- …水戸芸術館での展覧会に合わせて出版されたもの
- 『ロンドン・アヴァンギャルド』浜田邦裕/鹿島出版会、1997年
- 『動く家ポータブルビルディングの歴史』ロバート・クロネンバーグ/牧紀男訳
- 『建築の解体 一九六七年の建築情況』榎崎新/鹿島出版会
- 『Archigram: Architecture without Architect』Simon Sadler(著)
- 『A GUIDE TO ARCHIGRAM 1961-74』田園城市文化事業有限公司(台湾)



講演風景 左から塚本助教授、D. Crompton、M. Webb、D. Green

講演会レポート 「都市を計画して街をつくる」

Lecture: Town Design through Urban Planning

水島 信 [建築家、ドイツ連邦共和国バイエルン州建築家協会]

Makoto MIZUSHIMA (architect, and member of Bavarian State Architect Society)



水島 信 Makoto MIZUSHIMA

1947年生まれ。1970年芝浦工業大学工学部建築学科卒業後、ドイツに渡りウィーン、ミュンヘンにて修業、1981年ミュンヘン・テクニカル・ユニヴェルシティ建築学部卒業・Diplom Ingenieurの称号取得、1982年よりミュンヘンにて修業、1990年バイエルン州建築家協会に登録、ARCHITEKTの称号を修得し独立、以後、ドイツ、日本で都市計画、建築設計を行う。

2004年12月7日から9日の3日間に渡り、建築家の水島信氏による特別講演が行われた。水島氏は1970年にドイツに渡り、都市計画、建築設計の仕事に携わってきた。また最近ではドイツの都市計画手法を日本に翻訳したかたちで活かそうと、氏の出身地である新潟市の都市計画にも積極的に関わっている。

講演では1、2日目にドイツ国内と周辺国の都市計画が紹介され、計画の意図や経緯、計画後の市街地の変化などが説明された。3日目は新潟を主な比較対象として、日本の状況やそれに対する氏の提案が説明された。講演には具体的事例についての多くの写真が用いられ、表面的な部分だけでなく計画意図や成立する背景が詳しく述べられた。

ヨーロッパの現場から

最近の事例として、自動車を街から排除し、人が安全で自由に歩き回ることのできる街づくりの計画が紹介された。これらの計画は、元来の都市に自動車という概念はなく、人間が利用しやすいようにつくられてきたものであるから理にかなった都市空間の再生方法であるという。こういった歩行者天国の試みが初めて導入されたミュンヘンや、路地に屋根を架けて展示空間として利用されているアムステルダムの実例などが成功例として紹

介された。

車を中心市街地から締め出し、歩行中心の市街地という本来のかたちに戻したことにより、街が劇的に活気を取り戻していった様子は非常に刺激的であった。

都市と個人の関係については、庭木が道に大きくはみ出して注意を受けたという自身の経験を例に取り上げながら説明がされた。自分の庭の木が都市と切り離すことのできないものとして存在し、都市と個人の関係が庭木のかたちとして現れているという話は、日本の状況と比較して非常に興味深いものであった。

ドイツにおける都市計画の基本骨格となるB-プランの精神は連邦建設法34条によく表れており、公共の利益に反しないことが計画の大前提だという。氏がドイツで行った計画の一例として、3つの広場を異なるキャラクターに仕立てあげ、それを市庁舎の中を通してつなぐことで、開かれた市庁舎を目指したという提案が紹介された。この計画は既存のB-プランを再検討し、新しい計画をB-プランの変更も含めて提案するというものであった。既存の計画を常に再検討する姿勢と、それが正しく評価される社会的環境が印象的であった。

外から見た日本の現場

日本に戻って来た水島氏の目に映る日本の都市計画は問題点だらけであり、様々な点が講演の中で指摘された。中でも新潟における路面電車導入の話は印象深いものの一つであった。35m未満の道路幅員での路面電車導入は不適切と考える氏にとって、議論なしにただ雰囲気だけで観光資源として路面電車が導入されようとしていることが非常に残念であるという。利用者にとって真に有益なものを入れて初めて計画は成り立つという氏の言葉は当然のように思えるが、このような現状の事例とあわせて聞くと、その重要性をあらためて意識させられた。

水島氏を感じる日本での疑問点は、都市レベルから断熱材の入れ方というディ

テールにまで及んだ。日本で建築物の空調機の配管が野ざらしにされていることに対する疑問は特に共感したものであった。無防備な状況を平然と作り出していることに強い憤りを感じ、安かろう悪かろうをやっていることで、文化、技術が廃れていくことを強く危惧されていた。

講演中は「こういうことをする神経がどうもわからない」という言葉がさかんに発せられた。新潟の計画では様々な手を尽くしてもなかなか問題点を問題点として受け入れてもらえず、日本での自らの立場をドン・キホーテにたとえていた。今回の講演はこの状況を何とか変えたいという熱意が大変こもったものであった。

講演を終えて

講演終了後には、ドイツの都市計画手法がどの程度日本に活用できるかなどについて学生から質問があり、納得のいくまで質問をくり返す活発な意見交換が行われた。水島氏はドイツの都市計画手法のエッセンスを日本式に翻訳するという方法があるのではないかと考えていること、日本の現状が変えうるものなのかといった疑問に対しては、変えようと思うことが何より大事であることを説明した。

当たり前と見過ごす都市の中に問題点はいくらでもあり、それを問題視している人がいることをまず知ってもらいたい、そして多くの人がその問題を各自で考えるようになってほしい、自身がそのための起爆剤になるという狙いが充分に果たされた、刺激的な講演であった。

A special lecture series by architect Makoto Mizushima was given December 7-9, 2004. Urban planning schemes in Germany and other European countries were presented for the first two days. Details of each plan were explained and changes in the cities after these had been carried out were noted. On the last day, examples in Japan, especially Niigata and Mr. Mizushima's proposal for that city, were explained.

レポート：井上 猛 [修士2年]

Report: Takeshi INOUE (M2)

世界の建築教育 シュツツガルト大学に留学して

My Days at the University of Stuttgart

鎌田詩織 [修士2年]

Shiori KAMATA (M2)

シュツツガルト大学を目指す

シュツツガルト大学（1829年創立・州立）は、本学と留学協定を結んでいます。都市計画関連の専攻では、近年注目されている地理情報システム（GIS）に関する講義が充実しており、私の研究分野でもあるため留学を決めました。

シュツツガルトについて

ドイツ南西部の都市シュツツガルトは、バーデン・ヴュルテンベルク州の州都で、メルセデス・ベンツやボルシェの本社があります。同州は自動車産業や精密機器・ハイテク産業が盛んで、ドイツの中でも経済発展が著しい地域です。生製品の6割を輸出しているため、外国との交流をより深めるべく、観光・ビジネス・留学に力を入れています。そのため、留学生は奨学金や住民登録税の免除など、様々な面で優遇措置を受けられることが特徴的です。

シュツツガルト市は、第二次世界大戦による壊滅的な被害を受けた後、自動車産業を中心に復興しましたが、その一方で、大気汚染やヒートアイランドの問題が深刻化しました。そもそも、シュツツガルト市は海から離れた平坦な地形ゆえに風速が弱く、谷地にあるため空気がよどみやすいという地理的な構造をしています。そこで、1980年代になって通風のよい都市構造に作り変えることが試みられました。丘陵地の冷気が夜間市街地に流れ込む現象に着目し、この冷気流を流れやすくするために、風の通り道「風の道」を設けました。その付近では、建物は5階以下で3m以上の間隔、

広幅員道路や小公園は100m幅、都心丘陵開発の抑制、風の抜け道や森林の保全など、市当局が風工学の研究成果を地区計画に積極的に取り入れ、一定の成果を得ています。このように、市全体の都市計画にも学ぶべきところが多々あります。

シュツツガルト大学の教育

シュツツガルト大学の特徴は、学生18,500人のうち実に25%が留学生であることと、10学部のうち8学部が理工系であることが挙げられます。ドイツの大学は一般的に6年制なのですが、正規留学生向けの修士課程は2年間で修士号を得られ、英語で講義を受けることができます。私は交換留学生という立場で、研究室には所属せず、自分が興味を持った講義を中心に受講しました。また、留学生にはドイツ語習得の授業が用意されています。最初の1ヶ月間は語学の勉強のみをすることとなりますが、この時に多くの友人ができ、言葉の問題も解消されていきました。

私が受講した講義は、都市計画や地理情報システム、統計学などです。都市計画の講義では、ドイツの都市計画に関する法律から中国を中心としたアジアの都市開発まで内容は幅広く、いずれも現在行われている計画・開発に重点が置かれていました。また、地理情報システムや統計学の講義は、実際にソフトを使用して問題を解いていくといった実践的な進め方でした。例えば、フィールドワークでは、大学敷地内の地点の緯度経度を衛星から受信して計測し、講義の中ではそれらをパソコン上に表示させ地図をつくったりしました。

構内には、図書館の他にパソコンを持ち込める自習室があり、グループワークや試験勉強の時には大変重宝しました。

シュツツガルト大学での生活

大学は森に囲まれ、私が利用した学生寮にはビオトープが設けられているなど、ランドスケープの素晴らしい環境です。普段は他の留学生と過ごし、バトミントンや構内で催されている映画を鑑賞したり、時には夕飯を交替で作りあったりもしました。また、休日は友人と近くの森や隣接国などへ出かけました。こうした生活を通じて、みんなで何かしよう、外に出かけて視野を広げようという姿勢を彼らから学びました。

留学で得たものは、友人、知識、交渉力、自己管理能力、等々…とてもここでは書ききれません。そして、もっと何かを得たい、知りたいという欲求が出てくるようになりました。留学を通じて、自分の大学生活がより満足できるものになったと思います。

The University of Stuttgart offers a number of courses dealing with the use of Geographic Information Systems in the field of city planning that are related to my own studies at Titech.

Stuttgart is the capital of Baden-Württemberg, the large southwesternmost state of Germany, and is well known for its automobile companies. World War II destroyed almost the entire city. Afterwards, it was rebuilt in such a way that winds blow away air pollutants. For example, building height is restricted and roads have been expanded to 100 meter width.

In Stuttgart University a quarter of the students come from outside Germany. I took part in a master's course specifically for overseas students. The teaching staff emphasized the present and various practical features of design.

I lived in a university dormitory, which was also an important part of my learning experience at Stuttgart.



市中心部：新宮殿と庭園



シュツツガルト大学



キャンパス周辺に広がる森

投稿作品紹介

Contributions

ここではコンペの応募案など、設計製図の授業以外で制作された学生の作品を募り、紹介しております。
なお、投稿者の所属は本誌の発行日現在のものです。

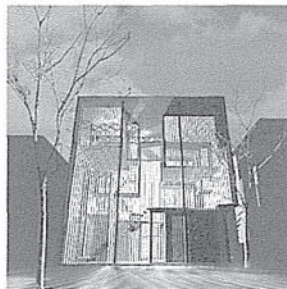
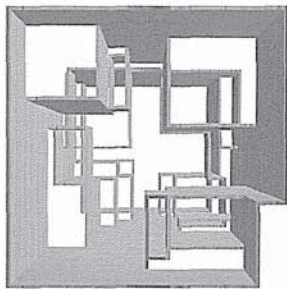
turn the Territory in side out

シェルター学生設計競技2004「1,000m³・木・住宅」最優秀賞

遠田博史 [修士2年]

Hiroshi TODA (M2)

10m×10m×1mのフレームの角部を織り込むことで、インテリアや室のボリュームを出現させる。その織り込んだフレームを10枚連結させることにより、建物や室の内外の領域やボリュームの表れ方、接続関係を問い直し、1000m³以上でも以下でない空間を産み出すことを目的とした。フレームを剛性の強い角部を一体精製するL型集成材を内外装に用いており、構造的解決を図っている。



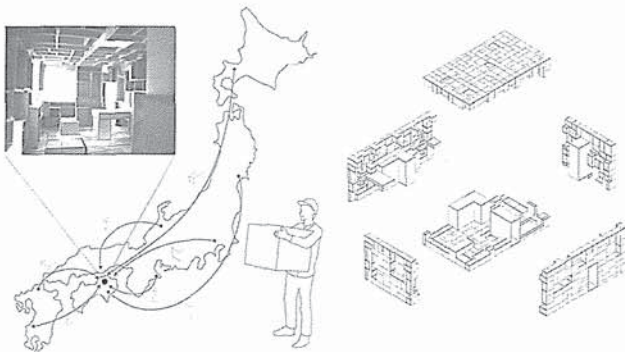
ハウス宅急便

第1回 FPデザインコンペティション「故郷の住まい」佳作

藤井亮介 [修士2年]

Ryosuke FUJII (M2)

これは様々な思い出を故郷で噛みしめながら過ごす故郷の住まいの提案である。彼は様々な移住先で、それぞれの生活と思い出を箱につめ、宅急便で故郷に送り続けた。年月が経って、各地から送られてきた箱が十分そろったとき、彼は故郷に帰り、そして家を作ることを思い出す。宅急便で送られてきた箱で家を作り、その内容物によって生活を支える。そして空の箱の向こうに見える風景が、現在の記憶を更新する。パッケージングされた思い出と共に、故郷での日々更新される風景を楽しむことに故郷の住まいの意義がある。



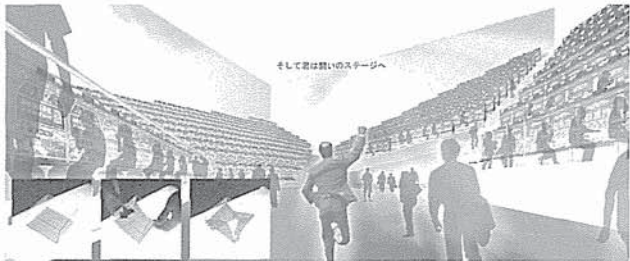
パチンコ・コロシウム

第1回「パチンコ・パチスロホール」デザインコンテスト 銅賞

浦木拓也 [日本設計]、中島俊明 [修士2年]

Takuya URAKI (Nihon Sekkei Associate), Toshiaki NAKAJIMA (M2)

従来のパチンコホールではみられない風景を獲得することを目的として、パチンコ台が配置される面を斜めに折り、エントランスと正対するように台を配置する操作を提案した。斜面に配置されたパチンコ台はエントランスを向いて、訪れた人たちに対して三次元的に構築された新たな風景を形成し、このときパチンコ台はパチンコを打つためのものではなく、風景を決定付ける重要なインテリアとしての側面が生まれると考えた。



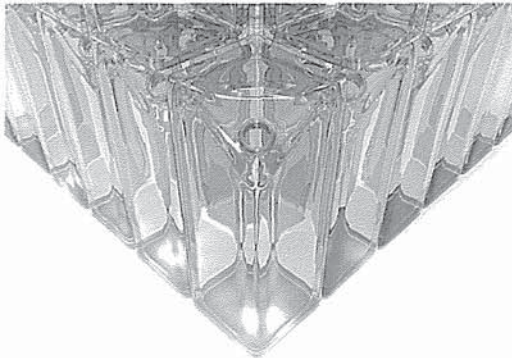
clustered bottle

Re-マテリアルコンペティション2004「ガラスのDNA」佳作

宇佐美洋平 [環境デザイン研究所]

Yohei USAMI (Environment Design Institute)

リサイクルが持つ属性には、ある程度リサイクルするものをまとめるというプロセスが必ず生じるという面がある。そのプロセスをより円滑にすることがこのガラス瓶の目的である。



LA MER!

Gaz de France コンペ2003「Urban Oasis」入選

岩永文英 [日建設計]、落合葉子 [佐藤総合計画]、

グット・ヨステナ [パリ第一大学]

Fumie IWANAGA (Nikken Sekkei Ltd.), Yoko OCHIAI (AXS SATOW Inc.),

GUT Justyna (École Doctorale Paris I Panthéon Sorbonne)

パリ10区にはヨーロッパ各地を結ぶ北駅や東駅といった主要駅があり、通勤や買い物の交通手段として使われるだけでなく観光客にも多く利用される。しかし、この10区は人々がくつろげるような広場や緑地が極めて少ないのが現状である。そこで東駅の屋根を緑化し、パリに広大な「花の海」を提案する。皆が午後をくつろぎ、待ち合わせをし、旅行中の一休みができるようなオアシスになるに違いない。



仙田満教授の特別講演

Professor Mitsuru Senda's Special Lecture



2005年3月10日(木)、今年で定年(満63歳)を迎えられた仙田満教授の特別講演が仙田研究室の卒業生有志の主催によって行われた。講演は平日の日中(14:30~16:30)に行われたが、それでも卒業生を中心に180名ほどの方が会場である緑ヶ丘講義室(M011)に集まり、熱心に教授の話に耳を傾けていた。講演では、建築作品から公園の遊具まで

仙田教授がこれまで手がけてこられた実作のスライドを紹介しつつ、建築家として今日までどのようなことを考えてきたか、また大学の授業を通じて学生にどのようなことを期待してきたかといったことが約2時間にわたって話された。

仙田教授は1968年の環境デザイン研究所設立から建築家として数多くの作品を手がける一方で、1984年の琉球大学の教授就任以降、名古屋工業大学を経て1992年より母校・東京工業大学の教授を今日まで務めてこられた。今後は主に環境デザイン研究所にその活動の場を移すとのことで、仙田研究室助手を務めてこられた井上寿さんも環境デザイン研究所にて設計活動に専念するとお聞きしている。仙田先生には本誌の編集委員長を第7号から14号まで引き受けていただ

き、そしてその間の編集実務はひとえに井上さんのご尽力によるものであった。お二方には、今後とも本誌の行く末を見守っていただきたいと思う。

A special lecture by Professor Mitsuru Senda, who retired from Titech this spring, was held on May 10, 2005 — organized by the alumni of Senda laboratory. Professor Senda told of his career as a professor beginning in 1984, when he joined the University of the Ryukyus, afterwards moving to Nagoya Institute of Technology and eventually becoming professor at his alma mater Titech from 1992. From now on, he will devote himself to his firm "Environment Design Office" established in 1968, with his laboratory's latest research associate Hisashi Inoue. We are also grateful to Senda Laboratory for editing "Ka" from No. 7 to No. 14.

レポート：山崎鯛介 [助手]

Report: Taisuke YAMAZAKI (Research Associate)

編輯後記

『ka』は、この号から従来の年2回刊行から1回刊行に変わりました。これからは「年間号」として、前年度1年分の学生の成果を紹介することになります。年間号にした主な理由は、内容の充実を図るため、具体的には、大学院の設計課題も扱うことにした点です。昨年度に、建築学専攻で「建築デザインコース」がスタートしました。これは、近く導入が予想されるUIAの建築家資格の国際互換制度(5年の建築設計教育が前提)に対応するためのもので、学部の3年間だけでなく、同コースの学生に修士課程の2年間をあわせて5年の設計教育を行うことになったことによるものです。本号ではその「デザインコース」の修士課程の設計作品も紹介しています。その中に中国・上海の同濟大学との共同ワーク

ショップの課題が載せられていることにかがわれるように、海外の大学との連携も視野に入っています。

今年4月8日に本学名誉教授・清家清先生が他界されました。その前から清家先生の展覧会が企画されており、先生にもそれをご覧いただくことを関係者は望んでいましたが、残念ながらそれはかなわぬことになりました。しかし、この時期にこそ、多くの人に先生のお仕事を知っていただくために、またその意義をあらためて考え直すために、展覧会は予定通り、7月23日から松下電工汐留ミュージアム(9月25日まで)と建築学会建築博物館ギャラリー(8月24日まで)で開催されることになっています。あわせてシンポジウムや見学会も予定されています。それに関連して、本号では

巻頭特集として清家先生の初期の住宅をとりあげ、それをテーマとする鼎談を掲載しました。また、本会会長の山下和正先生には、清家先生の思い出を記していただきました。

From this issue, "Ka" will be published annually. Together with the works by undergraduates, the new version also publishes drawings by graduate students of the "Design Course," which was begun last year in Titech in compliance with UIA standards for architectural education.

To our regret, on April 8th this year, Kiyosi Seike, well-known architect and Professor Emeritus at our university, died. An exhibition of his works had already been planned in the hope that he might be able to be present. The exhibition will be held as scheduled jointly in two museums in Tokyo: Matsushita Denko Shiodome Museum (from July 23 through September 25) and the AIJ Architectural Museum (from July 23 through August 24). In association with the event, this issue has published a discussion of Seike's early houses and a reminiscence of him by the president of Titech society of architectural design education, Kazumasa Yamashita.

TIT 建築設計教育研究会 会則

【第1条】 名称

本会はTIT建築設計教育研究会と称する。

【第2条】 目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援するとともに、学生と会員、会員相互の交流を促進し、設計技術向上の相互啓蒙を行うことを目的とする。

【第3条】 事業内容

本会は次の事業を行う。

①国内外の建築家・特別講師等の招聘、②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存、③展示会・講演会等のイベントの開催、④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行、⑤その他、本会の目的にかなう事業

【第4条】 会員

本会は本会の目的に賛同する会員によって構成される。会員は東京工業大学の卒業生を中心とした個人または、上記の個人の関与する法人とし、その会費を基金として本会を運営する。

【第5条】 会費

本会の会員の会費は1口10万円とし、0.5口(5万円)よりとする。期間は10年間以上6年間までとする。(期間削除=第8回総会にて承認) 個人会員は1口1万円とし、1口よりとする。(個人会員の設置=第8回総会にて承認)

【第6条】 役員

本会は次の役員を置く。

運営委員9名(運営委員長1名及び監査役1名を含む)

【第7条】 総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

【第8条】 会計

本会の会計年度は1月1日に始まり、12月31日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

【第9条】 存続期間

本会の存続期間は平成2年10月1日より平成8年9月30日までとする。(この項削除=第5回総会にて承認)

【第10条】 会則

本会則は平成2年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決議を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。

(以上)

〈細則〉

TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

【第1条】 役員

本会の役員構成は下記による。

運営委員9名(学外運営委員6名、学内運営委員3名)

運営委員の任期は3年とし、重任をきまげない。

東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授その他2名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により6名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

【第2条】 総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教官(教授・助教授)出席による集会とする。

役員による事業報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決議を行う。

(以上)

2004年度大岡山建築賞

2004年度大岡山建築賞受賞者は以下の通りに決定し、7月に開催予定の第15回総会にて授賞式が行われる。

●大岡山建築賞

能作文徳「雲の下にみちと平原が広がっている」(卒業設計)

松島潤平「エマージェンシー・デザインング イン アーキテクチャー」(修士論文(制作))

●大岡山建築賞銀賞

椛澤嘉孝「浜小屋風景」(卒業設計)

金野千恵「rhombi hill」(卒業設計)

吉田拓也「building plant」(卒業設計)

2005年度役員(05.4.30現在)

【顧問】林昌二(S28卒)(株)日建設計名誉顧問、

戸尾任宏(S29卒)(株)建築研究所アーキヴィジョン代表取締役

【運営委員長】山下和正(S34卒)(有)山下和正建築研究所代表取締役

所長

【副委員長】三栖邦博(S38卒)(株)日建設計取締役会長

【監査役】藤江澄夫(S35卒)

清水地所(株)代表取締役副社長

【運営委員】岡部富雄(S39卒)(株)構造計画研究所建築技術

本部常務取締役、服部紀和(S39卒)(株)竹中工務

店常務取締役、仙田満(S39卒)環境デザイン

研究所名誉所長、坂本一成(S41卒)東京工業大学

大学院教授、八木幸二(S44卒)東京工業大学

大学院教授、藤岡洋保(S48卒)東京工業大学

大学院教授

2005年度法人会員(05.4.30現在)

【社名/本会への代表】IAO竹田設計/竹田秀

道、アトリエテン/高田典夫、アール・アイ・エー

/宮原義昭、葛西潔建築設計事務所/葛西潔、

鹿島建設/長幸男、金箱構造設計事務所/金箱

温春、環境計画研究所/竹内義雄、環境デザ

イン研究所/仙田順子、久米設計/伊平則夫、建

築研究所アーキヴィジョン/戸尾任宏、建築資

料研究社・日建学院/井澤真悟、構造計画研究

所/岡部富雄、清田育男計画設計工房/清田育

男、竹中工務店/服部紀和、日建設計/三栖邦

博、日本設計/高橋徹、藤井建設/藤井正喜、山

田守建築事務所/宮原浩輔、レーモンド設計事

務所/森山眞興、渡辺建築事務所/渡辺益男

2005年度個人会員(05.4.30現在)

【氏名(卒年)】黒田正巳(S13)、高田清(S16)、

石田繁之介(S16)、堯天義久(S19)、栗原勝

(S22)、池田忠彦(S25)、遠藤正明(S25)、中島

隆(S26)、佐久田昌昭(S27)、濱田昭二(S27)、

中村晃(S28)、林昌二(S28)、半澤重信(S28)、

田中正美(S29)、戸尾任宏(S29)、吉井一夫

(S29)、高木賢(S30)、城間勇吉(S31)、渋谷実

(S32)、中神弘(S32)、松下謙三(S32)、青柳司

(S33)、太田雅三(S33)、佃隆介(S33)、増田一

真(S33)、富野壽(S34)、村口昌之(S34)、山下

和正(S34)、北村吉一(S35)、永井雄一(S35)、

野村邦夫(S35)、藤江澄夫(S35)、松野公一

(S35)、佐々木雄二(S36)、伊達美徳(S36)、

鈴木歌治郎(S37)、武岡茂生(S37)、三栖邦博

(S38)、有田桂吉(S39)、岩岡文彦(S39)、岡部

富雄(S39)、片野毅(S39)、仙田満(S39)、只野

康夫(S39)、野口三郎(S39)、服部紀和(S39)、

平川長(S39)、満田恒男(S39)、森山眞興

(S39)、味生威(S40)、野崎英彦(S40)、森下清

子(S40)、守谷一彦(S40)、岩沢二郎(S41)、坂

本一成(S41)、鈴木清友(S41)、大嶋顯世(S42)、

小西敏正(S42)、瀬尾和大(S42)、瀧口克己

(S42)、光岡宏(S42)、矢口彰(S42)、奥村光男

(S43)、西村博道(S43)、花島晃(S43)、細入誠

一(S43)、村田靖夫(S43)、和田章(S43)、藍澤

宏(S44)、佐藤俊作(S44)、清水弘道(S44)、杉

山文正(S44)、田中享二(S44)、牧圭介(S44)、

八木幸二(S44)、山口洋一郎(S44)、青木義

次(S45)、岡本慶一(S45)、岡本聖司(S45)、

鳥羽広明(S46)、梅干野晃(S46)、山口潤二

(S46)、大野隆造(S47)、猪子順(S47)、篠野志

郎(S47)、杉原繁樹(S47)、西尾秀平(S47)、小

河利行(S48)、荻谷武郎(S48)、日置滋(S48)、

藤井修二(S48)、藤岡洋保(S48)、保坂一夫

(S48)、森行臣(S48)、伊原基(S48)、有里公

徳(S49)、高田典夫(S49)、時松孝次(S49)、豊

田雪夫(S49)、三橋伸夫(S49)、渡辺徹(S49)、

上山博夫(S50)、河野晴彦(S50)、小林謙一

(S50)、清水亨(S50)、土屋隆(S50)、高橋寛

(S51)、田中一晴(S51)、宮木宗和(S51)、松永

浩一(S51)、木谷靖孫(S52)、鈴木敏彦(S52)、

前田康憲(S52)、猪村彰(S52M)、熊谷昌彦

(S53M)、浦春彦(S53)、白川裕信(S53)、宮本

文人(S53)、山口浩司(S53)、岡河貢(S54)、鈴

木敏彦(S54)、多田誠(S54)、常木康弘(S54)、

武田賢治(S54)、武田直行(S54)、前田哲男

(S54)、小室清高(S55)、三上貴正(S55)、吉

田親史(S55)、伊東龍一(S56)、乾靖(S56)、

仲野順一(S56)、宮本昌明(S56)、安田幸一

(S56)、高橋晶子(S57M)、津金猛(S57M)、小

林一雄(S57)、酒井星志(S57)、西田達生(S57)、

平島信一(S57)、山口勝巳(S57)、安部武雄

(S58D)、坂田弘安(S58)、横山裕(S58)、藤井

晴行(現職)、新井貴(S59)、幅田秀樹(S59)、

中村安志(S60M)、大佛俊泰(S60)、小田宏正

(S60)、加茂紀和子(S60)、所司護(S60)、湯淺

和博(S60)、若松均(S60)、中村芳樹(S61M)、

奥山信一(S61)、曾我部昌史(S61)、竹内昌義

(S61)、山田泰範(S61)、鈴木達也(S62)、塚

本由晴(S62)、鈴木重則(S63)、五十嵐規矩夫

(H1)、石川真治(H1)、今井賢治(H1)、栗原正

明(H1)、齊藤千尋(H1)、鹿野秀馬(H2)、山崎鯛

介(H2)、岩岡竜夫(H2D)、荒井庸行(H3)、片庭

修(H3)、中井邦夫(H3)、木島千嘉(H3M)、渡邊

哲也(H3M)、櫻井康雄(H4)、柄野淳司(H4)、菅

原正則(H5M)、足立真(H5)、保住秀樹(H5)、藤

岡務(H6M)、鍵直樹(H6)、是永美樹(H6)、井澤

真悟(H7)、木下芳郎(H7)、村田淳(H7)、井上

寿(H8D)、七田裕(H8M)、宗高菜々子(H8)、笠

井誉仁(H9)、西村康志郎(H9)、吉田佳代(H9)、

菅原麻衣子(H10)、荒井拓州(H11)、熊谷知彦

(H11)、車熙運(D2) 以上196名

編集委員：藤岡洋保／安田幸一／山崎鯛介 [以上幹事]／
竹内 徹／湯浅和博／足立 真／井上 寿／木下芳郎／是永美樹／
菅原麻衣子／中井邦夫
学生編集委員：青柳憲昌／藤村龍至／伊庭野大輔／大森彩子／梶村 健／
須賀貴康／鈴木宏昌／四ヶ所高志／立花美緒／深澤千賀子／府中拓也
取材・編集協力：大学院修士課程1年有志
デザイン：山口デザイン事務所 山口信博／狩野幸洋
翻訳：デイヴィッド・スチュアート
発行：TIT建築設計教育研究会 [2005年7月発行]
事務局：東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻 八木幸二研究室
定価：本体1,000円＋税

Editorial Committee: Hiroyasu FUJIOKA / Koichi YASUDA /
Taisuke YAMAZAKI (above steward) / Toru TAKEUCHI / Kazuhiro YUASA /
Makoto ADACHI / Hisashi INOUE / Yoshiro KINOSHITA / Miki KORENAGA /
Maiko SUGAWARA / Kunio NAKAI
Student Editorial Committee: Norimasa AOYAGI / Ryuji FUJIMURA /
Daisuke IBANO / Ayako OMORI / Ken KAJIMURA / Takayasu SUGA /
Hiromasa SUZUKI / Takashi SHIKASHO / Mio TACHIBANA /
Chikako FUKASAWA / Takuya FUCHU
Reporters: M-1 student volunteers
Design: Nobuhiro YAMAGUCHI (Yamaguchi Design Office)
Translation: David B. STEWART
Publisher: TIT society of architectural design education (July 2005)
(secretariat: Koji YAGI Lab. Dept. of Architecture, Graduate School of Science
and Engineering, Tokyo Institute of Technology)
Price: 1,000 yen

表紙写真：清家 清 (マルセイユのユニテ・ダビタシオンにて)
Cover: Kiyosi Seike at Unité d'Habitation in Marseille, France